

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

属性叙述文の統語的・意味的分析

鈴木 彩香

2016 年度

目次

第 1 章 序論	1
1.1 研究の背景	1
1.1.1 属性叙述文研究：日本語の記述的な研究の知見	2
1.1.1.1 叙述類型の対立の基本的な捉え方	2
1.1.1.2 益岡 (1987, 2000, 2004, 2007, 2008)	4
1.1.2 総称文研究：英語等を対象とした理論的研究の知見	8
1.2 問題提起	10
1.3 本論文のアプローチ	13
1.4 本論文の構成	16
第 2 章 事象叙述／属性叙述の対立に関わる諸概念	18
2.1 統語構造からのアプローチ：Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)	18
2.1.1 述語の意味的性質(SLP/ILP)	18
2.1.2 名詞句の解釈	20
2.1.3 統語構造	23
2.2 情報構造からのアプローチ：Cohen & Erteschik-Shir (2002)	28
2.3 テンスからのアプローチ：Krifka et al. (1995)	30
2.4 本章のまとめ	32
第 3 章 日本語における事象叙述／属性叙述の対立と 主語	33
3.1 Kratzer、Diesing のアプローチと情報構造	34
3.1.1 先行研究と問題の所在	35
3.1.1.1 日本語の裸名詞句の解釈と助詞：Endo (1994)	35
3.1.1.2 ガ格の 2 種類の用法：Kuno (1973)、久野 (1973)	37
3.1.1.3 問題提起	38
3.1.2 情報構造と名詞句の解釈	40
3.1.2.1 情報構造と日本語の助詞：Heycock (1993, 2008)	40
3.1.2.2 TP 指定部の位置の細分化	43
3.2 Kratzer、Diesing のアプローチとテンス	45

3.2.1	テンスと主語の統語的位置	46
3.2.2	本論文における枠組みの提示：5つの要因の体系化	49
3.2.3	テンスの総称性と統語的環境	54
3.2.3.1	存在テンスと主語からの数量詞遊離	54
3.2.3.2	総称テンスと「ものだ」補文	57
3.3	本章のまとめと今後の課題	61
第4章	日本語における事象叙述／属性叙述の対立と 目的語	65
4.1	先行研究と問題の所在	66
4.1.1	目的語名詞句の解釈	66
4.1.2	日本語の主格目的語	68
4.2	対格目的語と主格目的語の対立	71
4.3	評価系の主格目的語と所有系の主格目的語の対立	76
4.3.1	主格目的語をとる単純系述語の二分類	76
4.3.2	評価系述語と所有系述語の意味的・構造的相違	79
4.4	本章のまとめと今後の課題	85
第5章	非状態動詞におけるル／テイルの対立： アスペクト形式に着目した習慣文の分析	89
5.1	先行研究：叙述類型とアスペクト	91
5.1.1	SLP/ILP とアスペクト	91
5.1.2	日本語のアスペクト研究	93
5.1.3	本章での問題提起	95
5.2	説明の枠組み：「個体の量化」と「イベントの量化」	97
5.3	ル形習慣文とテイル形習慣文の対立	100
5.3.1	ル形習慣文とテイル形習慣文の対立が現れる統語的環境	101
5.3.1.1	主語からの数量詞遊離	101
5.3.1.2	副詞との共起関係	103
5.3.1.3	「恒常条件的関係」を表す連体従属節への生起	106
5.3.1.4	「ものだ」補文	108
5.3.2	意味解釈と統語構造の写像関係	109

5.4	文法的アスペクトとテンスの総称性	113
5.5	本章のまとめと今後の課題	118
第 6 章 状態動詞におけるル／テイルの対立： アスペクト形式に着目した知覚動詞の分析.....		
6.1	知覚動詞のアスペクト形式	123
6.1.1	オノマトペの意味と述語形式	123
6.1.2	味覚・嗅覚・聴覚を表す動詞のアスペクト形式：澤田 (2012).....	126
6.2	知覚を表すオノマトペ動詞と SLP/ILP	127
6.2.1	知覚を表すオノマトペ動詞のアスペクト	127
6.2.2	知覚を表すオノマトペ動詞の項構造	130
6.2.3	知覚を表すオノマトペ動詞とテンス	132
6.3	本章のまとめ：述語のアスペクトと SLP/ILP	134
第 7 章 結論		
7.1	本論文全体の意義	136
7.2	各章のまとめ	137
7.2.1	第 1 章および第 2 章	137
7.2.2	第 3 章	138
7.2.3	第 4 章	139
7.2.4	第 5 章	140
7.2.5	第 6 章	141
7.3	今後の課題	142
参考文献		145
各章と既発表論文および口頭発表との関係		154

第 1 章 序論

1.1 研究の背景

文の基本的な類型として「特定の時空間に存在する出来事を叙述するタイプ」と「特定の時空間によらない恒常的な属性を叙述するタイプ」が存在し、文法現象を考える上でこれらを区別すべきことは、通言語的にもよく知られた事実である。ここではまず、このような文の類型を扱う研究を大きく、日本語を対象とした記述的研究と英語等を中心とした理論的研究に二分して概観する。

日本語の記述的な文法研究において、この 2 タイプの違いは「事象叙述」と「属性叙述」の対立として知られている(益岡 1987)。典型例としては、(1)のような対立を示すことができる。

- (1) a. 太郎が今、りんごを食べている。 [事象叙述]
b. 太郎は背が高い。 [属性叙述]

(1a)は典型的な事象叙述の例であり、特定の時空間に結びつけられた太郎の動作について述べる文である。一方、(1b)は典型的な属性叙述の例であり、特定の時空間によらない、太郎の恒常的な属性について述べる文である。この対立は、佐久間(1941)の「物語り文」と「品さだめ文」の対立をはじめとして古くから認められてきたものであり、このような対立に関して、日本語の文法研究における記述には多くの蓄積がある(佐久間 1941; 三上 1953; 益岡 1987, 2000, 2008; 影山 2012 他多数)。

一方、当然のことながら、事象叙述と属性叙述の対立に相当する問題を扱ってきたのは、日本語の文法研究に限られない。英語等の冠詞を持つ言語を対象とした文法研究では、事象叙述と属性叙述の対立は不定名詞の意味解釈の問題として扱われることが多い。英語の 'dogs' や 'cats' のような裸複数名詞(bare plural)は、解釈の可能性として、存在的な解釈(existential reading)と総称的な解釈(generic reading)の 2 種類があり、用いられる述語の意味的性質によって主語名詞の解釈の可能性が変わることが知られている。(2)は、特定の時空間に結びつけられた動作や一時的な状態を表す場面レベル述語(stage-level predicate; 以下 SLP)と主語の恒常的な性質を述べる個体レベル述語(individual-level predicate; 以下 ILP)の

対立を表している。

- (2) a. Firemen are available. SLP [存在／総称]
- b. Firemen are altruistic. ILP [*存在／総称]

(2a)の available のような SLP を述語とする裸主語名詞は、「出動可能な消防士がいる」という存在的な解釈と「消防士は一般に出動可能であるものだ」という総称的な解釈の双方に解釈可能である。一方、(2b)の altruistic のような ILP を述語とする裸主語名詞の場合、「利他的な消防士がいる」というような存在解釈は得られず、「消防士は一般に利他的なものだ」という総称解釈のみが得られるとされる。裸名詞主語が存在解釈を受けた文は事象叙述文、総称解釈を受けた文は属性叙述文に相当するものとして捉えることができる。このような文の総称性(genericity)については、特に形式的な意味論の分野で盛んに議論が行われており、意味解釈の違いにどのような説明を与えるのかという問題に理論的にアプローチする試みが行われてきた(Milsark 1974/1979; Carlson 1977/1980; Kratzer 1989/1995; Diesing 1992; Chierchia 1995, Krifka et al. 1995; Cohen and Erteschik-Shir 2002 他多数)。

以下では、1.1.1 節で日本語の属性叙述文研究、1.1.2 節で英語等の言語を中心とした総称文研究を概観し、両者が共通した問題を扱っており、類似した概念が提示されていることを指摘する。

1.1.1 属性叙述文研究：日本語の記述的な研究の知見

1.1.1.1 叙述類型の対立の基本的な捉え方

上述の通り、「事象叙述」と「属性叙述」の対立における重要な指摘は佐久間(1941)に遡ることができる。「物語り文」とは「事件の成行について述べる(佐久間 1941: 153)」とされる文の類型であり、「品さだめ文」とは「物事の性質や状態を述べたり、判断をいいあらわしたりする(佐久間 1941: 153)」文の類型を指す。佐久間(1941)は、両者が「時所的限定」という概念において対立していることを指摘しており、物語り文においては時間的、空間的に限定が必要であるのに対し、品さだめ文ではそのような限定が行われなとしている。

また、そのような意味的対立が、文の構造的な違いにも反映されているとする指摘は非常に重要である。佐久間(1941)において「品さだめ文」はさらに下位分類

として「性状規定」と「判断措定」に分けられ、「物語り文」と「品さだめ文」はそれぞれ、文構造としては以下の(3)(4)のような形式を持つものとして規定されている。

(3) 物語り文：(何々)が(どうか)する／した。

(4) 品さだめ文

a. 性状規定：(何々)は(こうこう)だ。

b. 判断措定：(何々)は(何か)だ。

(3)(4)の文構造の対立は、どのような述語が選択されるか、また主語がガ／はいずれの助詞でマークされるか、という2つの観点から捉えることができる。まず、述語の観点からは以下のように言える。すなわち、(3)のように物語り文は基本的に動詞を述語とする文である一方、(4)のように品さだめ文の中でも性状規定の文は形容(動)詞を、判断措定の文は名詞を述語にとることを基本とする。三上(1953)はこのような形式面を重視し、類型としては佐久間を踏襲しつつも、「物語り文」に相当する文を「動詞文」、「品さだめ文」に相当する文を「名詞文¹」と名づけている。また、主語をマークする助詞の観点から、佐久間(1941)は品さだめ文では主語がガではなくハでマークされることが基本であることを指摘している。

しかし同時に、上述の対応は絶対的なものではないことも指摘されている。物語り文／動詞文が動詞以外を述語とすることがあれば、品さだめ文／名詞文が形容(動)詞や名詞以外を述語とすることもある。あくまでこれらの対立は品詞に基づくのではなく、文全体が「何について述べているか」という文レベルの意味の違いであると見なされているのである。また、主語をマークする助詞も、この対立を絶対的に決定づける要因とはならない。三上(1953)では、名詞文は原則的に有題であるのに対し、動詞文は有題無題半々くらいだと述べられている。つまり、主語がハでマークされた文が品さだめ文／名詞文である、と判断することはできないということである。

¹ 佐久間(1941)と同様に、三上(1953)においても「名詞文」は「形容詞文」と「(コピュラ文に相当する)準詞文」に下位分類されており、それぞれが佐久間の分類の「性状規定文」と「判断措定文」に相当する。

1.1.1.2 益岡 (1987, 2000, 2004, 2007, 2008)

叙述類型に関する益岡の一連の研究では、佐久間、三上といった先行研究の分類を受け継ぎつつ、「叙述」ということをより強調した文類型の在り方が提示されている。「叙述」とは、「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化(益岡 1987: 20)」とされるものであり、現実世界の事態と言語表現の間を結びつける抽象的な概念のレベルを問題にするものである。益岡 (1987)の分類では、物語り文／動詞文に対応するものが「事象叙述文」、品さだめ文／名詞文に対応するものが「属性叙述文」であり、それぞれ以下の(5)のように定義されている。

- (5) a. 事象叙述：現実世界の或る時空間に実現・存在する事象(出来事や静的事態)を叙述するもの
- b. 属性叙述：現実世界に属する具体的・抽象的実在物を対象として取り上げ、それが有する何らかの属性を述べるもの

ここでは、益岡 (1987, 2000, 2004, 2007, 2008)における重要な指摘を2つのポイントに絞って見ていく。まず一点目は、事象叙述と属性叙述の文構造の違いを、佐久間 (1941)の指摘しているものより明確な形で提示している点である。益岡 (1987, 2000)によれば、事象叙述文は述語を主要部(head)とし、名詞句を補足語(complement)としてとる内心構造をとっている。事象叙述文の構造は、以下の(6)のように表すことができる。

- (6) a. 事象叙述文の構造
[補足語 + 補足語 + [述語]]
- b. [山口先生が 生徒を [しかった]]. (益岡 1987: 43)

述語を中心とした構造を持つ事象叙述文に対し、属性叙述文は「主題」とそれに対する「解説」の2つの要素によって構成される。つまり、属性叙述文は名詞句と述語の結合が外心構造を成すとされている。属性叙述文の構造は、以下の(7)のように表すことができる。

- (7) a. 属性叙述文の構造
主題 —— 解説 [補足語 + [述語]]

b. 山口先生は [生徒に [きびしい]]. (益岡 1987: 44)

事象叙述文の主語は述語のとり補足語の 1 つであり、他の目的語などの補足語と等価に扱われるものであったが、属性叙述文の主語は、主題という形で補足語とは切り離されて存在している。このように、事象叙述文と属性叙述文の構造の決定的な違いは、主語がどのような形で述語と結びついているかという点であると言える。

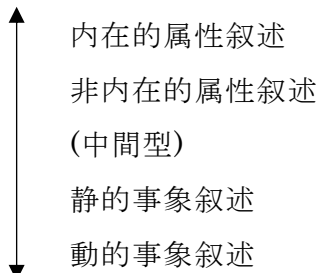
そして、益岡 (2004, 2007)では、このような構造の違いにともない、主語をマークする助詞の違いについても言及されている。属性叙述文は文構造上の要請として、主文では一般に主語がハでマークされるのに対し、事象叙述文の主語がガとハのいずれでマークされるかは、談話レベルでの条件によって決まるものであることが指摘されている。つまり、(8a)のような属性叙述文の主題と(8b)の属性叙述文の主題は、前者が「文内主題」であるのに対し、後者が「談話・テキスト主題」とあるという点から区別されることになる。

(8) a. 山口先生は生徒をしかった。

b. 山口先生は生徒に厳しい。

益岡 (1987, 2000, 2008)の叙述類型の捉え方に関して、着目すべきポイントの二点目は、事象叙述と属性叙述の対立を連続的なものとして捉え、叙述の意味を語用論なレベルも含めた広義のものと捉えている点である。益岡 (1987, 2000)は、事象叙述／属性叙述という対立を、時間的な限定という観点から(9)のような連続体として捉えている。それぞれの典型例は以下の(10)に挙げられる。

(9) <典型的属性叙述>



<典型的事象叙述>

(益岡 1987: 35)

- (10) a. 花子はわがままだ。 (内在的屬性叙述)
 b. 花子はパーティーの間中、ずっとわがままだった。(非内在的屬性叙述)
 c. 月の出前の海はたいそう暗かった。 (中間型)
 d. その近くに T 大のロケット研究所がある。 (静的事象叙述)
 e. 雷が落ちた。 (動的事象叙述)
- (益岡 1987: 21-34)

益岡 (1987)は、(10a, b)に示されるように、同じ「わがままだ」という形容詞であっても、超時的・本質的屬性を表す「内在的屬性叙述文」になる場合と、時間的な限定が付加され得る「非内在的屬性叙述文」となる場合があることを指摘している。そして、事象叙述文に関しても動的な事象と静的な事象の区別を設け、非内在的屬性叙述と静的事象叙述の中間²となる(10c)のような例も挙げている。

そして、この叙述類型の対立に関しても、佐久間、三上らの分類と同様に品詞との関係性が言及されている。具体的には、屬性叙述文の典型が名詞述語文であり、事象叙述文の典型が動詞述語文であること、また形容詞に関しては、屬性形容詞と感情形容詞という区別に従って、それぞれ屬性叙述と事象叙述に分けられることが指摘されている。しかし、このような品詞分類は、叙述の類型と完全に並行するわけではない³。(11)は名詞述語が事象叙述を表す例、(12)は動詞述語が屬性叙述を表す例である。

- (11) a. 明けがた目をさまして見ると、おもいがけない吹雪だった。
 b. タンスが丸焼けだったんだもの。 (益岡 1987: 27)
- (12) a. 咲子という名前の前山婦人は、女の子が一人あった。
 b. 弟は色々なスポーツができる。 (ibid: 28)

このような分類からは、益岡の一連の研究における事象叙述／屬性叙述という

² 非内在的屬性叙述の例は時間的限定を受ける点で、部分的ではあるが静的事象叙述に類似した性質を持つと述べられている。そのため、(10c)の例は時間的限定だけでなく空間的限定まで受ける点で一層、静的事象叙述に近いとされている。

³ 屬性叙述文に用いられる述語の品詞に着目した研究としては、澤田 (2002)が挙げられる。澤田 (2002)では、屬性叙述文に生起する名詞述語、形容詞述語、動詞述語に着目し、それぞれの構文の成立に関わる語用論的・意味的要因が異なることが論じられている。

概念は、述語のみが決めるものではなく、文全体の要素が一体となって決定するものであるという見方が強いことが分かる。また、時間的限定性と叙述の対立に一定の関係を認めつつも、それを両者の決定的な違いとして捉えるのではなく、連続性の中で捉える見方は、益岡の叙述類型の対立が、「何について述べるか」という抽象的なレベルにおける概念の対立であることを示している。このような考え方は、益岡 (2008)において「内在的属性叙述」の下位分類として、「過去のイベントを履歴として所有する(益岡 2008: 6)」とされる(13a)のような例が示されていることから明らかである。

- (13) a. 友人はフランスに何度も行った。
b. 友人はフランスに何度も行ったことがある。 (益岡 2008: 6)

(13a)のような例は「履歴属性」と呼ばれ、(13b)のような所有文にパラフレーズすることが可能な意味を持つことから、内在的属性叙述の一類型として位置づけられている。(13a)の表しているイベント自体は時空間上に位置づけることが可能なものであるが、そのようなイベントを履歴として所有していること自体は、特定の時間軸上にとらわれないと見ているのである。

このような例を属性叙述の射程に入れるためには、時間的限定性というものを複層的に捉える必要がある。すなわち、(13a)の時間的限定性を、文自体が持つ述語の状態性やテンスなどから形式的に判断するのではなく、(13b)のような他の文へのパラフレーズの可能性を考えなくてはならないのである。このような例を属性叙述と見ることができるかどうかについては、語用論的な要因も大きく関わってくる。例えば、(13a)の場所句の「フランス」を「中央図書館」に変えた(14)のような例は、履歴属性として読むことが難しい。

- (14) 友人は中央図書館に何度も行った。

このような履歴属性としての許容度の差には、どのようなイベントであればそれを履歴として所有する人物の属性として想起されやすいかという、語用論的な問題が大いに影響を与えている。

ここまで見たように、益岡の事象叙述／属性叙述という分類は、文の表すイベントが特定の時間軸上に位置づけられるか否かという二項対立的な問題ではなく、

あくまで「文の述べる事態が事象／属性のどちらとして解釈されやすいか」という、連続的なスケールの上で捉えられるものである。そのため、事象叙述／属性叙述の対立は、様々なレベルの要因が関与した、文全体の包括的な意味の対立として扱われることになる。

益岡の叙述類型論は、その後多くの研究者に受け入れられ、日本語の様々な現象に関して属性叙述という観点からの分析が行われている。例えば現象面から挙げるならば、受動文の分析において事象叙述受動文と属性叙述受動文を区別する必要があることが知られている(益岡 1987)。また、「太郎は次郎を馬鹿だと思っている」のようないわゆる「主語から目的語への繰り上げ構文(Subject-to-object raising)」の補文は、属性叙述文でなければならないことが指摘されている(益岡 2008; Horn 2012 他)。また、影山 (2004)の分析に代表されるように、「青い目をしている」のような例で知られる構文に関しても、属性叙述という観点が用いられている。主題標識の面からの指摘としては、「って」「ときたら」「というのは」といった形式を扱う岩男 (2008)、益岡 (2012)などの研究が挙げられる。また、標準語に対する観察だけでなく、方言に現れる属性叙述の形式についても研究が進んでいる(影山 2009, 2012; 加藤 2012 他)。

ここまで、主に益岡の論を中心に日本語の属性叙述文研究を概観し、時間限定性という概念や、助詞の選択、文構造の違い、用いられる品詞の傾向など、非常に重要な指摘がなされてきたことを見た。また、文全体の表す叙述の意味にアプローチする際、形式を重視して個々の要因とそれらの規則的な組み合わせから構成的(compositional)に意味が組み上げられると考えるよりも、それらが一体となって文全体の叙述の特徴を決定しているとする「全体論的(holistic)なアプローチ」がとられていることを指摘した。

1.1.2 総称文研究：英語等を対象とした理論的研究の知見

本節では、前節で見た日本語の属性叙述文研究においてもたらされた記述的な研究の知見に対し、異なる背景を持つ英語等の総称文研究においても、非常によく似た概念や枠組みが提出されていることを指摘する。

1.1.1節の冒頭で見た通り、英語の総称文研究において中心的な課題の一つとされてきたのは、裸複数名詞の意味解釈と述語の意味的性質の相関関係である。(15)に見るように、SLPの裸複数主語には存在解釈と総称解釈の両方が許されるのに対し、ILPの裸複数主語には総称解釈しか許されないという非対称性が存在する。

- (15) a. Firemen are available. SLP [存在／総称]
b. Firemen are altruistic. ILP [*存在／総称] ((2)再掲)

このような非対称性に対し、SLP と ILP が異なる統語構造を持つと仮定することで説明を与えている研究として、Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)のアプローチが挙げられる。Kratzer、Diesing のアプローチでは、SLP と ILP の違いは、SLP が時空間的場所(spatiotemporal location)の項位置を持つのに対し、ILP はこれを持たない点にあると考えられている⁴。そして、そのような項構造の違いにともない、SLP と ILP が統語構造上異なる主語位置を持つと仮定することで、両者の主語に得られる解釈の非対称性に説明を与えている。Kratzer、Diesing の議論は第 2 章において詳しく見ていくが、ここで重要なのは属性叙述文研究で得られた知見との類似性である。SLP と ILP に時空間項の有無を想定し、両者に主語位置の違いを仮定するという考え方は、事象叙述文と属性叙述文の違いを時間的限定性に求め、主語と述語の関係性の違いを仮定する考え方と非常に似ている。

しかし、一見したところ同じ結論が得られているように思われるが、両者の研究には違いも存在する。SLP/ILP という述語の語彙的な意味における対立と、事象叙述／属性叙述という文全体の叙述の意味における対立は、レベルが異なるものである。益岡の分析では全体論的なアプローチがとられ、叙述という最終的なアウトプットを問題にしているのに対し、述語に着目した Kratzer、Diesing の分析では、構成的なアプローチがとられている。事象叙述／属性叙述という対立と用いられる述語の関係については、品詞の観点からの指摘があるが、品詞分類が叙述の類型と完全には並行しないことから、属性叙述文研究においては述語が中心に据えられてきたわけではなかった。これに対し、Kratzer、Diesing のアプローチは、叙述の問題を主語名詞句の解釈と述語の意味的性質の関係に分解し、文全体の叙述の意味が派生されるプロセスを捉えようとする試みと見ることができる。

また、両者の研究は、扱う現象の射程も異なる。Kratzer、Diesing のアプローチは、事象叙述／属性叙述の対立を主語名詞句の解釈という観点から分解して論じているのにともない、属性叙述文研究より狭い範囲の現象を扱っている。存在解

⁴ ここで時空間項とされている抽象的な項は出来事項(event argument)とも呼ばれる。出来事項の考え方は Davidson (1967)に遡ることができる。SLP と ILP の項構造の違いを仮定する Kratzer (1989/1995)の論については、2.1 節で詳しく取り上げる。

積と総称解釈の対立を論じることができるのは、基本的に不定名詞句を主語とした場合のみである。(16a,b)は裸複数名詞、定名詞をそれぞれ主語とした文であり、いずれも文全体の叙述としては属性叙述文と見ることができる。

(16) a. Firemen are altruistic.

b. John is altruistic.

裸複数名詞は述語の性質によって、与えられる解釈の可能性が異なることを述べたが、定名詞はすでにそれ自身で定まった解釈を持つものである。つまり、主語の存在／総称解釈のどちらが与えられるかということを問題にできるのは、裸複数名詞を主語にした場合に限られる。つまり、(16a,b)の共通点を捉えるためには、名詞句の解釈のみに着目するのではなく、それを包括する概念が必要とされるということになる。

1.2 問題提起

ここまで、日本語の属性叙述文研究および英語等を対象とした総称文研究の双方において、時間的限定性に着目し、文構造の違いを想定する分析が示されている点で共通していることを見た。また、全体論的なアプローチをとるか構成的なアプローチをとるかという観点や、扱うことのできる現象の範囲など、両者の研究に違いが見られることにも言及した。ここでは、両者の研究の議論の発端となる現象や重視している観点が異なるため、研究成果を相互に参照し、体系的に結びつける試みはこれまで十分に行われてこなかったことを指摘する。そして、それぞれの研究に足りない観点は、両者を結び付けることによって補われるものであることを述べる。

日本語の属性叙述文研究における問題点は、事象叙述文に比べ、構造的な分析が遅れていることである。この点については影山 (2009)に言及があり、これまでの統語的な構造分析は主に事象叙述文が対象とされ、属性叙述文は長らくその対象にされてこなかったことが指摘されている。そして、影山 (2009, 2012)においては、属性叙述文と事象叙述文の構造が根本的に異なるものであることが指摘されている。

影山 (2009, 2012)は、通言語的な現象を射程にし、属性叙述文には事象叙述文の構造的制約に従わない例が多く存在するという事実を指摘するとともに、両者

の構造が全く異なるものであることを主張している。(17)(18)は事象叙述述語と属性叙述述語の項構造の対立である。事象叙述述語の項構造に対し、属性叙述述語には階層構造さえないということが主張されている。

(17) 事象叙述述語の項構造：(Ev (x (y (z))))

(18) 属性叙述_[ママ]の項構造

a. (x, y, z) または

b. (Ev[^] (x, y, z)) (^は抑制を表す) (影山 2009: 28)

(17)(18)に見る Ev とは出来事項(event argument)を意味しており、事象叙述述語と属性叙述述語がその有無において対立しているとする考え方は、Kratzer (1989/1995)において、SLP/ILP の項構造の違いが時空間項の有無として捉えられていることと類似した捉え方である。(17)では事象叙述述語が動作主、対象といった意味役割としてとる項に加え、抽象的な出来事項を持つことを表している。一方、(18)は出来事項が属性叙述文には存在しない、ないし抑制されていることを示している。そして、(17)(18)の対立が表しているのは、出来事項を持つ事象叙述述語は階層的な構造を持っているのに対し、出来事項が抑制された属性叙述述語は平板な項構造を持っているということである。影山は、属性叙述文一般に他動性の低下という共通した特徴が見られるとし、その原因を出来事項の抑制に求めている。そして、出来事項が抑制されることによって、属性叙述文の平板な項構造が引き起こされると主張している。

このような影山のアプローチは、属性叙述文の共通性を広範な現象から大きく捉え、事象叙述文との違いを明確にする上で非常に有益なものである。しかしその反面、属性叙述文をより構成的に、構造に還元して分析することを拒絶するアプローチでもある。影山 (2009, 2012)のアプローチは一見したところ、出来事項という概念を用いることで Kratzer、Diesing のアプローチとも共通点を持ちつつ、益岡の属性叙述論を発展させているようにも思える。しかし、属性叙述述語には項構造自体が存在しないと考えることは、属性叙述文を構造的な分析の対象から外してしまうことに繋がる。属性叙述文に対して平板な項構造を仮定し、事象叙述文とは全く違う制約の働く領域であるとした場合、言語を構造的に分析する上で属性叙述文は孤立した存在にならざるを得ない。しかし、影山 (2009)も認めている通り、この 2 つの叙述類型は完全に分断されたものではない。ことさら属性叙述文

の逸脱性ばかりを強調するのではなく、相互の特徴を比較しながら、両者の対応関係がより明らかになるようなアプローチの方が生産的である。その際に、属性叙述文には項構造自体がないと考えるのではなく、益岡および **Kratzer**、**Diesing** らが想定しているように、その違いを主語位置に還元することで、事象叙述と属性叙述を対応関係で捉え、構造的に分析することが可能になる。

佐久間、三上、益岡から影山の研究に至るまで、属性叙述文を事象叙述文との対応の中で構造的に分析するという観点が欠けているのは、全体論的なアプローチが重視されているためだと考えられる。しかし、構造的な分析をするためには、個々の要素が総和となって文全体の意味が決まると考えるのではなく、何の要素を中核として文全体の意味を捉えるか、ということを確認しなければならない。つまり、叙述としての意味を有意義な要素に分解し、それらがどのように組み上げられるかを問題にする、構成的なアプローチをとる必要がある。その際には、総称文研究において着目されているように、名詞句の解釈と述語の意味的性質の相関関係から、叙述としての意味を捉えることが有効である。

一方で、名詞句の解釈に述語の構造の違いから説明を与える **Kratzer**、**Diesing** のアプローチにも欠けている観点が存在する。**Cohen & Erteschik-Shir** (以下 **C & E-R**; 2002)では、統語構造ではなく情報構造から説明を与える可能性が示されている。概略を簡潔に述べると、文の中でトピックとなる裸複数名詞に総称解釈、フォーカスとなる裸複数名詞に存在解釈が与えられるとするものである。日本語の属性叙述文において指摘されてきたハ／ガの助詞の選択に関しては、多くの記述的な研究の蓄積が存在し、情報構造とも密接な関係がある (**Heycock** 1993, 2008 他)。**Kratzer**、**Diesing** らが想定している **SLP/ILP** の構造の違いと、情報構造がどのような関係にあるかということについて、整理する必要があると言える。そしてまさに、助詞が形式的に存在する日本語を分析対象とし、これまでに蓄積されてきた日本語の研究の知見を援用することが、その目的の達成のためには有用である。

また、不定名詞の存在／総称解釈という観点から捉えられてきた問題を、定名詞においても並行的に捉えようとした際に、それらを包括する概念が必要とされることは、前述の通りである。その点、日本語の属性叙述文研究においては、事象叙述と属性叙述の対立が不定名詞に限って論じられているわけではなく、時間的な限定、すなわちテンスの観点から捉える試みがなされてきた。名詞句の解釈を包括する概念、そしてそれらの間の関連性を考える上でも、日本語の属性叙述文研究の

知見を活かす必要があると言える。

また、叙述としての意味に関わる述語の意味的性質を SLP/ILP という語彙的なものとして捉えた場合、それらとアスペクトはどのような関係にあるのかという問題も提起される。SLP/ILP とアスペクトはどちらも時間的な展開性を問題にしている点で共通しているが、これらの関連は Kratzer、Diesing の論の限りでは十分に明らかにされていない。この点に関して、日本語には英語の進行形よりも広範な意味領域を担う形式としてテイル形が存在し、日本語のアスペクトに関しては記述的な研究の蓄積が数多く存在する(金田一 1950; 奥田 1977; 高橋 1985; 工藤 1995; 須田 2010 他)。そのため、それらの研究の知見を活かすことによって、叙述の意味形成に関わる述語の意味的性質を、Kratzer、Diesing のアプローチよりも発展的に論じることが可能になる。

1.3 本論文のアプローチ

本論文では、日本語学の記述的な属性叙述文研究の知見と、理論的な総称文研究の知見を結びつけることで、互いに足りない観点を補い、より発展的に日本語の事象叙述／属性叙述の対立を論じることが目的とする。本論文の目的を具体的に示すならば、(19)のように 2 点にまとめることができる。

- (19) a. 日本語の属性叙述文を有意義な要因に分解して論じることで、事象叙述文との対比の中で構造的に分析できることを示す。
- b. 助詞、およびアスペクト形式に着目して日本語の現象を論じることが、理論的な研究にとっても貢献となることを示す。

(19a)の目的を達成するためには、叙述の対立に関わる要因間の関係を整理し、日本語の個別的な現象の指摘を体系化する必要がある。その際、事象叙述／属性叙述の対立に関わる 5 つの要因を(20)のように仮定する。

- (20) a. 述語の意味的性質(SLP/ILP)
- b. 裸名詞句の解釈(存在／総称解釈)
- c. 統語構造(主語の統語的位置)
- d. 情報構造(ハ／ガ)
- e. テンス(存在／総称テンス)

(20a-c)は、Kratzer、Diesing のアプローチによって体系化されている。ここでは、述語の意味的性質に従って主語の統語的位置が異なり、それに伴って受けることのできる解釈の可能性が異なるという、意味と統語の写像関係が想定されている。本論文でも、基本的に Kratzer、Diesing のアプローチに従ってこれらの相関関係を捉える。(20d, e)は、Kratzer、Diesing のアプローチに対する問題提起として挙げたものであり、(20a-c)の要因との関係が十分に明らかでない部分である。本論文では、日本語の現象を論じることで、Kratzer、Diesing の枠組みにこの 2 つの要因がどのように位置づけられるかを明らかにすることを目指す。そして、叙述としての意味を(20)の 5 つの要因に分解し、それらの要素がどのように組み合わせられるかを論じることによって、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチすることを可能にする。

また、(19b)の目的を達成するために着目する日本語の統語的な特徴は、(21)に示す 2 点である。

- (21) a. 助詞
- b. アスペクト形式

助詞に関しては、主語をマークするガとハの対立のみならず、主格目的語のガと対格目的語のヲといった対立に着目することによって、情報構造や意味の違いを構造的な問題として捉えることができる。具体的には、以下の(22)(23)に見るような現象に焦点を当て、述語の意味的対立と名詞句の解釈の相関関係について、構造的なアプローチから説明が与えられることを論じる。

- (22) a. 子供は正直者だ。
- b. 子供が元気だ。
- (23) a. 学生はそうじの時間が嫌いだ。
- b. 学生はそうじの時間を嫌っている。

(22)は、「正直者だ」のような ILP と「元気だ」のような SLP の主語の総称／存在解釈の対立に、主語をマークする助詞のハとガの対立が関係していることを示している。このように、主語をマークする助詞に着目することで、事象叙述／属性叙述という対立と情報構造がどのような関係にあるのかを体系化する。また、(23)は

語彙的な状態述語と文法的な状態述語(テイル形)の対立に伴い、目的語をマークする格助詞のガとヲの対立が見られることを示している。Kratzer、Diesingのアプローチでは、主語名詞句の解釈に焦点が当てられており、目的語に関しては詳細な議論が行われていない。しかし、本論文では、こうした主語名詞の対立と目的語名詞の対立に、一定の並行性が見られることを示すことにより、事象叙述／属性叙述という対立に構成的にアプローチする分析の利点を示す。

また、叙述とアスペクトの関係は、(20)に挙げた5つの要因間関係を明らかにした上で問題にすることができる、発展的な課題である。述語の語彙的意味とテンスとの相関関係を前提とした上で、さらにそこにアスペクトが加わった際、どのように叙述としての意味が形成されるかということは、Kratzer、Diesingのアプローチでは十分に明らかにされていない。本論文では、主にル形とテイル形の対立を論じることによって、述語のアスペクトと文全体の叙述の関係を明らかにし、意味と統語構造の写像関係に関する理論をより発展させることを目指す。本論文で考察対象とするアスペクト形式の対立は、一見同じような意味を表すように思える以下の(24)(25)のような例である。

- (24) a. 日本人はお米を食べる。
- b. 日本人はお米を食べている。
- (25) a.(?)ウナギの皮膚はぬるぬるする。
- b. ウナギの皮膚はぬるぬるしている。

(24)は、ル形とテイル形のアスペクト的対立が中和するとされる環境であり、主語の習慣的な動作を表す際にこのような対立が存在する。(25)も、ル形とテイル形の対立が中和する特殊な環境であり、日本語では知覚を表す意味カテゴリーにおいてこうした中和が可能になる。本論文では、これらの対立は一見同じような意味を表しているようであっても、文全体の叙述が決定されるプロセスがそれぞれ異なることを論じる。そして、このようなアスペクト形式の対立を論じることで、叙述類型とアスペクトの間関係を体系化することを目指す。

上記のような各論の分析を通して、本論文では、日本語学的な事象叙述／属性叙述研究と、SLP/ILP という述語の意味的性質について論じる理論的な研究を結びつけ、属性叙述文研究に関して記述的・理論的双方に貢献することを目指す。

1.4 本論文の構成

本論文の構成は、図1のように示すことができる。序論に当たる本章と、第2章の先行研究、終章である第7章を除き、第3、4章と第5、6章はそれぞれ対応する章立てとなっている。そして、第3、4章は日本語の助詞に着目した分析、第5、6章は日本語のアスペクト形式に着目した分析となっている。

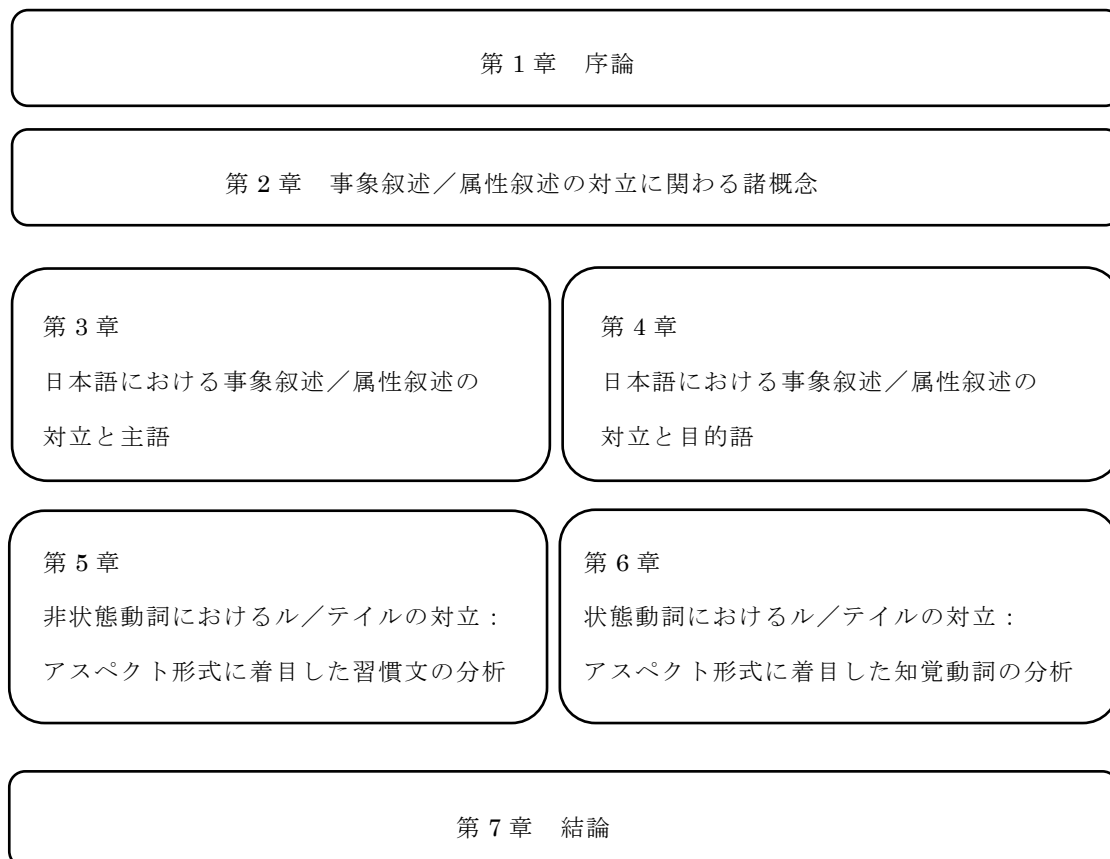


図1 論文構成

また、本論文における具体的な議論の流れは以下のように示すことができる。本章では、属性叙述文に関わる研究として2つの潮流が存在することに言及し、これらの研究が類似した問題意識に従い、非常によく似た提案がなされていることを見た。そして、問題提起として、これらの研究が相互に参照され、体系化する試みがこれまでのところ行われていないこと、および、これらの研究を結びつけることによって、互いの研究がより発展的になると考えられることを指摘した。

続く第2章では、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチするために、(20)に挙げた事象／属性の対立に関わる要因のそれぞれについて、先行研究がどの

ような指摘を行っているかを概観する。その際、本論文で扱う 5 つの要因に対応して、①Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)らの統語構造からのアプローチ、②C & E-R (2002)の情報構造からのアプローチ、③Krifka et al. (1995)のテンスからのアプローチという 3 つのアプローチを取り上げる。①は(20a-c)の 3 つの要因を体系化する分析であり、(20d,e)の要因はそれぞれ②③の分析において扱われていることになる。

第 3 章では、(20)の要因間を関係を体系化し、本論文において事象叙述／属性叙述という対立をどのように捉えるかという枠組みの提示を行う。その際、主に主語名詞句の解釈に焦点を当て、主語をマークする助詞に着目して分析を行う。そして、数量詞遊離、「ものだ」補文への生起といった日本語の統語的環境を見ることにより、日本語を対象として分析を行う積極的な利点を主張する。

第 4 章では、目的語名詞句の解釈に焦点を当て、目的語をマークする格助詞の対立に着目して分析を行う。そして、Diesing (1992)において仮定されている 2 つの主語位置と並行的に、目的語にも 2 つの位置が存在することを論じる。

第 5 章では、(24)に示した習慣文におけるル形とテイル形の対立を扱い、非状態動詞に接続するル／テイルの対立がテンスの対立と関係していることを論じる。

第 6 章では、(25)に見たようなル形とテイル形の対立が中和する環境に焦点を当て、状態動詞に接続するル／テイルの対立がどのように捉えられるものであるかを、第 5 章で得られた結論と比較しながら論じる。こうした第 5 章、第 6 章の議論を通して、述語のアスペクトが文全体の叙述に与える影響を体系化する。

第 7 章では上述の議論の総括を行い、日本語の属性叙述文を構成的に分析するという本論文のアプローチにより、記述的・理論的双方にどのような貢献がもたらされたのかを述べる。また、今後の課題と展望についても述べる。

第 2 章 事象叙述／属性叙述の対立に関わる諸概念

本章では、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチするために、文全体の叙述の意味の構成に関わる諸概念を概観し、それぞれの概念について先行研究がどのような指摘を行ってきたかを見ていく。ここで取り上げる概念は、述語の意味的性質、名詞句の解釈、統語構造、情報構造、テンスの 5 つである。Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)のアプローチは、述語の意味的性質と名詞句の解釈の相関関係に統語構造から説明を与えるものである。2.1 節では彼女らのアプローチに従って先行研究を概観する。次に 2.2 節では、述語と名詞句の解釈の相関関係に情報構造から説明を与える Cohen & Erteschik-Shir (以下 C & E-R; 2002)のアプローチを概観する。2.3 節では、名詞句の解釈に問題を限らずに、テンスの観点から事象叙述／属性叙述という対立に類する概念を提示している Krifka et al. (1995)のアプローチを概観する。

2.1 統語構造からのアプローチ : Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)

本節では、Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)の統語構造からのアプローチを概観するにあたって、まず 2.1.1 節と 2.1.2 節でその前提となる議論を見ていく。2.1.1 節では、場面レベル述語(以下 SLP)と個体レベル述語(以下 ILP)の対立として知られる述語の意味的性質について、また、2.1.2 節では、SLP/ILP の対立と相関関係があるとされる裸複数名詞の存在／総称解釈について、それぞれ先行研究に従って確認する。その上で、2.1.3 節において Kratzer、Diesing らがその相関関係にどのような説明を与えているのかを概観する。

2.1.1 述語の意味的性質(SLP/ILP)

事象叙述／属性叙述の対立において中核的な役割を果たすのが、述語における場面レベル(stage-level)と個体レベル(individual-level)の意味的対立である。事象叙述／属性叙述という対立においては、文全体としての意味が問題にされているのに対し、SLP と ILP の対立が問題にしているのは、述語が語彙的に持つ意味的

性質である¹。したがって、問題にしているレベルが異なるため、これらの概念の関係を一对一の対応として捉えることはできない。後述するように、叙述としての意味に構成的にアプローチするためには、述語の意味のレベルと文全体の叙述のレベルがどのように関わっているかを、主語名詞句の解釈との関連性から論じる必要がある。

SLP/ILP の区別は、Milsark (1974/1979)、Carlson (1977/1980)以来、様々な文法現象に関わるものとして認められており、多くの先行研究が存在する²。ここでは代表的な研究である Milsark、Carlson の論を取り上げ、その対立がどのように捉えられてきたのかを見ていく。

Milsark (1974/1979)は以下の(1)のような **There** 構文の終結部(coda)の位置に生起する述語の制約を見ることで、述語が「状態描写(state description)」を行うものと「属性(property)」を表すものに分けられることを指摘した。

- (1) a. There are people sick.
b. *There are people tall.

Milsark (1974/1979)によれば、「状態」とは対象となる個体の本質的な変化を伴わない一時的な状況(condition)のことを指すのに対し、「属性」とは個体についての事実(fact)であり、多かれ少なかれ永続的かつ変わることのない特性と見なされ

¹ ただし、SLP/ILP の対立がどのレベルにおいて決まるものであるかは先行研究によって異論がある。SLP/ILP の対立に対して強い語彙主義の立場をとるのが Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)である一方、内項まで含めた VP のレベルで決まるとする Fernald (2000)、Husband (2010)らの立場や、時制などの担う役割を重視する Higginbotham and Ramchand (1997)などの立場も存在する。また、SLP と ILP の対立が意味論的な違いではなく、語用論的なものであると捉える Magri (2010)のような分析も存在する。しかしここでは、叙述の意味を構成する要素間の関係を捉えるという目的のため、SLP/ILP の対立を述語が語彙的に持つ意味の対立として捉えておく。

² SLP のみが許される英語の統語環境としては、**There** 構文の終結部のほか、**when** 条件節(Carlson 1979; Kratzer, 1989/1995 他)、知覚動詞構文の補部(Carlson 1977/1980 他)、記述二次述部(depictive secondary predicates)(Rothstein 1983; Nakajima 1990 他)などが挙げられる。また、SLP/ILP の対立により解釈に差が生じる統語環境としては、裸複数名詞の解釈のみならず、絶対構文(absolute construction) (Stump 1985; Iatridou 2000)、過去時制をとった際の寿命効果(lifetime effects) (Kratzer 1989/1995; Musan 1995 他)などが挙げられる。

るものである。それぞれの例は、以下の(2)に挙げることができる。There 構文の終結部には(2a)のような状態描写を行う述語のみが許され、(2b)のような属性を表す述語は許されないとされている。

(2) a. 状態描写

sick, drunk, hungry, tired, alert, clothed, naked, stoned, closed, open...

b. 属性

tall, intelligent, beautiful, boring, crazy, a lawyer...

Milsark の指摘した述語の性質の違いは、Carlson の論における SLP/ILP の対立に引き継がれており、おおよそ(2a)は SLP、(2b)は ILP に対応する。基本的に名詞は ILP であると考えられているが、形容詞・動詞には SLP/ILP の対立が見られる。‘standing on a chair’ のような例をはじめとして、多くの非状態動詞は SLP に属するが、‘having long arms’ のような状態動詞は ILP の例である。Fernald (2000)は SLP/ILP の分類と述語の状態性の相関関係について、次の(3)のような記述的一般化を提示している。

(3) 全ての非状態述語は SLP であり、全ての ILP は状態述語である。

ただし、‘being in the room’ など SLP の状態述語が存在するため、逆の一般化は成り立たない。

2.1.2 名詞句の解釈

Carlson (1977/1980)は、英語の裸複数名詞(bare plural)の解釈という観点から、述語の意味的性質の対立を論じている。以下の(4)に見るように、裸複数名詞主語 ‘dogs’ の解釈は共起する述語によって一様ではない。(4a)や(4b)においては ‘dogs’ は種全体を指すが、(4c)における ‘dogs’ は具体的・特定のな数匹の犬を指している。

(4) a. Dogs are common.

b. Dogs are mammals.

c. Dogs were sitting on my lawn. (Carlson 1980: 2)

Carlson の理論においては、対象物(entity)は種(kind)、もの(object)、場面(stage)の 3 つに分けられ、それぞれについて叙述を行うものとして述語が分類されている。種についての叙述を行うのが種レベル述語(kind-level predicate)、種およびものについて叙述を行うのが個体レベル述語(individual-level predicate)、場面に對する叙述を行うのが場面レベル述語(stage-level predicate)である。それぞれの例としては、(4a)の ‘be common’ 「ありふれている」が種レベル、(4b) ‘be mammals’ 「哺乳類である」が個体レベル、(4c) ‘be sitting on my lawn’ 「うちの芝生に座っている」が場面レベルの述語である。以下では、主に場面レベルと個体レベルの対立に焦点を当てて Carlson の論を概観する。場面とは特定の時空間に結びつけられた局面を指し、個体とはそれを構成する場面の集大成にあたるものである。したがって、ILP とは、時空間に縛られずに一般的な性質や特徴について述べる述語であり、SLP とは、個体の本来持っている性質からただちに生じるものでない、過渡的な状態や一時的な状態を表す述語となる。

このような述語の意味的性質と名詞句の解釈の相関関係について、以下のような事実が知られている。

- (5) a. Firemen are available.
- b. Firemen are altruistic.

(5a)の ‘available’ のような SLP を述語とする裸主語名詞は、「出勤可能な消防士がいる」という存在的(existential)な解釈と、「消防士は一般に出勤可能であるものだ」という総称的(generic)な解釈の双方に解釈可能である。一方、(5b)の ‘altruistic’ のような ILP を述語とする裸主語名詞の場合、「利他的な消防士がいる」というような存在解釈は得られず、「消防士は一般に利他的なものだ」という総称解釈のみが得られるとされる。

ここで捉えられている裸複数名詞の存在／総称解釈がどのようなものであるかは、前節でも見た Milsark (1974/1979)による There 構文の分析に立ち返ることでより分かりやすくなる。前節では There 構文に生起する述語の制約について見たが、Milsark (1974/1979)では、それと密接に関係する名詞側の制約についても言及されている。Milsark は、後接する名詞句が表す集合が前提とされているか否かという観点から、決定詞(determiner)を以下の(6)に示す 2 つのタイプに分類している。

- (6) a. 強決定詞(strong determiner) : 定冠詞 the, every, all, most...
 b. 弱決定詞(weak determiner) : 不定冠詞 a, some, a few, many...

個体の集合を前提として比率的(proportional)な量化を行う決定詞は強決定詞、集合を前提としない基数的(cardinal)な量化を行うことができる³決定詞は弱決定詞と呼ばれる。

以下の(7)に見るように、There 構文に生起する名詞は、弱決定詞を伴うことが可能であるが、強決定詞を伴うことは許されないことが指摘されている。

- (7) a. *There were every/most/the people in the room.
 b. There were many/several/three people in the room.

つまり、There 構文に生起する名詞は集合を前提とすることができない、言い換えれば、There 構文は文脈の中で前提となっていない、あるいは共通の前提として共有されていない、新たな個体を導入する環境であると考えられる。

そのような環境である There 構文の終結部に ILP の生起が許されない理由は、(5b)のような例と同様に、裸名詞主語が総称解釈のみを受けるためである。このことは、総称解釈が個体の集合を前提とする解釈であることから自然に理解される。一方、SLP の生起が可能であるのは、裸名詞主語の存在解釈が可能のため、そして存在解釈が前提を持たない不定の対象の存在のみを述べるものであるためである。このように考えることによって、(5)のような SLP/ILP の対立によって見られる裸複数名詞主語の解釈の非対称性は、以下の(8)に示す、SLP/ILP と強決定的/弱決定的な主語名詞句の組み合わせの可否と並行的に捉えることができる。

- (8) a. The man is sick. (Strong + SLP)
 b. The man is tall. (Strong + ILP)
 c. Sm men are sick. (Weak + SLP)
 d. *Sm men are tall. (*Weak + ILP)

³ 弱決定詞は、非前提的な基数読みと前提的な比率読みの両方を持つが、強決定詞は非前提的な基数読みを持たない。また、後述するように 'some' のような弱決定詞は、母音を弱化させて用いることにより、非前提的な読みを強制することができる。

(8c,d)では、母音を弱化させて‘some’を用いることを‘sm’と表記しており、このことによって、弱決定詞を非前提的な主語として義務的に解釈させている。(8d)はILPがこのような非前提的な主語をとることができないことを示しており、ILPの主語には(8b)のような前提的な主語のみが許される。Milsarkが捉えたこのような相関関係は、(9)のような一般化として示すことができる。

(9) Milsark の一般化

ILP⁴は前提的な名詞句とのみ叙述関係を結ぶのに対し、SLPは前提的な名詞句、非前提的な名詞句の双方とも叙述関係を結ぶことができる。

そして、(5b)に見たように、ILPの裸複数名詞主語が総称解釈のみを受けるという制約は、(9)の一般化の一部として理解されることになる。ILPの主語には前提的な名詞句が要求されるために、裸複数名詞が用いられた場合の解釈に関しても、非前提的な存在解釈は許されないのである。

ここまでの議論から、叙述類型との対応を考える上では、事象叙述と属性叙述にSLP/ILPという述語の意味的性質を対応させるだけでは不十分であることが分かる。なぜなら、SLPであっても、主語が存在解釈を受ける場合と総称解釈を受ける場合が存在するためである。主語が存在解釈を受けている際には、文全体として特定の時空間に縛られた事象の叙述を行っていると考えられるが、総称解釈を受けている際にはもはや特定の時空間から離れ、恒常的な属性について述べるものになっていると考えられる。文全体の叙述としての意味に構成的にアプローチする際には、述語の意味的性質と名詞句の解釈を何らかの形で体系化するメカニズムが必要とされる。

2.1.3 統語構造

前節までで見た名詞句の解釈と述語分類の相関関係に関して、統語構造と意味解釈を結びつける形で説明を与えているのがKratzer (1989/1995), Diesing (1992)らの枠組みである。Carlson (1977/1980)において提案されたSLP/ILPの概念は、基本的に述語が適用される領域(domain)の区別であり、純粹に存在論的な

⁴ Milsark (1974/1979)ではSLP/ILPではなくstate description/propertyという用語が用いられているが、ここでは前者の用語で統一する。

概念であった。これに対し、Kratzer、Diesing らはこの意味タイプの違いを述語の持つ項構造の違いとして捉え、統語構造に写像されるものとして位置づけた。Kratzer、Diesing の理論では、(10)のような項構造の違いが仮定される。

(10) SLP は時空間的場所(spatiotemporal location)の項位置を持つのに対し、ILP はこれを持たない。

Kratzer (1989/1995)では、(10)の仮定を支持する現象として、when 条件節に見られる SLP と ILP のふるまいの対立が挙げられている。Kratzer によれば、(11a)の非文法性は、(12a)に示されるように when 条件節の持つ非顕在的な演算子((12)では Always によって示される)が、束縛すべき変項を供給されずに空量化(vacuous quantification)を起こすことによってもたらされる。

- (11) a. *When Mary knows French, she knows it well.
b. When Mary speaks French, she speaks it well. (Kratzer 1995: 129)
- (12) a. *Always [knows (Mary, French)][knows-well(Mary, French)]
b. Always₁ [speaks (Mary, French, 1)][speaks-well (Mary, French, 1)]
(Kratzer 1995: 130)

SLP と ILP の項構造の違いは、(12)では 1 で表される時空間項の有無である。時空間項を持つ SLP は、量化の演算子がこれを束縛することが可能であるため、when 条件節に生起可能であるが、時空間項を持たない ILP は空量化を起こすために非文となる。後述するように、SLP/ILP のこのような項構造の違いが、統語的な構造の違いに反映されることになる。以下では、(10)を仮定することにより、名詞句の解釈と SLP/ILP の対立が統語上どのように結びつけられるのかを見ていく。

その際、議論の前提として裸複数名詞が存在／総称解釈を得る原理について説明しておかなければならない。Lewis (1975)、Kamp (1981)、Heim (1982)らの流れを汲む Kratzer、Diesing の理論では、不定名詞(裸複数名詞や不定冠詞を伴う名詞句)はそれ自体では量化の力を持たず、何らかの演算子に束縛される変項としてはたらくものと考えられている。以下の(13a)のような例において不定名詞 ‘a contrabassoonist’ がもたらす変項は、(13b)に示されるように量化副詞 ‘usually’

に束縛・量化されている。

- (13) a. A contrabassoonist usually plays too loudly.
b. Usually_x [x is a contrabassoonist] x plays too loudly
(Diesing 1992: 5-8)

しかし、不定名詞が現れる環境に常に顕在的な量化子が存在するわけではない。以下の(14)のような例において、主語名詞句 ‘every llama’ は量化子 ‘every’ によって量化されているのに対し、目的語名詞句の ‘a banana’ は量化子を持たず、付近にこれを束縛する顕在的な演算子は存在しない。

- (14) Every llama ate a banana. (Diesing 1992: 7)

この場合、不定名詞の持つ変項が未量化のまま残ってしまうことを避けるため、非顕在的な存在量化子がこれを束縛することになる。これを存在閉包(existential closure)という。文の論理式を三分表示(tripartite representation)と呼ばれる仕組みで表した時、(14)の論理式は(15)のように表すことができる。

- (15) Every_x[x is a llama] (∃_y) y is a banana ∧ x ate y
 ↑ ↑ ↑
 量化詞 制限節 中核スコープ (Diesing 1992: 7)

裸複数名詞が存在解釈を得る際も、(15)と同様に非顕在的な存在量化子がこれを与えていると考えられる。

裸複数名詞の総称解釈に関しても同様に、顕在的な演算子が存在する場合と、抽象的な総称演算子である GEN の存在を仮定する場合が存在する。(16a)のように顕在的な演算子が存在しない場合でも、(16b)のような演算子が存在する例と同様に、裸複数名詞が導入する変項は総称的な演算子によって量化されているものと仮定される。このことは、(16c)のように表される。

- (16) a. Children are honest.
b. Generally, children are honest.

c. Generally_x [x is a child] x is honest

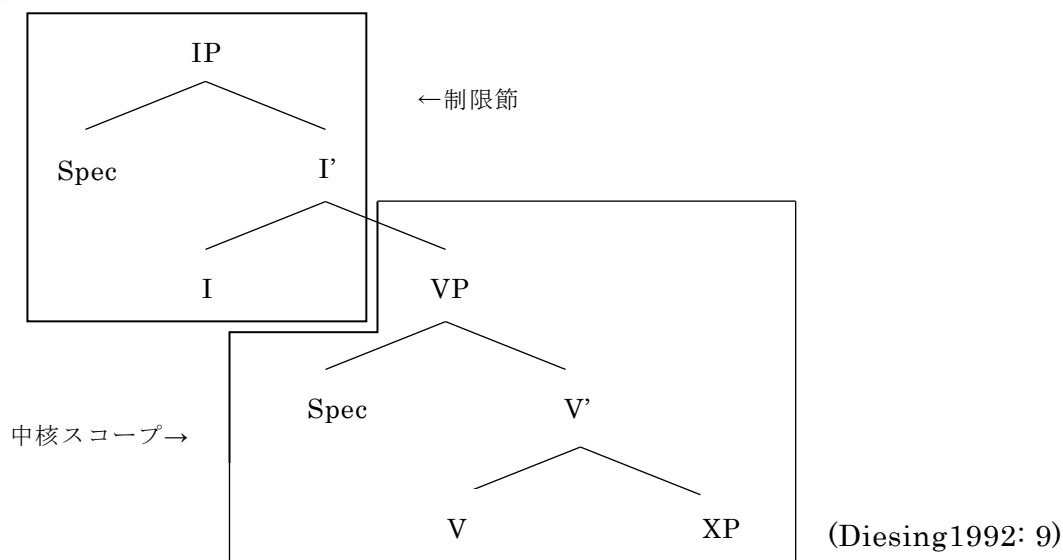
このような名詞句の解釈に関する前提をもとに、Diesing (1992)は統語と意味のインターフェイスとして、(17)の写像仮説(Mapping Hypothesis)と呼ばれる一般化を提示した。(17)は(18)のように図示される。

(17) 写像仮説

a. VP⁵内にある要素は中核スコープに写像される。

b. IP 内にある要素は制限節に写像される。 (Diesing 1992: 10)

(18)



Diesing はさらに、VP 内主語仮説(The VP-Internal Subject Hypothesis)に基づき、2つの主語位置を想定することで SLP と ILP の統語構造の違いを示している。VP 内主語仮説とは、それまで主語には IP の指定部という単一の位置が与えられてきたのに対し、イベントの表す意味役割が与えられる主語の位置と抽象格が与えられる主語の位置という、2つの主語位置を区別して仮定するものである (Kitagawa 1986; Kuroda 1988 他多数)。前者は語彙範疇(lexical category)の投射であり、VP 指定部という位置が与えられる。一方、後者は機能範疇(functional

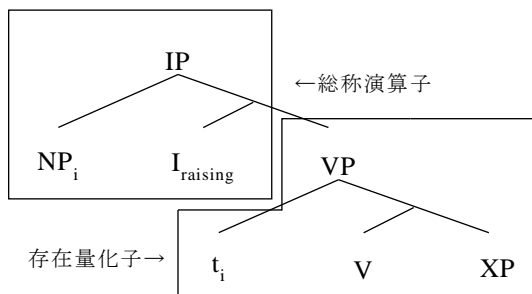
⁵ ここでは、Diesing (1992)に従って外項までを含んだ投射を VP としておくが、Chomsky (1995)以降の理論では v という外項を導入する機能範疇が提案されており、ここでの VP は第 3 章以降の議論における vP に対応するものである。

category)である I/T⁶の投射であり、IP 指定部という位置が与えられる。Diesingはこの 2 つの主語位置を前提に、(19)に見るように、ドイツ語の統語的事実から SLP/ILP の主語名詞の基底生成位置が異なることを主張している。

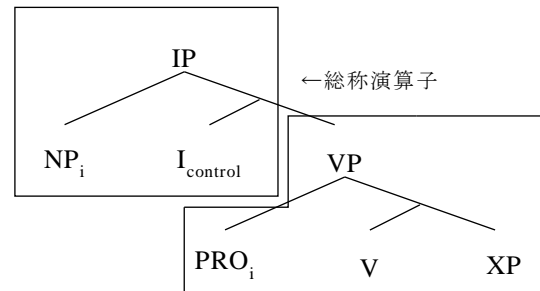
(19) ILP の主語は IP 指定部、SLP の主語は VP 指定部に基底生成される。

そして、SLP は VP 指定部から IP 指定部へ主語が移動する非対格 Infl(繰り上げ Infl)を持つものと規定した。一方、ILP は他動的 Infl(コントロール Infl)を持ち、IP 指定部に基底生成された主語が、動詞によって意味役割を与えられる VP 指定部の PRO 主語をコントロールする構造をとる。この関係は(20)のように図示することができる。

(20) a. SLP



b. ILP



Heim(1982)は存在閉包を談話のレベルで導入されるものと考えたが、Diesing(1992)はこれを VP 内部のみで起こるものとし、GEN と量化副詞は VP の外部に適用されるとした。このように、量化の演算子のはたらく意味の領域を統語構造と結びつけることで、裸複数名詞がどの演算子に縛られ、存在／総称のどちらの解釈を受け得るかは、統語的な位置によって決まることになる。つまり、(21a,b)それぞれの 'firemen' の解釈は以下のように導かれる。

(21) a. Firemen are available.

b. Firemen are altruistic.

((5)再掲)

⁶ Diesing (1992)は IP(屈折辞 I を主要部とする最大投射)を用いているが、これは基本的に TP(時制辞 T を主要部とする最大投射)と同じである。第 3 章以降の分析では、テンスに着目した分析を行うため、TP を用いる。

(21a)の述語は SLP であることから、その主語は VP 指定部に基底生成される。したがって、写像仮説により ‘firemen’ は中核スコープに写像され、存在閉包を受けることによって存在解釈を得る。また、IP 指定部に移動した ‘firemen’ が GEN に束縛された場合、総称解釈を得ることもできる。このように、SLP の主語は、主語位置が 2 箇所あり得るため、存在解釈と総称解釈の双方を持つ。一方、(21b)の述語は ILP であることから、その主語は IP 指定部に基底生成される。VP 内部には痕跡を持たないため、存在閉包を受けることはできず、IP 指定部で GEN に束縛される総称解釈のみが存在する。

以上、SLP/ILP という述語の意味的性質と名詞句の解釈という意味の問題を統語構造と結びつけて説明を与える Kratzer、Diesing の先行研究を概観した。叙述の種類という観点からこれを捉え直すならば、主語が VP 指定部の位置で存在解釈を受けることのできる文の意味解釈が事象叙述、主語が IP 指定部で総称解釈を受ける文の意味解釈が属性叙述と見なせるということになる。また、その主語位置と述語の意味的性質の対応関係に関して、統語構造に基づく説明が与えられることを見た。

2.2 情報構造からのアプローチ : Cohen & Erteschik-Shir (2002)

ここまで概観した述語の意味的性質、名詞句の解釈、そしてそれらに関わる統語構造という要因のほかに、事象叙述・属性叙述の対立に関わる要因として情報構造の影響が先行研究でも指摘されている。日本語学における属性叙述文研究でも、主題との関係性が指摘されてきたことは第 1 章で見た通りである。述語の意味的性質と裸名詞句の解釈の相関関係に説明を与える際には、Diesing、Kratzer のような統語構造からのアプローチだけでなく、情報構造からのアプローチとして Jäger (2001)、C & E-R (2002)などの先行研究が存在する。C & E-R (2002)は、裸名詞の存在・総称解釈が統語構造ではなく、文中の情報構造によって決まることを主張している。ここでは主に彼らの論について概観する。C & E-R (2002)の基本的な発想は、文のトピックとなる裸名詞が総称解釈を、フォーカスとなる裸名詞が存在解釈を受けるとするものであり、述語の意味的性質によって名詞句の解釈に非対称性が見られることに関しては、以下のような説明が与えられている。

C & E-R (2002)の枠組みにおいても、抽象的な時空間項 (spatiotemporal argument)を持つのは SLP のみであり、その存在が名詞句の解釈の可否に影響を与えていると考える点は Kratzer (1989/1995)と同様である。Kratzer の論と異な

るのは、時空間項の存在が統語構造の違いではなく、情報構造の違いに反映されると考える点である。C & E-R (2002)の基本的な発想は、一文中には必ずトピックとなる要素が必要であるとの前提の下で、SLP を用いた文ではトピックとなる要素が顕在的に現れていなくても、時空間項をトピックとすることができる点にある。(22)のような文においては、時間や場所を表す要素は顕在的に現れていないが、抽象的な時空間的場所が談話中の「今」、「ここ」と結びつけられることによって、トピックとなることが可能であるとされている⁷。(22)では、現在の空間的(spatial)・時間的(temporal)場所がトピックとなっていることが^sTOP_tという表記によって表されている。

(22) ^sTOP_t [it is raining]_{FOC} (C & E-R 2002: 133)

裸名詞句の解釈に関しても同様に、SLP であれば非顕在的な時空間項がトピックになり得る。(23)では、SLP である ‘present’ の持つ時空間項をトピックとして、裸名詞 ‘boys’ がフォーカスを受けることが可能である。そのため、フォーカスを受ける ‘boys’ が存在解釈を受けられることが説明される。

(23) Boys are present. (C & E-R 2002: 125)

一方、(24)では、ILP である ‘brave’ は時空間項を持たないためにこれをトピックとして利用することができない。このような場合、必然的に裸名詞 ‘boys’ がトピックとして選ばれ、トピックは不定のものではないという要請から ‘boys’ は種(kind)を指す、すなわち総称解釈を受けるとされている。

(24) Boys are brave. (C & E-R 2002: 125)

総称解釈が与えられる名詞句が文のトピックになるという一般化は、日本語の属性叙述文と主題との関係性からも自然に理解することができ、名詞句の解釈と情報構造が何らかの関係を持っていることには疑いがない。しかし、前節で見た

⁷ 同様の考え方は、(i)のような文を「状況陰題文」とする佐治 (1973)などの分析にも見られる。

(i) 山が美しい。 (佐治 1973: 118)

Diesing、Kratzer らのアプローチと、C & E-R のアプローチがどのように関係するものであるのかということや、また叙述類型の対立と情報構造の関係など、必ずしも明らかにされていない部分が残されている。

2.3 テンスからのアプローチ : Krifka et al. (1995)

事象叙述／属性叙述の対立に関わる要因として、ここまでは主に裸名詞句の解釈と述語の意味的性質の相関関係について論じる先行研究を見てきた。また、それに説明を与える統語構造からのアプローチ、および情報構造からのアプローチをそれぞれ見てきた。しかし、事象叙述／属性叙述の対立は必ずしも裸名詞を主語にした場合にのみ起こるのではなく、固有名詞などの定名詞を主語にとった場合にも存在する。そのため、裸名詞主語が総称解釈を受けている文が属性叙述文であり、存在解釈を受けている文が事象叙述文であるというような一対一対応では考えられず、名詞句の解釈とは別のレベルで叙述類型の定義を行う必要がある。

Krifka et al. (1995)は、これまで「総称文(generic sentence)」と呼ばれてきた現象に対し、名詞句の特性と文レベルの特性を区別して整理を行っている。名詞句の特性に関しては、種名詞句(kind-referring NP)と個体名詞句(object referring NP)が区別されている。また、文レベルの特性ということに着目している点で、事象叙述／属性叙述の対立と非常に似た対立を扱っており、文レベルの特性とされる特性文(characterizing sentence)と特定文(particular sentence)は、おおむね前者が属性叙述、後者が事象叙述に対応するような概念となっている。特性文の例としては以下の(25a,b)、特定文の例としては(25c,d)が挙げられている。

(25) a. HABITUAL SENTENCES(習慣文)

Simba (usually) roars when he smells food.

(specific non-kind-referring)

A lion (usually) roars when it smells food.

(nonspecific non-kind referring)

A predatory cat (e.g., the leopard) (usually) is exterminated when it is dangerous to people.

(non-specific kind-referring)

The lion (usually) roars when it smells food. (specific kind-referring)

b. LEXICAL CHARACTERIZING SENTENCES(語彙的特性文)

A lion (usually) weighs more than 200 lbs.

(nonspecific non-kind referring)

The lion weighs more than most animals. (specific kind-referring)

A predatory cat (e.g., the lion) (usually) knows its young.

(non specific kind-referring)

Simba has a mane.

(specific non-kind-referring)

c. EPISODIC DYNAMIC SENTENCES(出来事的非状態文)

Simba roared.

(non-kind referring)

The lion disappeared from Asia.

(kind-referring)

d. EPISODIC STATIVES(出来事的状態文)

Simba is in this cage.

(non-kind-referring)

The lion is in the cage next to the tiger.

(kind-referring)

(Krifka et al. 1995: 18)

(25a)、(25b)は特性文の下位分類となっており、語彙的に特徴づけを行うもの、すなわち ILP を用いた特性文となっているものが(25b)、派生的に特徴づけを行うもの、すなわち SLP を用いた特性文となっているものが(25a)である。また、(25c)(25d)は特定文の下位分類であり、その中でも非状態的なものが(25c)、状態的なものが(25d)として示されている。そして、それぞれの例について主語に種名詞句が用いられた例と個体名詞句が用いられた例が挙げられている。

Krifka et al. (1995)の論で着目すべき点は、眞野 (2008a)でも指摘されているように、益岡 (1987, 2008)の事象叙述文／属性叙述文という分類と特定文／特性文という分類が概ね対応しつつも、ずれが見られるという点である。Krifka et al. (1995)の分類では種名詞句を主語にした特定文とされる、“The lion disappeared from Asia.”のような例は、益岡 (2008)では「履歴属性」として属性叙述文の一種とされる。益岡の分類では、叙述の問題は語用論的な要因も含めて全体論的に決定されるものである。それに対し、Krifka et al. (1995)の分類は、あくまでテンスが総称的であるか存在的であるか、すなわち特定の時空間に位置づけられるようなテンスであるか否かという点を重視した分類である。両者が重きを置いている基準が異なるために、ずれが生じているものと考えられる。つまり、Krifka et al. (1995)の特定文／特性文という文レベルの意味を扱う対立は、テンスに着目した

分類であると見ることができる。

2.4 本章のまとめ

以上、本章では、事象叙述／属性叙述という対立に構成的にアプローチするために、述語の意味的性質、名詞句の解釈、統語構造、情報構造、テンスという5つの要因に関する先行研究の概観を行った。述語の意味的性質と名詞句の解釈の相関関係については、Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)により、SLP と ILP に統語構造の違いを想定することによって説明が与えられている。しかし、彼女らの提案と、情報構造から説明を与える C & E-R (2002)の枠組み、および裸名詞以外の主語も射程に入れ、文レベルの総称性を問題にする Krifka et al. (1995)の枠組みとの関連は十分に明らかにされていない。SLP/ILP に項構造の違いが存在することと、情報構造上の違いが存在することはどのように結び付けられるものなのだろうか。また、Diesing (1992)において SLP が非対格 Infl(繰り上げ Infl)を持ち、ILP が他動的 Infl(コントロール Infl)を持つと規定されていたことと、Krifka et al. (1995)においてテンスに着目した分類が行われていたこととはどのように関係づけられるのだろうか。次章では、日本語の現象を観察することにより、5つの要因が体系化できることを示す。そして、本論文において事象叙述／属性叙述という対立を構成的に扱うための枠組みを提示する。

第 3 章 日本語における事象叙述／属性叙述の対立と 主語

本章では、前章で見た先行研究の知見をもとに、日本語の事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチするための基本的な枠組みの提示を行う。前章では、事象叙述／属性叙述の対立を構成的に扱うために関わってくる要因として、述語の意味的性質、名詞句の解釈、統語構造、情報構造、テンスという 5 つが挙げられることを見た。そのうち、述語の意味的性質と名詞句の解釈、そして統語構造に関しては、Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)の枠組みによってすでに結びつけられている。しかし、残る情報構造とテンスの 2 点に関しては、前述の 3 点とどのような関係にあるかが明らかではない。

本章の目的は、(1)に示す 2 点を明らかにし、事象／属性の対立に関わる 5 つの要因を体系化することである。

- (1) a. 裸名詞句の解釈に説明を与える Kratzer、Diesing のアプローチと Cohen & Erteschik-Shir (以下 C & E-R; 2002)の情報構造からのアプローチはどのような関係にあるのか。
- b. 裸名詞句の解釈に着目する Kratzer、Diesing の枠組みと、テンスに着目する Krifka et al. (1995)の枠組みはどのような関係にあるのか。

また本章では、(1)を明らかにするにあたり、日本語の主語をマークする助詞に関わる現象に着目して論じることが有益であることを主張する。そして、本章で提示する 5 つの要因間の関係をサポートする具体的な現象が、日本語に存在することを論じる。

本章の構成は以下の通りである。まず 3.1 節では、(1a)を明らかにするために、日本語の主語をマークする助詞の用法に着目することによって、裸名詞句の解釈と情報構造との関係を整理する。具体的には、裸名詞句の解釈と情報構造に一对一の対応関係があるとする C & E-R (2002)の指摘に対し、日本語の現象を見ることによって、それらが独立して論じることのできる問題であることを示す。そして、裸名詞句の解釈に統語構造からではなく情報構造から説明を与えるべきだとする C & E-R の主張に対し、それらが相反するアプローチではなく、情報構造的な知

見も統語構造からのアプローチに統合できるものであることを示す。3.2 節では、(1b)を明らかにするため、裸名詞句の解釈とテンスとの関係を整理する。そして、5つの要因と叙述類型の関係を体系化し、本論文における枠組みの提示を行う。また、その枠組みを支持する日本語の現象として、数量詞遊離の環境と「ものだ」文の補文の環境が挙げられることを論じる。以上の議論を通して、本章では、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチすることの重要性と、その際に日本語の現象を分析することの利点を主張する。3.3 節では、本章のまとめと今後の課題を述べる。

3.1 Kratzer、Diesing のアプローチと情報構造

本節では、Kratzer、Diesing の統語構造からのアプローチと C & E-R (2002) の情報構造からのアプローチがどのような関係にあるのかを明らかにする。C & E-R (2002) のアプローチは、SLP/ILP の裸名詞主語の解釈の非対称性に統語構造から説明を与える Kratzer、Diesing のアプローチを批判的に検討するものである。C & E-R (2002) は、裸名詞句の解釈と情報構造上の資格を一対一対応させて考えることで、上述の非対称性に説明を与えている。詳しくは 2.2 節を参照されたいが、C & E-R (2002) の主張は(2)のような仮定に基づいている。

- (2) 裸名詞句がトピックとなる場合に総称解釈、フォーカスとなる場合に存在解釈が与えられる。

一方、日本語の属性叙述研究においても、属性叙述文の主語は主題のハでマークされることが知られており、叙述類型と情報構造は密接な関係にあることが古くから指摘されている。しかし、日本語の先行研究においては、事象／属性の対立が助詞ハ／ガの対立に相当するものではないことも、同時に認識されている(三上 1953; 益岡 1987 他)。以下では、日本語の助詞に関する先行研究の知見を援用することで、裸名詞句の解釈と情報構造の関係が明確に論じられることを示す。続く 3.1.1 節では、日本語の裸名詞¹主語の解釈の対立をハとガの対立と並行的に捉え

¹ ここでは、英語の裸複数名詞との並行性を捉えるために、「ポチ」「タマ」といった定名詞に対し、「犬」「猫」といった普通名詞を日本語でも裸名詞と呼ぶ。日本語の裸名詞が英語の裸複数名詞と並行的に捉えることが可能であるとの議論は、Homma et al. (1992)、Hasegawa (1993)を参照されたい。

ている Endo (1994)の指摘と、ガ格の用法に 2 種類を認めるべきだとする Kuno (1973)、久野 (1973)を概観する。そして、これら 2 つの先行研究の知見を重ね合わせることで、裸名詞句の解釈と情報構造上の資格を一対一対応させて考えるアプローチの問題点を指摘する。その上で、3.1.2 節において、裸名詞句の解釈と情報構造の関係を統語構造的観点から整理できることを示す。

3.1.1 先行研究と問題の所在

3.1.1.1 日本語の裸名詞句の解釈と助詞 : Endo (1994)

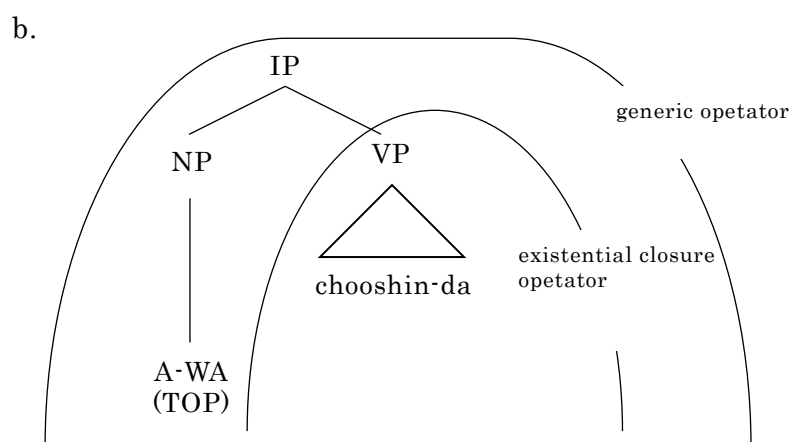
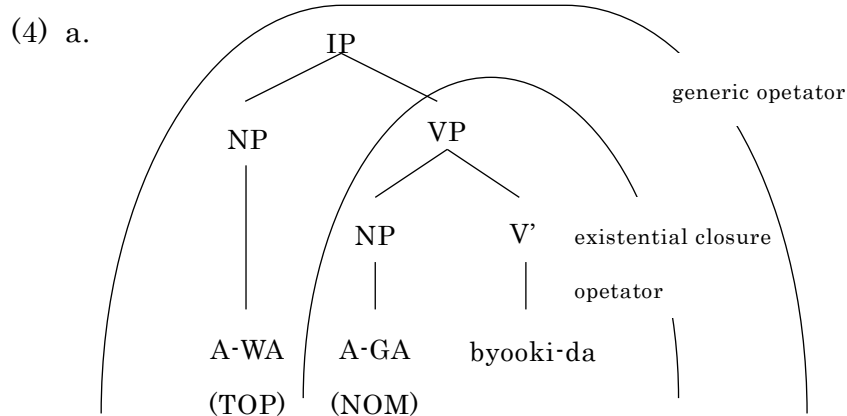
Diesing、Kratzer らのアプローチをもとに、英語の裸複数名詞の解釈と同様に、日本語の裸名詞の解釈にも構造的な説明が与えられることを論じている先行研究として、Endo (1994)が存在する。Endo (1994)は次の(3)のような例を挙げ、日本語の裸名詞においても、英語の裸複数名詞と同様に SLP/ILP という述語の違いによって解釈に差が生じることを示している。

- (3) a. アメリカ人 は／が 病気だ。 [主題／主格]
b. アメリカ人 は／*が 長身だ。 [主題／*主格] (Endo 1994: 85)

(3)から分かるように、日本語において名詞句の解釈を論じる上では助詞の選択との関係に着目する必要がある。SLP を述語とする(3a)の主語「アメリカ人」は総称解釈と存在解釈の双方を受けることが可能である。すなわち「アメリカ人は一般的に病気である」、「病気のアメリカ人がいる」のどちらの読みも可能であり、日本語ではこの解釈の差が助詞によって表される。すなわち、総称解釈を受ける場合にはトピックのマーカであるハ、存在解釈を受ける場合には主格のマーカであるガと結びつくという関係である。一方、ILP を述語とする(3b)の主語は「長身のアメリカ人がいる」のような存在解釈が許されず、「アメリカ人が一般的に長身である」という総称解釈のみを受け、トピックのハとのみ結びつくことが許される。

Endo は、TP(IP)指定部という構造上の位置とハが与えられる位置、VP 指定部とガが与えられる位置を結びつけることで、この対立も Kratzer、Diesing の枠組みから説明可能であることを論じている²。

² 同様の指摘は三宅 (1995)にも存在し、TP 指定部の位置を主題の位置と捉えることで、日本語における主題と文末の係り結び的な呼応関係を構造的に捉えることができると指摘されている。



(Endo 1994: 86)

(4a)に見るように、SLPの主語はVP内に生成されて存在解釈を受けるとともにガと結びつくこと、またTP(IP)指定部で総称解釈を受けるとともにハと結びつくことの双方が可能である。これに対し、(4b)に見るように、ILPの主語はTP(IP)指定部に予め生成されるため、ハのみと結びつくという説明が与えられる。

Endo (1994)の指摘は、統語構造から説明を与えるKratzer、Diesingのアプローチに則っているが、トピックのハでマークされる名詞と総称解釈を受ける裸名詞を同一視している点で、情報構造からのアプローチであるC & E-R (2002)とも密接な関係がある。このように、情報構造上の資格と名詞句の解釈を直接的に結びつける考え方に対し、次節では、名詞句の解釈と情報構造を独立に論じ得ることを示唆する日本語の現象が存在することを指摘する。

3.1.1.2 ガ格の 2 種類の用法 : Kuno (1973)、久野 (1973)

Kuno (1973) および久野 (1973) は、日本語の主語に付与されるガ格の用法³に「中立叙述(neutral description)」と「総記(exhaustive listing)」の 2 種類があることを指摘している。総記とは、述語の表す内容に対して主語をとりたて、主語に「X、そして X のみが」という含意を持たせる用法である。一方、中立叙述とは主語をとりたてることなく、事態をまるごと眼前描写的に把握する用法である。そして、久野は述語の意味的性質がこの 2 つの用法の可否に影響することを指摘している⁴。

- (5) a. 大変だ、太郎が病気だ。 [中立叙述／総記]
b. 太郎が学生です。 [*中立叙述／総記] (久野 1973: 32)

(5a) が示すように、「病気だ」のような SLP であれば、ガ格の用法として太郎を特にとりたてて述べることのない中立叙述の用法と、太郎をとりたてて述べる総記の用法のどちらも許される。一方、(5b) が示すように、「学生だ」のような ILP では太郎を必然的にとりたてて述べる必要があり、総記の用法しか許されない。総記のガは、西山 (2003) の枠組みでいう指定文のガに相当するものであり⁵、(5b) がもっとも自然に解釈される文脈は、「誰が学生か？」という問いに対する答えとなるようなものである。

³ 久野 (1973) の指摘するガ格の用法としては、主語に関わる用法として「中立叙述」と「総記」が挙げられているほか、状態述語の目的語が主格を受けることが指摘されている。このような主格目的語に関しては、第 4 章で詳細な議論を行う。

⁴ 久野 (1973) による一般化では、SLP/ILP ではなく、[-stative]/[+stative] という用語が用いられているが、「病気だ」などが[-stative]とされていることから分かるように、単なるアスペク的な状態性について言及しているわけではなく、SLP/ILP に相当する意味的性質について述べられていると考えられる。

⁵ 「総記」という概念に対しては、「久野の言う「総記」には(i)「該当するものを挙げる」(listing)という意味論的な側面と、(ii)「他のものを排除する」(exhaustive)という語用論的な側面とが混在しており、誤解を招きやすい」という指摘がなされている(西山 2003: 134)。つまり、意味論的に問題にできるのはガの「指定」という意味のみであり、「排他」のガの含意は Grice (1975) の会話の量の格率(the maxim of quantity)に基づくものだとされている(「求められているだけの情報を持つ発話をせよ」)。本論文でも、「総記」の排他の含意は二次的なものであると考えるが、判断として分かりやすい場合には「x、そして x のみが」という含意が出る場合のガが総記のガである、と述べることがある。

久野 (1973)の論じている述語の意味的性質とガ格の用法の相関関係は、名詞句の解釈との相関関係と並行的である。これらの関係は、以下の(6)と(7)のようにまとめることができる。

- (6) a. ガ格主語 + SLP [中立叙述 / 総記]
- b. ガ格主語 + ILP [*中立叙述 / 総記]
- (7) a. 裸名詞主語 + SLP [存在 / 総称]
- b. 裸名詞主語 + ILP [*存在 / 総称]

この並行性はどのように捉えられるのであろうか。また、Endo (1994)および C & E-R (2002)の先行研究からは、文の情報構造と名詞句の解釈、そして助詞の選択が一定の関係を持っていることが示唆されるが、ガの中立叙述の用法だけでなく総記の用法にも留意した場合、それらの関係はどのように捉えられるのか、再検討が必要となる。

3.1.1.3 問題提起

本節では、ここまでに見た Endo (1994)、C & E-R (2002)、Kuno (1973)および久野 (1973)の指摘をもとに、名詞句の解釈と情報構造の関係について整理を行い、残された問題を指摘する。

述語の意味的性質とガ格の用法の間の相関関係を示す(6)と、述語の意味的性質と名詞句の解釈の間の相関関係を示す(7)の並行性が示しているのは、存在解釈が許されない環境と中立叙述のガが許されない環境が、ILP の主語という同一の環境であるという点である。つまり、Endo (1994)の一般化をより厳密にするならば、存在解釈を受ける主語が結びつくのは中立叙述のガであるということになる。また、総称解釈を受ける名詞をガでマークすること自体が不可能なわけでもない。以下の(8)に見るように、裸名詞主語がガでマークされ、かつ ILP を述語にとってガが義務的に総記となった場合には、裸名詞句の解釈は総称的なものとなる。

- (8) アメリカ人が長身だ。

(8)は他の総称的な集合、例えば日本人一般などと比してアメリカ人一般こそが長身である、という意味として読むことができる。つまり、(8)のような例は、情報

構造上はフォーカスを受けていながら、総称解釈を受ける名詞が存在していることを示しており、名詞句の解釈と情報構造を一対一対応では説明できないことを意味する。

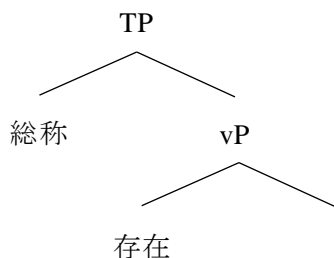
それでは、名詞句の解釈と助詞の選択、そして情報構造の三者の関係はどのように整理されるものなのだろうか。まず、ここまでに見てきた名詞句の解釈と助詞の選択の関係は以下の【表 1】のように示すことができる。

【表 1】名詞句の解釈と助詞の選択

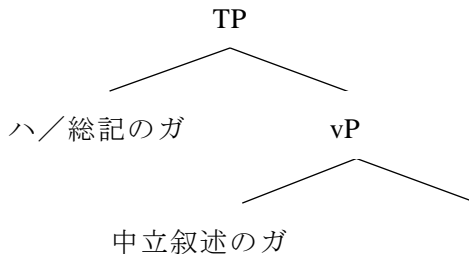
	存在解釈	総称解釈
ハ	*	○
総記のガ	*	○
中立叙述のガ	○	*

また、Diesing の枠組みに従い、【表 1】の一般化を構造的な位置との関係から捉え直すならば、(9)のように示すことができる。

(9) a. 裸名詞句の解釈



b. 助詞の選択



vP の内部は裸名詞句に存在解釈を与える位置であるとともに、中立叙述のガが付与される位置である。一方、TP 指定部は裸名詞句に総称解釈が与えられる位置であるとともに、ハあるいは総記のガが付与される位置である。しかし、(9)においてハと総記のガは構造上同一の位置が与えられているが、情報構造上、これらに前接する名詞はトピックとフォーカスという正反対の役割を担う要素である。これらはどのようなレベルにおいて共通点が捉えられるものであるのだろうか。以上の議論からは、以下の 2 点の問題が提起される。

- (10) a. 中立叙述のガに対して、ハと総記のガが共通して持つ性質とは何か。
b. Diesing (1992)の TP 指定部の位置と情報構造、そして(10a)の性質はどのように関わるものであるのか。

以下では、情報構造と名詞句の解釈は独立して論じることができるものであることを示し、Diesing (1992)で TP 指定部とされていた統語的位置について、情報構造の観点を取り入れて再検討を行う。

3.1.2 情報構造と名詞句の解釈

本節では、前節での問題提起に答えるかたちで、情報構造と名詞句の解釈がどのような関係にあるのかを体系化する。3.1.2.1 節では、日本語の助詞と情報構造の関係を体系化している Heycock (1993, 2008)の知見をもとに、中立叙述のガと総記のガの情報構造上の違いについて論じる。その上で、総記のガとハが共通して持つ性質があることを指摘する。その共通点を踏まえ、3.1.2.2 節では、Diesing (1992)において TP 指定部とされていた位置の特徴を明らかにする。そして、カートグラフィ研究(Rizzi 1997; Cinque 1999)の CP 領域に関する知見から、TP 指定部の位置を細分化することで、統語構造上に情報構造の観点を取り入れることができることを論じる。

3.1.2.1 情報構造と日本語の助詞 : Heycock (1993, 2008)

Heycock (1993, 2008)は、ガ標示と情報構造の間のつながりを設定することで、久野 (1973)の観察を情報構造の観点から捉え直している。Heycock (1993)は情報構造上の規定と日本語の助詞との相関について、以下の(11)のように定めることで、久野の観察に原理的な説明を与えている。

- (11) a. 名詞がトピックになる時にはハでマークされなければならない。
b. 文はそれが顕在化しているかにかかわらず、必ずトピックを持たなければならない。
c. トピックとフォーカスは同一の要素であってはならない。
d. ILP と違って SLP は時空間項をトピックとして利用できる。

(11)の規定に基づいて、述語の意味的性質とガ格の用法の相関関係を見ていく。

以下の(12)のような SLP の場合、時空間項がトピックとして利用できるため、文全体がフォーカスとなることも、述語をトピックとして主語がフォーカスを受けることも可能である。前者が中立叙述のガ、後者が総記のガの解釈である。

(12) 大変だ、太郎が病気だ。

つまり、中立叙述のガとは、文全体がフォーカスになった場合の解釈、つまり主語を特別にとりたてることなく、イベントの中の中立的な参与者として捉える際の解釈である。そして、総記のガとは述語をトピックとして主語をフォーカスにする場合の解釈であると捉えられる。

一方、以下の(13)のような ILP の場合は、時空間項をトピックにすることはできない。

(13) 太郎が学生です。 ((5b)再掲)

そして、ハでマークされていない主語もトピックになることはできないので、利用できるトピックは述語以外になく、必然的に主語がフォーカスとなる。これが ILP のガ格主語が総記の解釈しか持たない理由である。このような現象は主文に限られることが知られており、(14)のような従属節においては、主語が義務的に総記の解釈を受けることはない。これは、トピックの要求が文の単位であり、複文である場合は文の他の要素にトピックを求めることができることによる。

(14) 太郎が学生であることは、みんな知っている。

また、(15)のように ILP の主語がハでマークされた場合に関しては、次のように考えられる。

(15) 太郎は学生です。

述語が ILP であるので時空間項をトピックとすることができない点は(13)と同様であるが、(11a)の規定により、主語名詞がハでマークされているためこれがトピック、述語がフォーカスとなる。

つまり、文全体をフォーカスとすることができない ILP においては、主語がトピックを担う場合と、述語がトピックを担って主語をフォーカスとする場合という正反対の可能性がある。そして、これがどちらに決まるかは、主語をマークする助詞に左右されることになる。ハでマークされている場合にはトピックを、ガでマークされている場合にはフォーカスを担う。この点で、情報構造の観点からは、ハと総記のガはトピックとフォーカスという正反対の資格を担うことになるが、述語との関係において主語を中立的に捉える中立叙述のガに対して、ハと総記のガが述語から主語を切り離して捉えている点では、両者の共通性が捉えられることになる。

構造的な位置と意味解釈の関係からこれを捉え直せば、以下のように考えられる。vP 内部は動詞が項に意味役割を与える領域であり、vP 指定部に主語が存在する場合は、主語は単なるイベントの参与者として、中立的に解釈されることが可能である。この場合、ガ格の用法としては中立叙述、裸名詞主語の解釈としては存在解釈、情報構造から言えば文フォーカスであるというように、これら 3 つの関係は、vP 指定部に主語が位置するという構造によって統一的に捉えることができる。一方 TP 指定部の位置とは、イベントとは切り離され、主語名詞をとりたてて問題にする際の位置であり、そのとりたて方にはフォーカスにする場合とトピックにする場合の 2 種類がある。述語をトピックとしてそれに当てはまる変項を指定し、主語をフォーカスとしてとりたてる情報構造を持つのが総記の解釈である。一方、主語をトピックとしてとりたて、それについて述語の表す内容が当てはまることを述べることもできる。TP 指定部は総称解釈を受ける統語的位置であるので、主語が裸名詞であった場合には、典型的にはトピックとなることが多いが、フォーカスを受ける場合にも総称解釈を受けることが可能である。このことは、3.1.1.3 節の(8)でも確認した通りである。これらの関係は以下の【表 2】のようにまとめることができる。

【表 2】 統語的位置と名詞句の解釈・助詞・情報構造の関係

	裸名詞の解釈	助詞	情報構造
vP 内	存在解釈	中立叙述ガ	文フォーカス
TP 領域	総称解釈	総記ガ	主語フォーカス
		ハ	主語トピック

このように、トピックとフォーカスという正反対の情報を担う名詞が位置する TP 指定部の位置は、この位置を占める名詞が担う情報構造と直接的に結びつけることはできない。次節では、TP 指定部という構造的な位置を占める名詞の制約を明らかにした上で、情報構造の観点からはこの位置を 2 つに分けて考えるべきであることを示す。

3.1.2.2 TP 指定部の位置の細分化

Diesing (1992)において ILP の主語が位置するとされる TP 指定部の位置は、2.1 節で見た Milsark の一般化からすれば弱決定的な主語が許されない位置、すなわち必ず前提的な要素が要求される位置であると考えられる。そして、日本語の現象からもこのことが支持される。TP 指定部の位置で主語をとりたてる場合には、トピックとしてとりたてる場合とフォーカスとしてとりたてる場合のいずれであっても、指示が不特定の名詞であってはならないという制約がかかる⁶。(16)の非文法性が示すように、トピックとなってハでマークされる主語は、不特定であってはならないことが知られている(久野 1973; Tomioka 2007)。

(16) *誰かは来た。

同様に、(17a)のように不特定の主語がガでマークされた場合には、総記のガとして読むことはできない。

(17) a. 誰かが来た。

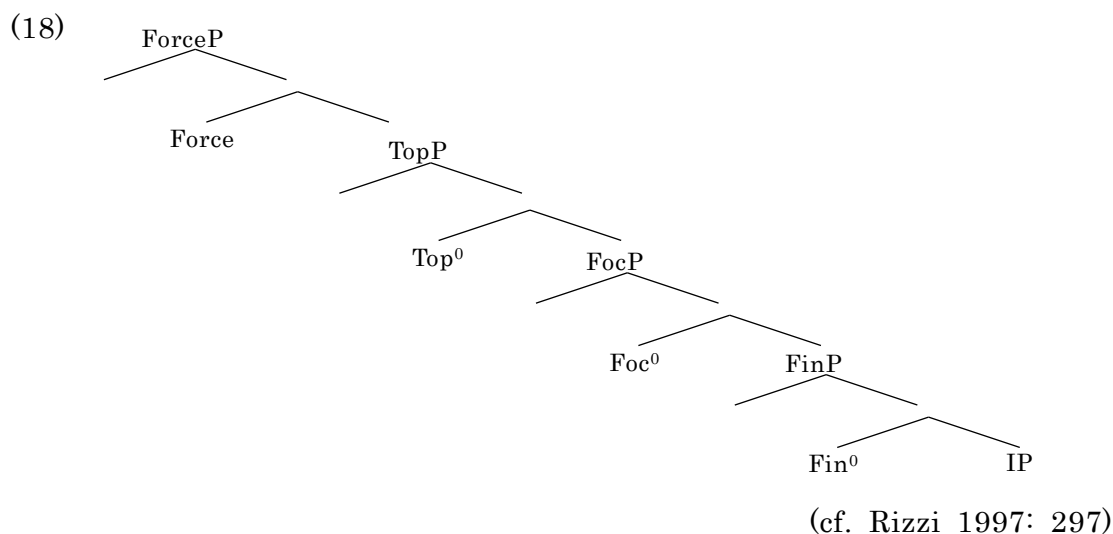
b. *来たのは誰かだ。

このことは、(17b)のような分裂文の焦点に不特定の要素が位置することができないことから示される。総記のガがマークする要素と分裂文の焦点の共通点は、述語の表す内容に当てはまる変項を指定する要素、つまり述語との関係において新

⁶ 小林 (2010)は、本論文で扱っているような現象とは独立に、主語移動と呼ばれる TP 指定部への義務的な移動を「主題」解釈へと写像されるための A'移動であると主張している。小林 (2010)の TP 指定部が存在的前提(existential presupposition)解釈と結びついた位置であるという指摘、そしてこの位置を占めることができるのは指示的(referential)な要素のみであるという指摘は、本論文の主張とも整合するものである。

情報となるという意味でフォーカスとなる要素であるということであり、不特定の要素はそこに生起することができない⁷。

このように、Diesing (1992)が TP 指定部としていた位置は、前提的な要素が要求されるという位置であるという意味では、トピックとなる要素とフォーカスとなる要素がともに位置することのできる位置であると言える。しかし、ILP の主語は必ずしもトピックになる必要はなく、ここまで見てきたようにガでマークされた場合にはフォーカスとなる。こうした情報構造の要素を統語構造の中に直接位置づけるためには、カートグラフィー研究の CP 領域の知見を用いることが有効である(Rizzi 1997; Cinque 1999)。これに則った場合、TP 指定部の位置と一括してきた、主題のハと総記のガを与えられる名詞句が占める統語上の位置は、トピック要素の占める位置((18)の TopP 指定部)とフォーカス要素の占める位置((18)の FocP 指定部)として、より精密に表し分けることができるようになる。



これに従って Diesing の写像仮説、および SLP/ILP の主語の統語的位置を捉え直した場合、以下の(19)(20)のように修正することができる。

⁷ ここで「不特定」な要素としているのは、三尾 (1979)、金井 (2010)において不定語の「不定個称」と呼ばれている要素であり、「疑問用法」とされる「誰」などの要素とは区別する。金井 (2010)では、言及対象の外延、または内包を疑問として喚起するのが疑問用法であり、それを不定のまま文の要素として組み込むのが不定個称であるとされている。

(19) 写像仮説

- a. vP 内にある要素は中核スコープに写像される。
- b. TP 以上の前提的な領域にある要素は制限節に写像される。

(20) ILP の主語は TP 以上の領域(TopP あるいは FocP)の指定部、SLP の主語は vP 内で意味解釈を受ける。

ILP の主語が位置する指定部は、助詞がハであるかガであるかによって定められ、前者であれば TopP 指定部、後者であれば FocP 指定部となる。

ここまで、日本語の現象から名詞句の解釈と情報構造の関係を整理してきた。C & E-R (2002)では、SLP/ILP の裸名詞主語の解釈の非対称性を論じる際に、統語構造からの説明を棄却し、情報構造から説明を与えるべきことが主張されている。しかし、日本語の主語をマークする助詞のふるまいを見ることで明らかになったのは、情報構造上の資格と名詞句の解釈は一対一対応の関係にはないということである。名詞句の解釈は、Diesing (1992)の主張を保持するかたちで、vP 内と TP 領域以上という統語的な位置に従って与えられることを論じた。そして、名詞句の解釈と一対一に対応するのは、文全体をフォーカスとするか、主語を述語から切り離してトピックあるいはフォーカスとするかという観点の対立であること、またこの対立は、主語が vP 指定部で解釈されるか TP 以上の指定部で解釈されるかという、統語上の位置の問題に還元できることを論じた。その上で、これまで TP 指定部とされてきた位置を TopP 指定部と FocP 指定部の位置に細分化することで、情報構造の問題が統語構造の中に組み込めるものであることを示した。

3.2 Kratzer、Diesing のアプローチとテンス

前節では Kratzer、Diesing のアプローチと情報構造がどのような関係にあるかを明らかにしたのに対し、本節では彼女らのアプローチとテンスがどのような関係にあるのかを明らかにする。2.3 節で概観したように、Krifka et al. (1995)の特定文／特性文の対立は、特定の時間軸上に位置づけられるイベントを表しているか否かという、文レベルの意味に着目した分類である。つまり、Krifka et al. (1995)はテンスを中心として事象／属性の対立にアプローチした研究と言える。裸名詞句の存在／総称解釈という対立を論じる Kratzer、Diesing のアプローチは、扱える現象の範囲が裸名詞句に限られ、主語に定名詞を用いた場合にはどのように考えられるかということは、議論の範疇外であった。しかし、裸名詞を主語に用いた

(21)のような対立と定名詞を主語に用いた(22)のような対立には、特定の時間軸上に位置づけられるか否かというテンスの観点での共通性があり、日本語の属性叙述文研究においても、(21b)(22b)はともに属性叙述文とされている。

- (21) a. 子供が元気だ。
b. 子供は正直だ。
(22) a. 太郎が元気だ。
b. 太郎は正直だ。

また、前節での議論からは、裸名詞句の解釈における対立と、ガ格の用法における対立の並行性が明らかになった。存在／総称解釈という対立は裸名詞句を主語にした場合にのみ問題にできるが、ガ格の中立叙述／総記の対立は定名詞主語においても現れるものである。つまり、日本語において裸名詞句の解釈だけでなく、ガ格の用法にも着目することによって、定名詞主語の例と裸名詞主語の例を統一的に扱うことが可能になるのである。そして、これらの共通性を捉えるためには、テンスに着目する観点が必要だと言える。

本節では、続く 3.2.1 節で、Kratzer、Diesing のアプローチにおいて提案された 2 種類の主語の統語的位置とテンスとの相関関係を明らかにし、Kratzer、Diesing のアプローチをテンスの観点からどのように捉え直すことができるかを論じる。ここでは、名詞句の存在解釈／総称解釈との関係性を捉えるために、述語が表す事象が特定の時間軸に位置づけられるテンスのことを存在的なテンスと呼び、特定の時間軸に縛られないテンスを総称的なテンスと呼ぶ⁸。そして、この存在／総称テンスという概念を中核として、3.2.2 節では事象／属性の対立に関わる他の 4 つの要因間の関係を体系化して示す。その上で、3.2.3 節においてその体系化を支持する現象が日本語に見られることを論じる。

3.2.1 テンスと主語の統語的位置

本節では、Kratzer、Diesing のアプローチをテンスの観点から捉え直すため、主語の統語的位置とテンスの相関関係を明らかにする。そして、日本語のガ格の用

⁸ 総称テンスという用語は、Abe (1991)、阿部 (1992)で用いられているように、時間点を変項として束縛する全称的な量化子によって表されるものとして定義する。

法に着目することにより、裸名詞句の解釈だけでなく定名詞の例もテンスの観点から統一的に扱えるようになることを示す。

テンスと主語の統語的位置が一定の関係を持っていることについては、阿部 (1992)、Abe (1993)による指摘が既に存在する。阿部 (1992)、Abe (1993)では、テンスと主語の統語的位置が属性解釈に関わっていることが、Diesing (1992)とは独立して論じられている。阿部 (1992)では、「属性解釈の原理」として、文が名詞に関する何らかの属性を述べていると解釈されるためには、(i)属性が帰せられる名詞句が TP の指定部に位置していることと、(ii)総称的なテンスをとっていることという、2つの条件が満たされなければならないことが指摘されている。この2つの条件を両方とも満たす(23a)は「このおもちゃ」に対する属性解釈が可能である。

- (23) a. このおもちゃはすぐに壊れる。
b. 太郎はこのおもちゃをすぐ壊す。
c. このおもちゃはすぐに壊れた。 (阿部 1992: 173)

しかし、「このおもちゃ」に関して(i)の条件を欠く(23b)は、「このおもちゃ」の属性に関する叙述としては解釈されない。また、(ii)の条件を欠く(23c)も、事実としては「このおもちゃがすぐに壊れる」ことが成立していたとしても、「このおもちゃ」の属性としては述べられていないことになる。

このような先行研究の指摘からも分かるように、存在／総称テンスという2種類のテンスと、VP内／VP外の2種類の主語の統語的位置は、相関関係を持っていると捉えることができる。Diesing (1992)においては、SLPは主語がVP指定部からTP以上の指定部へ繰り上がる繰り上げInflを持っており、ILPはIPの指定部に主語が基底生成するコントロールInflを持つと規定されていた。このことを、存在テンス／総称テンスという概念から捉え直すならば、SLPは存在テンスと総称テンスの両方をとることができるが、ILPは総称テンスのみをとることが定め

られている⁹ということになる。つまり、存在／総称テンスという概念を用いることにより、Diesing の繰り上げ／コントロール Infl という概念が主語の統語的位置に従って捉え直されることになり、SLP/ILP の 2 種類の主語の統語的位置とテンスの総称性の関係は【表 3】のように示すことができる。

【表 3】 テンスと主語の統語的位置の相関関係

	主語位置	テンスの総称性	Diesing の枠組み
SLP	vP 内部	存在テンス	繰り上げ Infl
	TP 以上の指定部	総称テンス	
ILP	TP 以上の指定部	総称テンス	コントロール Infl

また、Diesing (1992)の写像仮説に従い、名詞句の解釈がその統語的位置に依存して決定されるものであるとすれば、テンスと名詞句の解釈の相関関係も見えてくる。すなわち、vP 内に存在する裸名詞句には存在解釈、vP 外に存在する裸名詞句には総称解釈が与えられるため、存在テンスをとる述語の裸名詞主語は存在解釈、総称テンスをとる述語の裸名詞主語は総称解釈を与えられるという関係になる。

そして、日本語のガ格の用法に着目することの利点は、定名詞も同様にテンスの観点から相関関係を捉えられることである。3.1 節では、名詞句の解釈とガ格の用法の並行性が、主語の統語的位置という観点から捉えられることを論じた。すなわち、vP 内で解釈される主語に与えられたガ格は中立叙述として解釈され、vP 外で解釈される主語に与えられたガ格は総記として解釈される。これをテンスとの関係から捉え直せば、存在テンスをとる文のガ格は中立叙述、総称テンスをとる文のガ格は総記として解釈されるということになる。裸名詞句の解釈およびガ格の用

⁹ ILP に対してこのような語彙的指定を課すことは、Chierchia (1995)において提案されている、ILP が持つ時空間項は必ず GEN 演算子に束縛されなければならないとする仮説(The Inherent Genericity Hypothesis)とも関連すると考えられ、そのような定式化の可能性もあり得る。本論文の依拠する Kratzer (1989/1995)、Diesing (1992)らの枠組みと Chierchia (1995)の枠組みは、SLP/ILP の対立を時空間項の有無と見るか否かという点において異なるものである。しかし、属性叙述文に構成的にアプローチすることを主眼とした本論文においては、ILP が総称的なテンスのみをとるという記述的一般化を捉えるために、どのような理論的装置を用いて定式化するかという問題には、これ以上立ち入らない。

法の対応をテンスの観点から捉え直すと、【表 4】のように示すことができる。

【表 4】 テンスの総称性と裸名詞句の解釈およびガ格の用法の対応関係

	裸名詞句の解釈	ガ格の用法
総称テンス	総称解釈	総記
存在テンス	存在解釈	中立叙述

このように、裸名詞句の存在／総称解釈の問題を文がとるテンスの総称性に還元して考えることで、裸名詞句を主語にした場合のみならず、定名詞を主語にした場合も統一的に扱えることになる。これは、存在／総称解釈という対立は裸名詞句を主語にした場合にのみ問題にできるが、ガ格の中立叙述／総記の対立は定名詞主語においても現れるためである。つまり、主語の統語的位置とテンスの相関関係という観点に着目することによって、定名詞主語の例と裸名詞句主語の例をテンスの観点から統一的に扱うことが可能になるのである。以上、本節では Kratzer、Diesing のアプローチをテンスの観点から捉え直し、存在／総称テンスの対立を中核とすることで裸名詞句主語のみならず定名詞主語も統一的に扱えることを示した。

3.2.2 本論文における枠組みの提示：5つの要因の体系化

本節では、テンスの総称性を中心として、事象／属性の対立に関わる 4 つの要因がどのように関係しているかを示し、本論文における叙述類型の捉え方を提示する。まず、SLP/ILP という述語の意味的性質、およびその主語の統語的位置とテンスの相関関係に関しては、以下の(24)のようにまとめることができる。

- (24) a. SLP は存在テンスと総称テンスの両方をとることができるが、ILP は総称テンスのみをとる。
 b. 存在テンスをとる述語の主語は vP 内で解釈され、総称テンスをとる述語の主語は TP 領域以上で解釈される。

そして、主語が解釈される位置は、裸名詞句の解釈、およびガ格の用法と結びついている。また、情報構造の観点も加えて TP 以上の領域の主語位置を FocP 指定部と TopP 指定部に細分化し、ハ／ガの助詞の対立を含めると、それぞれの相関関係

は、SLP の場合は以下の【表 5-1】、ILP の場合は【表 5-2】のように示すことができる。

【表 5-1】 5つの要因の相関関係(SLP)

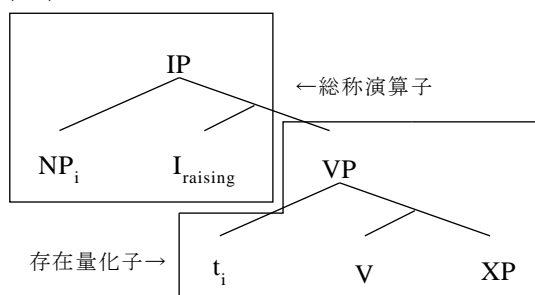
	テンス	裸名詞主語の解釈	主語の統語的位置	助詞
SLP	存在テンス	存在解釈	vP 内部	中立叙述のガ
	総称テンス	総称解釈	FocP 指定部	総記のガ
			TopP 指定部	ハ

【表 5-2】 5つの要因の相関関係(ILP)

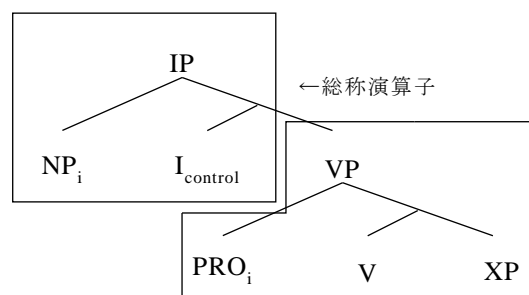
	テンス	裸名詞主語の解釈	主語の統語的位置	助詞
ILP	総称テンス	総称解釈	FocP 指定部	総記のガ
			TopP 指定部	ハ

Diesing (1992)においては、SLP/ILP それぞれの構造と写像仮説に基づく意味解釈と統語構造のマッピングは、(25)のように示されていた。

(25) a. SLP



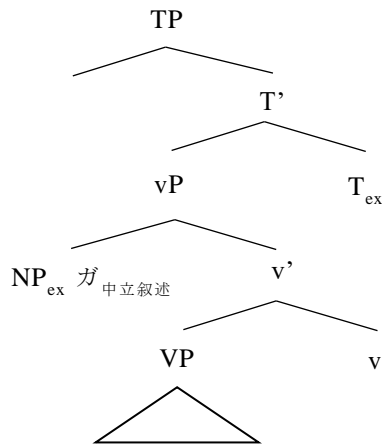
b. ILP



以下では、この関係を本論文の枠組みから捉え直し、GB 理論に基づく Diesing (1992)の定式化を、現行のミニマリスト理論に合致する形で再定式化する可能性のひとつを提示する。

Diesing のアプローチでは、SLP が繰り上げ Infl を持ち、ILP がコントロール Infl を持つというかたちで構造が区別されていたが、本論文の枠組みでは、テンスの総称性から構造が書き分けられる。(26)は、述語の表す内容を特定の時間軸上に位置づけることができる、存在的なテンス(T_{ex})のもとに生起する文の構造である。

(26) 存在テンスの文構造

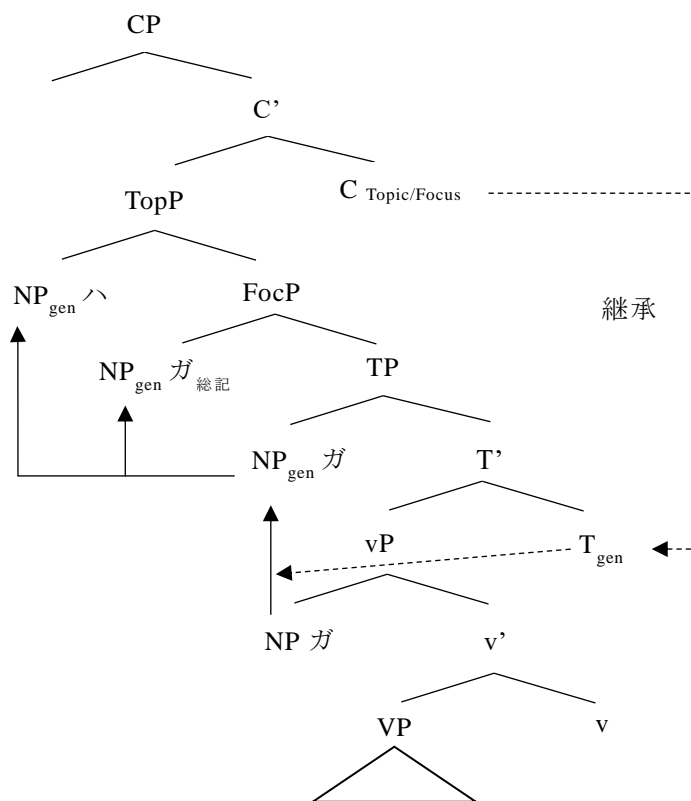


GB理論においては、主語名詞句がTP指定部に移動することにより、テンスが主格を認可するとされていたが、現行のミニマリスト理論においては、主格の付与は移動によるものではなく、探査子(probe)と目標(goal)の間の「一致操作」(Agree)として捉えられている(Chomsky 2000, 2001)。一致操作の構造的な条件は、テンスが名詞句を構成素統御していることである¹⁰。(26)でも、主語名詞句はテンスに構成素統御されるvP指定部の位置で主格を付与されており、存在テンスのもとに生起するこのような構造では、意味解釈がこの位置でなされる。この時、ガ格は述語と一体に解釈される中立叙述の用法となり、名詞句が裸名詞であれば存在解釈を受けることになる。

一方、述語の表す内容を特定の時間軸上に位置づけない、総称的なテンス(T_{gen})のもとに生起する文の構造は、(27)のように表すことができる。

¹⁰ 一致に関わるもう一つの重要な構造的な条件として、「フェイズ不可侵条件」(Phase Impenetrability Condition)がある。フェイズとは、基本的に統語操作が及び得る領域を規定するものであるが、ここでは議論を単純化するために、フェイズに関する問題には立ち入らずに議論を進める。

(27) 総称テンスの文構造



(27)では、主語名詞句は vP 指定部の位置でテンスとの一致によって主格を認可された後、TP 指定部の位置に引き上げられる。これは、Milsark (1974/1979)において一般化されているように、ILPの主語が、つまり総称的なテンスをとる述語の主語が、常に前提的な要素でなくてはならないためである。(27)ではこのような関係を、テンスが談話的素性(トピック/フォーカス)が指定される主要部である C から素性を継承 (inherit)する、という考え方から捉えている(Chomsky 2008 他)。総称的なテンスは存在的なテンスと違い、談話的な要因が関わる CP 領域の主要部である C から素性を継承することにより、主語を TP 以上の領域に引き上げる¹¹。そして、Diesing (1992)では TP 指定部への主語の基底生成とされていた定式化を、本論文では、総称テンスに

¹¹ Miyagawa (2010)でも、C からテンスへの素性の継承という観点から、談話的な要素を統合しつつ主語の構造的位置が論じられている。Miyagawa は、日本語のような談話指向の言語(discourse configurational language)では、もともと C が持つトピック/フォーカス素性が T に継承され、そうした素性が TP 指定部への移動(A 移動)を駆動すると分析されている。ただし、Miyagawa (2010)においては、主語という概念と TP 指定部という構造的位置が切り離されている点など、本論文の枠組みとは理論的な前提が異なる部分が存在するため、Miyagawa (2010)の分析と本論文の枠組みの関係を詳細に論じることは、今後の課題としたい。

より vP 指定部への再構築(reconstruction)が阻まれる、と考えることで捉え直す。そのため、総称テンスをとる述語の主語は常に TP 以上の領域で意味解釈がなされ、助詞がガであれば FocP 指定部に移動して総記の用法となる。あるいはハであれば、TopP 指定部に移動して文のトピックとなる。この時、名詞句が裸名詞句であれば、総称解釈を受ける。そして、述語の意味的性質とこれらの構造は、テンスを介して結びついている。述語が SLP であれば存在／総称テンスのいずれをとることもできるため、(26)(27)のどちらの構造もとることができるが、ILP であれば語彙的な指定として総称テンスをとることが定まっているため、(27)の構造しかとることができない。

以上、Diesing の写像仮説に基づく構造的分析が、近年のミニマリスト理論で仮定されている枠組みの中でどのように捉え直せるのかを論じてきた。技術的な部分については、さらに洗練・修正させていかなければならない問題が多数残されているが、Diesing の写像仮説の基本的なアイデアを受け継ぎながら、T-C 間での素性継承を利用した上述の定式化は、本研究で抽出した叙述類型に関わる要因間の関係を体系的に捉える一つの有望な分析方法になるものと考えられる。

ここまで、テンスの総称性を中心に 5 つの体系性を捉えることを主張してきたが、存在的なテンスをとっているか、総称的なテンスをとっているかは、特に現在形を問題にする場合¹²、形式的に判断することは難しい。同じ現在形をとっていても、以下の(28a)は存在的なテンスと見ることができ、(28b)は総称的なテンスをとっているものと解釈される。

- (28) a. 子供が元気だ。
b. 子供が正直者だ。

一方で、(28)の対立は主語をマークするガ格の用法、および裸名詞句の解釈という

¹² 過去形は基本的に存在的なテンスであると考えられる。ただし、(i)に見られるような寿命効果(lifetime effect; Kratzer 1989/1995 他)が見られる場合のテンスをどのように見なすかは議論の余地がある。

(i) 太郎は背が高かった。
寿命効果とは、(i)のように過去時制の ILP の主語はすでに死んでいることが含意されるというものであり、Kratzer (1989/1995)はこれを過去時制の演算子が個体を束縛することによる効果であるとしている。つまり、用いられている述語が ILP であるため、述語の表す事象が特定の時空間に位置づけられるものではないが、過去形をとることによって生まれる意味は個体の存在自体にかかるものとして見ているのである。

観点から捉えることが可能である。つまり、【表 5-1】【表 5-2】に示した体系性を前提にすれば、文が存在的なテンスをとっているか、総称的なテンスをとっているかは、裸名詞句の解釈から判断できるようになるということである。そして、日本語には裸名詞句の解釈が文法性から判断できる統語的環境が存在する。次節では、日本語の裸名詞句が存在解釈を受ける統語的環境と、総称解釈を受ける統語的環境をそれぞれ指摘し、【表 5-1】【表 5-2】に示した体系性が日本語の現象から支持できることを論じる。

3.2.3 テンスの総称性と統語的環境

本節では、存在テンスのもとに主語が生起し、存在解釈を受ける環境として、主語からの数量詞遊離の環境が挙げられることを 3.2.3.1 節で論じる。次に、3.2.3.2 節において、総称テンスのもとに主語が生起し、総称解釈を受ける環境として「ものだ」文の補文の環境が挙げられることを論じる。

3.2.3.1 存在テンスと主語からの数量詞遊離

ここまで見てきたように、存在的なテンスをとっている場合、主語は vP 指定部で意味解釈を受け、裸名詞句であれば存在解釈を受ける。本節では、数量詞が遊離した宿主名詞句は意味解釈を受けるレベルで vP 領域にとどまり、存在解釈が与えられるということを、先行研究の知見をもとに示す。その上で、主語から数量詞が遊離させられるか否かを見ることによって、存在テンスをとる文であるか否かが判断できることを論じる。

まず、数量詞遊離の宿主名詞句がどのような性質を持っているかを、先行研究の指摘をもとに見ていく。神尾 (1977)、Homma et al. (1992)では、数量詞が遊離した宿主名詞句の解釈は必ず不特定の読みになることが指摘されている。[Q の N]の形式をとる(29a)と数量詞が遊離した(29b)は、(30)の後続可能性において対立を見せる。

(29) a. 花子は 3 人の男を招待したがっている。

b. 花子は男を 3 人招待したがっている。

(30) 彼ら／そいつらはみんな学生です。 (Homma et al. 1992: 16-17)

(29a)には特定の 3 人の男を招待したい、という読みが存在し、(30)を後続させる

ことが可能である。一方、数量詞が遊離した(29b)には、3人という数量のみを問題にした基数的な解釈しか存在せず、(30)を後続させることはできない。

数量詞が遊離したホスト名詞が不特定解釈となることは、ホスト名詞句を指示的にした(31b)のような例が許容されないことから支持される(大木 1987; Homma et al. 1992; 奥津 1996 他)。

- (31) a. その3人の男(たち)がうなぎを食べた。
b. *その男(たち)が3人うなぎを食べた。 (Homma et al. 1992: 25)

(31b)のような文が許容されるとすれば、「男が」と「3人」の間にポーズを置き、前文脈として「5人の男が店に入ってきた」などがあつた上での、「その男のうち3人」、という部分数量を表す解釈である。いずれにしても、(31a)と同義の解釈である「男は全員で3人」という解釈は表せない。すなわち、数量詞が遊離したホスト名詞は、[QのN]の形式に存在する特定の解釈が許されないのである。

数量詞遊離のホスト名詞に特定の解釈が許されない事実を理論的に捉えると、数量詞遊離のホスト名詞は vP 領域で存在解釈を受けなければならないと考えられる。つまり、ここでのホスト名詞の「不特定の読み」とは、ホストとなる裸名詞に与えられる非前提的な存在解釈であるとみなすことができる。ホスト名詞に許されない特定の解釈は、量子子繰り上げ(Quantifier Raising; 以下 QR)と密接な関係があり、May (1977)では以下の(32)のような一般化がなされている。

- (32) 特定の QP(specific QP)のみが LF において QR を受ける。

つまり、不特定の存在解釈を受ける名詞句は、意味解釈を受けるレベルで vP の外に繰り上がることができず、常に vP 内で解釈されるということになる。

数量詞遊離のホスト名詞が意味解釈を受けるレベルでは常に vP 内に存在し、存在解釈を受けていることは、Homma et al. (1992)、Hasegawa (1993)において指摘されているスコープのデータからも確かめることができる。Homma et al. (1992)、Hasegawa (1993)では、数量詞の遊離したホスト名詞が QR を受けないうために、常に狭いスコープをとることが指摘されている。[QのN]の形式を持つ(33a)は、「2人」が「誰も」より広いスコープをとる読みも可能であるが、数量詞が遊離した(33b)の「2人」は、「誰も」より狭いスコープしかとることができない。

- (33) a. 2人の先生を誰もが知っている。 ($4 > \forall$ 、 $\forall > 2$)
 b. 先生を2人誰もが知っている。 ($*2 > \forall$ 、 $\forall > 2$)

つまり、(33b)は LF において QR を受けた(34)のような意味解釈をとることができず、数量詞が遊離した名詞は常にスクランブリングを受ける前の vP 内の位置で解釈されなくてはならないということを意味している。

- (34) [TP [先生を2人]_j [TP 誰も_iが [vP t_i t_j知っている]]]。

ここまでの議論から、数量詞が遊離したホスト名詞の性質は以下の(35)のように考えることができる。

- (35) 数量詞が遊離したホスト名詞は、vP 内部の位置で解釈されなければならないが、QR を受けることができないために特定解釈を受けない。

数量詞遊離のホスト名詞がなぜ vP 内部で解釈されなければならないのかについては、Diesing (1992)において VP 領域が裸名詞句に存在解釈を与える非顕在的な存在量化子のはたらく領域であると考えられていたことと密接な関係があると考えられる。Hasegawa (1993)では、非項位置に現れる遊離数量詞は、非顕在的な存在量化子の具現形であると考えられており、ホスト名詞が vP に付加する数量詞に束縛されているために、vP 内で解釈されなければならないとされている。

(35)が正しいとすれば、存在テンスをとることができず、常に TP 以上の領域で主語が解釈されなければならない ILP は、数量詞が遊離した主語はとれないということが予測される。実際に、日本語においては、SLP/ILP という述語分類が主語からの数量詞遊離の許容度に関与していることが指摘されている。Harada (1976)以来、以下の(36)(37)の対立に見られるように、SLP の主語からの数量詞遊離が許容される一方で、ILP の主語からの数量詞遊離は許容されないことが知られている(佐川 1978; 大木 1987; Ishii 1991; 奥津 1996; 三原 1998; Nakanishi

2008 他¹³⁾。

- (36) a. 3人の学生が裸足だ。 [SLP]
b. 学生が3人裸足だ。
(37) a. 3人の学生が正直者だ。 [ILP]
b. *学生が3人正直者だ。

(36)に見るように、述語が SLP である場合、[Q の N]と数量詞の遊離したホスト名詞のどちらを主語にとることも可能である。しかし、(37)に見るように、ILP の主語は後者をとることができない。(37b)の非文法性は、総称テンスをとる ILP の主語が義務的に TP 指定部に引き上げられるにもかかわらず、数量詞が遊離したホスト名詞が vP 内で解釈されなければならないために引き起こされる。一方、(37a)において数量詞遊離が可能なのは、SLP が存在テンスをとり、vP 指定部で存在解釈を受けることが可能なためである。このことについては、Ishii (1991)においても同様の指摘が存在する。Ishii (1991)では、日本語で問題にされてきた(36)(37)の対立には、英語の裸複数名詞主語に見られる存在／総称解釈の非対称性と並行的に、Kratzer、Diesing の枠組みから説明を与えられるということが論じられている。

以上、本節では、数量詞が遊離したホスト名詞が vP 内でのみ意味解釈を受けることを示し、主語からの数量詞遊離が可能かどうかを判断することによって、意味解釈を受けるレベルで主語が vP 指定部に存在するか、つまり存在テンスをとっているか否かが判断できることを論じた。

3.2.3.2 総称テンスと「ものだ」補文

前節では、存在テンスをとる文の主語が vP 指定部に存在していることを前提に、主語からの数量詞遊離の可否によって存在テンスをとっているか否かを判断できることを示した。同様に、総称テンスをとっているか否かを判断する際にも、文の主語が TP 以上の指定部で解釈されることを指定するような環境を用いれば

¹³ Harada (1976)、佐川 (1978)では、SLP/ILP という術語を用いておらず、ILP にほぼ相当する述語の例を挙げて「状態性述語において数量詞遊離が許されない」と一般化しているが、大木 (1987)以降、「一時的状態述語」と「恒常的状态述語」が明確に区別されている。

よいことになる。本節では、文の主語が TP 以上の指定部で非顕在的な総称演算子である GEN によって束縛されることを指定する環境として、「ものだ」文の補文が挙げられることを論じる。

「ものだ」補文の環境に関しては、先行研究にもいくつかの指摘が存在する。「本来の性質の叙述(森山 1997)」を行うとされる「ものだ」補文は、主語に裸名詞を要求することが知られている¹⁴(森山 1997; 野田 2011)。以下の(38)は「ものだ」補文に ILP、(39)は SLP の形容詞が生起している例であるが、いずれも裸名詞は総称的な解釈となり、定名詞の生起は許されない。

- (38) a. 子供は正直なものだ。
b. *太郎は正直なものだ。
- (39) a. 子供は元気なものだ。
b. *太郎は元気なものだ。

眞野 (2008b)でも、「ものだ」補文には総称文のみが許され、内在的属性叙述を行う環境であるために、以下の(40)に見るように直示的時間副詞とは共起しないことが指摘されている。

- (40) a. (*今日)パンダは笹を食べるものだ。
b. (*明日)象の鼻は長いものだ。 (眞野 2008b: 74)

このような「ものだ」補文には、意味解釈上、主語の総称的な量化を行う演算子 GEN が存在していると考えられ、(38b)の非文法性は主語が定項であり、GEN に束縛されるべき変項が与えられないこと、つまり空量化によってもたらされるも

¹⁴ 「ものだ」の用法に関しては、ここで見ている「本来の性質の叙述」とされるもののほかに、(i)に見る「当為」の用法や「回想」の用法も存在する(益岡・田窪 1989)。

- (i) a. いくら大学生でも、試験の時ぐらいは勉強をするものだ。 [当為]
b. その頃のテレビはよく故障したものです。 [回想]
(益岡・田窪 1989: 109-110)

しかし、「回想」の用法に関しては述語が過去形をとるという形式面の相違のほか、(ii)に見るようにこれらの例の主語は裸名詞以外の主語も許される(益岡 2000)。このため、ここでの議論の対象からは除しておく。

- (ii) a. 君も少しぐらいうわべを取り繕うもんだぜ。 (益岡 2000: 125)
b. あの頃の私はよく小説を読んだものです。 (益岡・田窪 1989: 110)

のと考えられる。ここまでの議論から、「ものだ」補文の主語の制約は(41)のようにまとめられる。

(41) 「ものだ」補文の主語は、総称的に量化される裸名詞でなくてはならない。

しかし、「ものだ」補文の条件は(41)のみでは不十分である。ここで着目したいのは、(42)のような例が「ものだ」補文に生起できないということである。

- (42) a. 恐竜は白亜紀に絶滅している。
b. 電話は 1876 年に発明されている。

(42)は定名詞を主語に用いているわけではなく、裸名詞句の解釈は種としての総称的な「恐竜」や「電話」を指している。つまり、(42)は(41)に示した条件を満たしているにもかかわらず、(43)に見るように、「ものだ」補文に生起することができない。これはなぜなのだろうか。

- (43) a. *恐竜は白亜紀に絶滅しているものだ。
b. *電話は 1876 年に発明されているものだ。

(42)のような例の特徴は、主語の解釈としては総称的でありながら、述語の表しているイベントが特定の時空間に結びつけられていることである。このことは、(42)において時間副詞の共起が許されること、および(42)が(44)のようなタ形の文とほぼ同義に解釈可能であることから分かる。

- (44) a. 恐竜は白亜紀に絶滅した。
b. 電話は 1876 年に発明された。

すなわち、(42)(44)のような例は、テンスは特定の時間軸に位置づけられる存在的なものでありながら、裸名詞は総称解釈を受けているということになる。通常、SLPの主語が総称解釈を受けていると考えられる(45a)のような例であっても、これを(45b)のように時間副詞と共起させ、存在的なテンスをとった場合には、主語を総称的に解釈することはできなくなる。

- (45) a. 子供は元気だ。
b. 子供は昨日元気だった。

一方で(42)のような例は、時間副詞と共起し、存在的なテンスをとっていないながら、主語は種としての総称的な読みしかあり得ず、主語名詞の総称性とテンスの総称性の間にずれが生まれている。これはなぜなのだろうか。

ここで着目したいのは、ここで用いられている「絶滅する」「発明される」といった述語が、Carlson (1977/1980)の分類における種レベル述語(kind-level predicate)であるということである。すなわち、(42)のような例において主語が総称的に解釈されるのは、Carlson (1977/1980)が指摘している通り、種レベル述語の語彙的な制約として、述語が適用される領域(domain)が種であることが指定されていることによる。つまり、種レベル述語は語彙的に主語の量化を要求していると言え、(42)のような例の主語はvPのレベルですでに量化済みの定項として見なされるものと考えられる。このように考えれば、(42)が「ものだ」補文に生起できないことには、(38b)(39b)のような定名詞主語の例と同様に説明を与えることができる。つまり、vPの指定部の位置ですでに定項となっているために、定名詞と同様にGENが空量化を起し、そのことによって(43)が非文となるのである。

このことが正しいとすれば、「ものだ」補文の主語の条件は、総称的に解釈されなければならないという単純なものではなく、その総称性がどのようなメカニズムによって与えられているかということまでを指定するものだということになる。すなわち、「ものだ」補文の条件は(41)から(46)のように修正される。

- (46) 「ものだ」補文の主語は、TP以上の指定部でGENによる量化を受ける裸名詞でなくてはならない。

このことは【表 6】にまとめることができる。【表 6】は、「ものだ」文の主語は、語彙的な制約としては裸名詞であること、統語的な制約としてはTP以上の指定部で総称量化を受けていることという、2つの制約を満たす必要があることを表している。

【表 6】 「ものだ」補文へ生起する主語

	定名詞	裸名詞
TP 以上の指定部	*	○
vP 指定部	*	*

「ものだ」補文の制約を【表 6】のように捉えることによって、裸名詞主語が「ものだ」補文に生起できるか否かという判断から、テンスの総称性を判断することが可能になる。主語が裸名詞であっても存在的なテンスをとっている文は、主語が vP 指定部の位置で解釈されているために、「ものだ」補文に生起することができない。「ものだ」補文に生起可能な裸名詞主語の例は、主語が TP 以上の指定部で解釈されることを指定する、総称テンスを持つ文だということになる¹⁵。

3.3 本章のまとめと今後の課題

ここまで、本章では Kratzer、Diesing のアプローチと情報構造およびテンスがどのような関係にあるのかを明らかにし、テンスの総称性を中核とすることで事象／属性の対立に関わる 5 つの要因が体系化できることを主張してきた。その際、日本語の助詞や、数量詞遊離の環境および「ものだ」補文の環境に着目することで、この体系性が明示的に論じられることを示した。本節では本章のまとめとして、本章で論じてきたことが、日本語の属性叙述文研究、および理論的な総称文研究の双方へ、どのように貢献するものであるのかを述べる。また、今後の課題についても挙げる。

まず、理論的な研究への貢献としては、本章での議論が Kratzer、Diesing のアプローチをより発展させる成果となっていることが挙げられる。Kratzer、Diesing のアプローチの限りでは、情報構造との関係が明らかではなく、C & E-R (2002) による批判的な検討も存在した。しかしながら、本章で日本語の助詞の観点から現象を整理することにより、情報構造的な観点も構造的なアプローチの中に統合できるものであることが明らかになった。また、Kratzer、Diesing のアプローチで

¹⁵ ただし、総称的なテンスをとる文が全て「ものだ」補文に生起するわけではない。(38b)(39b)に見るような定名詞主語の例は総称テンスをとっていると考えられるが、語彙的な制約として主語が定名詞であるために「ものだ」補文に生起することができない。つまり、総称テンスをとる文には主語が総称量化を受ける文と受けない文が存在し、「ものだ」補文は前者のみをはかることのできるテストだということである。

は、裸名詞主語の解釈に現象が限られていたが、本章では、**Krifka et al. (1995)**で指摘されているようなテンスに着目する観点を補い、テンスの総称性を中核にして他の要因との関係性を示した。これにより、裸名詞だけでなく定名詞主語の例も統一的に扱うことが可能になった。また、そのような体系化を支持する現象として、日本語には数量詞遊離、および「ものだ」補文の環境が存在することを指摘し、具体的な現象の中でこれらの相関関係を捉えることが可能であることを示した。

次に、日本語の属性叙述文研究に対する貢献としては、事象叙述／属性叙述という対立に構成的にアプローチするための体系化を示したことが挙げられる。本章での議論からすれば、vP 内で主語が解釈される存在的なテンスをとる文は事象叙述文であり、TopP 指定部で主語が解釈される総称的なテンスをとる文は属性叙述文であるということになる。このように、テンスを中核として他の要因との関係を捉えることにより、益岡 (1987, 2008)において「属性叙述文」とされてきたものの中には、存在テンスをとる文と総称テンスをとる文の双方が存在していることが明らかになった。3.2.3.2 節で見た(47)のような種レベル述語の例は、「ものだ」補文へ生起できないことから存在テンスをとる文であると判断されるものの、益岡 (2008)では「履歴属性」として属性叙述文の一種として扱われる文である。

(47) a. 恐竜は白亜紀に絶滅 した／している。

b. 電話は 1876 年に発明 された／されている。

本章での議論からは、存在的なテンスをとる(47)のような属性叙述文と、総称的なテンスをとる属性叙述文は、主語の統語的位置という構造的な観点からは異なるものであることが明らかになった。

また、本章で示した体系化は、日本語の助詞に関する先行研究の知見を、叙述類型の議論の中に位置づけることで明らかになったものである。益岡 (2000)では、総記のガを用いた文は「指定叙述」という別の叙述類型が与えられているため、総記／中立叙述のガの対立は、必ずしも事象叙述／属性叙述の対立の中で論じられてきたものではない。しかし、構成的な本論文のアプローチからは、主語の統語的位置により総記／中立叙述の対立と裸名詞主語の存在／総称解釈の並行性が捉えられることになる。

今後の課題については、数量詞遊離および「ものだ」補文の環境に関して、それぞれ発展的な課題が挙げられる。まず、数量詞遊離に関しては、用いられる数量詞の性質に着目する観点が必要である。本章での議論では、数量詞遊離の環境に関して、弱

決定詞を用いた数量詞遊離を問題にしてきたが、強決定詞の数量詞遊離に関しては区別して考える必要がある。3.2.3.1 節では、ILP の主語からの弱決定詞の遊離が許されないことを論じたが、以下の(48)に見るように、「全て」「全員」といった強決定詞であれば ILP の主語からの遊離も許されることが知られている(大木 1987; 三原 1998; Homma 2015)。

- (48) a. 子供が全員正直だ。
b. 男性が全員背が高い。

これは、強決定詞が前提集合を要求するため、遊離位置に存在していても主語に前提集合のない存在解釈を強いるわけではないことが要因だと考えられる。強決定詞に関しては、弱決定詞と違って定名詞からの遊離も許されることが Homma et al. (1992) でも指摘されている。定名詞から強決定詞が遊離した(49b)は、弱決定詞が遊離した(50b)よりも許容度が高い。

- (49) a. (?)その全ての男(たち)がうなぎを食べた。
b. その男(たち)が全てうなぎを食べた。
(50) a. その3人の男(たち)がうなぎを食べた。
b. *その男(たち)が3人うなぎを食べた。 (Homma et al. 1992: 25)

また、(51)のような例に関しても、無文脈では非文となるが、数量詞遊離のホスト名詞「学生」に前提的な集合を与え、「3人」を部分数量として解釈した場合には許容度が上がる¹⁶。

- (51) *学生が3人正直者だ。 ((37b)再掲)

以上に見るように、弱決定詞のみならず強決定詞の数量詞遊離にまで考察を広げた場

¹⁶ 部分数量を表す解釈に関しては、統語的な構造を区別して分析するべきだとする先行研究も存在する(Watanabe 2008)。

合に関しては、発展的な課題が残されている¹⁷。

さらに、「ものだ」文に関する発展的な課題として、以下の(52a)のような「定義文」と呼ばれる例が「ものだ」補文には生起しないという問題がある(澤田浩子先生 個人談話)。

(52) a. 三角形は3つの辺から成る。

b. *三角形は3つの辺から成るものだ。

(52a)は恒常的に成り立つ三角形の定義について述べる、総称的なテンスを持つ例であるが、(52b)に見るように「ものだ」補文への生起は許されない。本論文で提案した「ものだ」補文の条件が正しければ、(52a)では定名詞主語の場合と同様、GENによる総称的な量化は行われていないものと考えられる。しかしながら、定義文とそれ以外の総称文の違いに関しては明らかでない部分が多く、この問題に関しては今後の発展的な課題としたい。

以上、本章では、日本語の主語名詞句をマークする助詞に着目し、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチする利点を示した。これに対し、次章では目的語名詞句をマークする助詞に着目して、構成的なアプローチの利点を論じる。さらに、目的語についても、本章で明らかにした主語に関する議論と並行的な説明を与えることができることを論じる。

¹⁷ 英語の数量詞遊離は、定名詞からの強決定詞の遊離しか許されないことが知られている。このため、英語においては数量詞遊離によってテンスの総称性を判断することはできないが、日本語ではこれが可能であり、日本語を対象とする利点の一つと見ることができる。

第4章 日本語における事象叙述／属性叙述の対立と

目的語

前章では、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチするにあたり、日本語の主語名詞句に着目する観点が重要であることを明らかにした。前章で論じたように、テンスの総称性は主語の統語的位置と相関関係を持つ。さらに、Diesing (1992)の写像仮説によれば、裸名詞句の存在／総称解釈の可否は名詞句の統語的位置に依存するため、主語名詞句の解釈に着目することでテンスの総称性が判断できることになる。このように、前章の議論においては、事象叙述／属性叙述という対立が主語と密接な関係を持っていることが明らかになったが、目的語は事象叙述／属性叙述の対立にどのように関係しているのだろうか。

本章で焦点を当てるのは、一見同じような意味を表すと思われる(1)のような対立である。

- (1) a. 学生はそうじの時間が嫌いだ。
- b. 学生はそうじの時間を嫌っている。

(1)は、述語形式の違いにともない、目的語をマークする格助詞の対立を示す例であり、(1a)の目的語は主格で、(1b)では対格でマークされている。日本語では(2)に見るように、状態述語文において目的語が主格でマークされる事実が古くから指摘されている(久野 1973 他)。

- (2) a. 太郎は納豆 *が／を 食べる。
- b. 太郎は納豆 が／を 食べられる。

(2)は、非状態述語が状態性の接辞(可能接辞)をとることで主格目的語が可能になるタイプであるが、(1a)のように単純形の状態述語の中にも主格目的語をとるタイプが存在する。つまり(1)は、述語の状態性による、主格目的語と対格目的語の統語的な対立として捉えられるということである。このような、目的語をマークする格助詞の違いは、事象叙述／属性叙述の対立とどのような関係を持っているのだ

ろうか。

本章では、事象叙述／属性叙述の対立を個々の要素に分解し、構成的なアプローチを試みることによって、主語だけでなく目的語と事象／属性の対立の関係が論じられるようになることを示す。また、日本語の主格目的語に着目することで、Diesing (1992)の統語と意味の写像仮説をより発展的に支持することができることを主張する。具体的には、Diesing の写像仮説によって結びつけられている 2 種類の主語位置と名詞句の解釈の相関関係と並行的に、目的語に関しても 2 種類の統語的位置が存在することを明らかにする。

本章の構成は以下の通りである。4.1 節では、目的語名詞句の解釈に関する先行研究、および日本語の主格目的語に関する先行研究を概観する。その上で 4.2 節では、(1)のような対立を主語名詞句と目的語名詞句の統語的位置という観点から論じ、日本語の現象から Diesing の写像仮説がより発展的に支持できることを示す。4.3 節では目的語名詞句の解釈に関してより詳細な議論を行い、主格目的語をとる単純形述語にも 2 種類が存在することを指摘する。そして、その 2 種類の意味的対立もまた、目的語の統語的位置の対立として捉えられることを示す。4.4 節では本章のまとめを行う。

4.1 先行研究と問題の所在

本節では、目的語名詞句の解釈に関して、先行研究がどのような現象を問題にしてきたかを示すとともに、日本語の主格目的語に関する先行研究を概観し、(1)の示した対立を 4.2 節において論じるための前提となる議論を行う。

4.1.1 目的語名詞句の解釈

Diesing (1992)によれば、裸複数名詞句の解釈はその統語的位置に依存すると仮定されており、VP 内(本論文での枠組みでは vP 内)の裸複数名詞は存在解釈を受けるものとされている。これに従えば、V の補部位置を占める裸目的語は、全て存在的に解釈されることが予測される。そして、その予測は概ね正しいことが、(3)のような例において裸目的語の数量詞遊離が許されることから確認できる。

- (3) a. 花子は車を 2 台所有している。
- b. 太郎は弁護士を 3 人知っている。

3.2.3.1 節で論じたように、数量詞が遊離したホスト名詞句は vP 内部で解釈されなければならないため、数量詞遊離が可能な(3)の裸目的語は、中核スコープに写像される vP 内で存在解釈を受けていると考えられる。このような現象は英語においても基本的に同様であり、裸目的語は基本的に存在解釈を受け得る。しかし、先行研究では、裸複数目的語に総称解釈しか許さない動詞が存在することが問題とされてきた。以下の(4a)のような例では、目的語 *lawyers* の存在解釈が許されるが、(4b)では総称解釈しか許されない。

(4) a. John knows lawyers.

b. John hates lawyers.

(Cohen & Erteschik-Shir 以下 C & E-R; 2002: 126)

すなわち、(4a)においては「ジョンが知っている弁護士がいる」という目的語の存在解釈が可能であるが、(4b)は「ジョンが嫌っている弁護士がいる」と読むことはできず、「ジョンは弁護士一般が嫌いである」という総称解釈しか存在しないとされている(Carlson 1977/1980; Diesing 1992; C & E-R 2002; Glasbey 2006, 2008 他)。このような存在解釈の許されない目的語は、*like*, *hate*, *fear* といった経験者主語(以下、ES: experiencer subject)心理動詞のとり項であることが、Carlson (1977/1980)において最初に指摘されている。

(4b)のような例に対して、Diesing (1992)では、目的語が制限節に写像される位置にスクランブリングされることが仮定されている。しかし、C & E-R (2002)、Glasbey (2006, 2008)らによって、スクランブリングという任意の操作では ES 心理動詞の目的語に義務的に総称解釈が与えられていることが説明できないこと、またなぜ ES 心理動詞という特定の意味領域に限りそのような現象が見られるのか、という根本的な問題には説明が与えられないことが、問題点として指摘されている。

日本語においては、(4)とよく似た現象が、(5)のように述語の形式、および目的語をマークする格の対立を伴って存在する。

(5) a. 太郎は子供が嫌いだ。

b. 太郎は子供を嫌っている。

(5a)に見るように、状態述語のとり主格目的語においては存在解釈が許されず、「太郎は子供一般が嫌いである」という、目的語の総称解釈のみが可能である。一方で、(5b)に見るように、非状態動詞のとり対格目的語は存在解釈が可能である。このことは、(6)に見るように、数量詞遊離の可否からも明らかにすることができる。

(6) a. *太郎は子供が3人嫌いだ。

(cf. 太郎は3人の子供が嫌いだ。)

b. 太郎は子供を3人嫌っている。

(6)の対立に見るように、主格目的語からの数量詞遊離は許容度が低いのに対し、対格目的語からの数量詞遊離は許容度が高い。類例としては、「好きだ」と「好んでいる」、「怖い」と「怖がっている」などの対立が考えられ、いずれもES心理述語の対立と見ることができる。このように、日本語では英語の例と異なり、格と述語形式が明確に異なる対立が現れるため、その存在解釈の有無を統語構造の違いと捉えることが可能となる。

以降、4.1.2節で主格目的語の先行研究を概観した上で、4.2節においてES心理述語のとり目的語の主格／対格目的語の対立について論じる。その際、格標示を手がかりにすることで、述語の構造から目的語の解釈の非対称性が説明できることを示す。

4.1.2 日本語の主格目的語

本節では、主格目的語の構造的位置に関する先行研究を概観する。これまで、主格目的語研究の多くは、Sano (1985)以来認められてきた(7)のようなスコープ解釈の判断に基づき、主格目的語と対格目的語に見られる構造的な非対称性を説明することを主な目的としてきた。

(7) a. ジョンは右目だけをつむれる。(ラレ>ダケ、*ダケ>ラレ)

b. ジョンは右目だけがつむれる>(*ラレ>ダケ、ダケ>ラレ)

(7a)の対格目的語の例においては、「ジョンは右目だけをつむるということが出来る」、つまりジョンはウィンクすることができるという、ラレよりダケが狭い解釈が可能である。一方、(7b)の主格目的語の例においては、「ジョンがつむることが

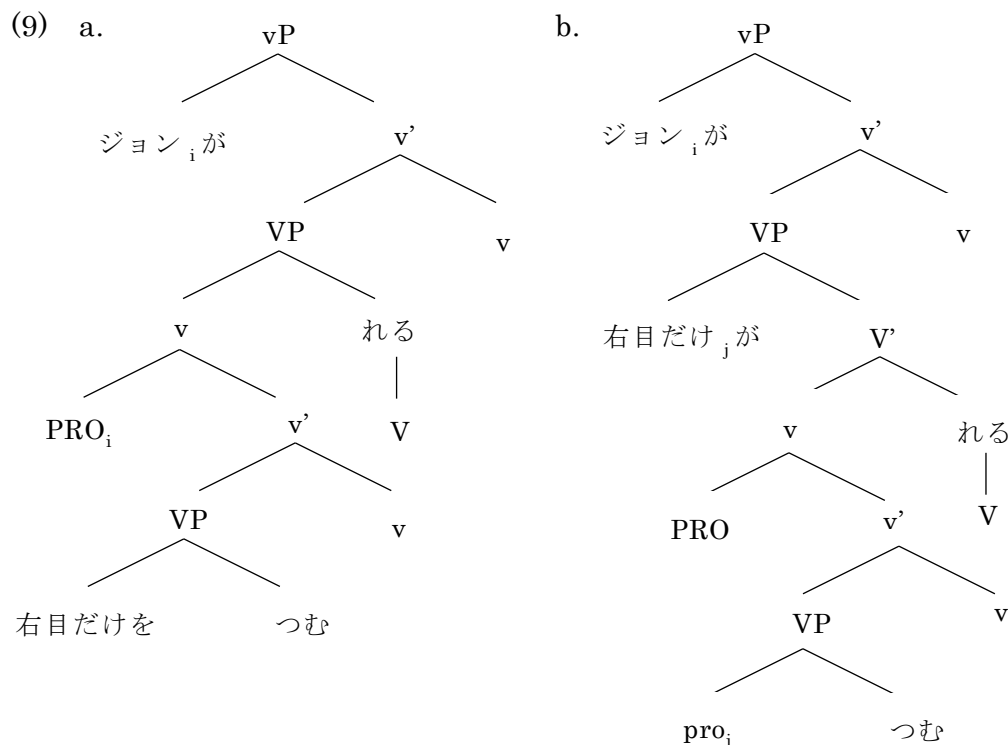
できるのは右目だけだ」、つまりジョンは何らかの理由で左目をつむることができず、つむれるのは右目だけだという、ラレよりダケが広い解釈となる。そして、互いに逆のスコープ解釈は許容度が低いとされている。

(7)の対立を説明する研究の主なものとして、ここでは Takano (2003)の予期的目的語(proleptic object)分析を取り上げる¹。スコープの解釈においては、再構築(reconstruction)により、元位置(痕跡位置)でも解釈がなされることが知られている。(8a)の例で言えば、「2冊の本に対し、誰もがそれを買った」という「2冊の本」が「誰も」よりも高い解釈(8b)と、「誰もがそれぞれ2冊の本を買った」という「2冊の本」が「誰も」よりも低い解釈(8c)が存在する。後者の解釈は、スクランブリングを受けた元位置(痕跡位置)で解釈されていると考えられる。

- (8) a. 2冊の本_jを誰もが_iが_{t_j}買った。
b. [TP 2冊の本_jを [TP 誰も_iが [TP t_i [VP t_j 買った]]]]
c. [TP 誰も_iが [TP t_i [VP 2冊の本を買った]]]]

Takano (2003)は、(7)の対立に見るように主格目的語の低いスコープ解釈が存在しないことから、対格目的語が(9a)のような構造を持つのに対し、主格目的語は(9b)のような構造を持つと主張している。(9b)において、主格目的語は可能形よりも高い位置に基底生成され、それと同一指示の *pro* が下位の *V* の補部位置に置かれている。つまり、下位の *V* の補部には移動の元位置(痕跡位置)が存在しないと考えることで、再構築が起こらないことを説明しているのである。これに対し、(9a)のような対格目的語においては下位の *V* の補部位置に目的語が存在するため、ダケの狭いスコープ解釈が可能になると考えられる。

¹ 他に Tada (1992)、Koizumi (1994)らの格の認可によるアプローチや、Saito and Hoshi (1998)、Kato (2003)らの主要部の併合によるアプローチも存在するが、これらは全て主格目的語の高いスコープ解釈を前提としているため、移動と分析されるにせよ、併合(merge)、あるいは基底生成と分析されるにせよ、主格目的語が可能接辞よりも高い位置に存在することを統語的に規定するものである。



Takano(2003)は、このような高い位置に基底生成される主格目的語を予期的目的語と呼んでいるが、これは概ね「x について言えば」というような意味を表すものであり、先触れの目的語(object of anticipation)と称される以下の(10)での of John に相当するようなものである(Hoji 1985; Ura 2000 他)。この of John は he に先立って提示され、「ジョンについて言えば」というような意味を表す。

(10) I believe of John that he is a genius.

ここまで見てきたように、スコープ解釈を主眼に置いた主格目的語研究の流れにおいては、可能形などの補文をとるタイプの主格目的語の構造が主に扱われており、管見の限り、単純形の主格目的語の構造のみを詳細に議論することは試みられていない。Takano (2003)では単純形に関する個別の議論はなく、Takezawa (1987)、Ura (2000)、三原 (2006)などでは単純形述語のとり主格目的語が V/A の補部位置に存在する構造が想定されているが、単純形述語について詳細に議論が行われているわけではない。本章では、単純形の主格目的語の持つ統語構造について、目的語の解釈という観点から考察を行う。

4.2 対格目的語と主格目的語の対立

本節では、前節で概観した Takano (2003)の予期的目的語分析に基づき、(11)に見る主格目的語と対格目的語の解釈の非対称性に、構造的な説明を与える。

- (11) a. 太郎は子供が(*3人)嫌いだ。
(cf. 太郎は 3人の子供が嫌いだ。)
b. 太郎は子供を(3人)嫌っている。

前述の通り、(11a)「嫌いだ」のとする主格目的語は総称解釈しか許されないのに対し、(11b)「嫌っている」のとする対格目的語は存在解釈が可能である。類例としては以下の(12)(13)のような例が挙げられる。

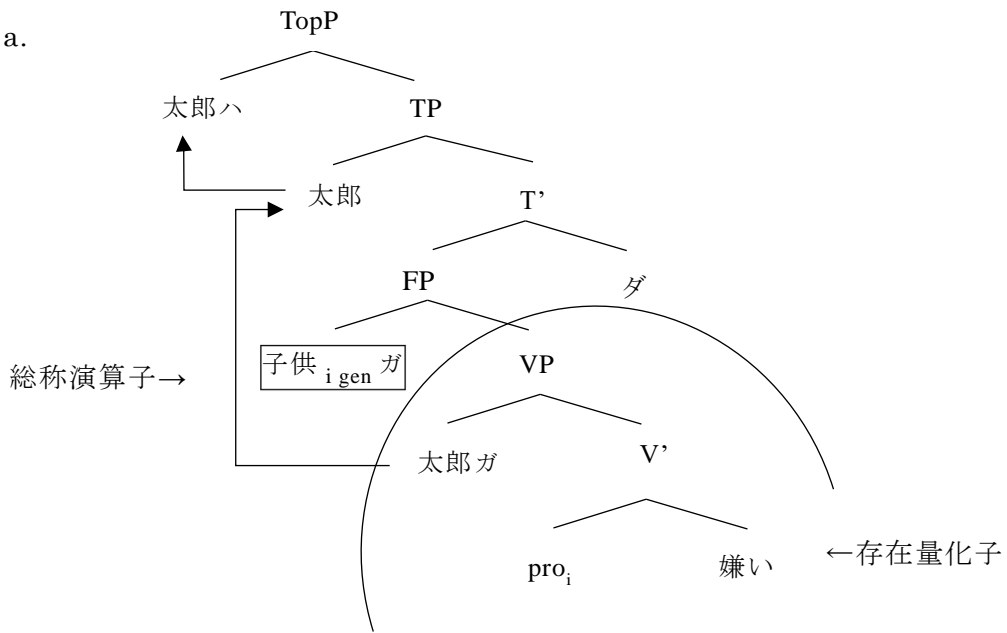
- (12) a. 太郎は女性が(*2人)うらやましい。
(cf. 太郎は 2人の女性がうらやましい。)
b. 太郎は女性を(2人)うらやんでいる。
(13) a. 太郎は犬が(*3匹)怖い。
(cf. 太郎は 3匹の犬が怖い。)
b. 太郎は犬を 3匹怖がっている。

(13b)は(13a)に動詞化接辞ガルが接続した例と見ることができる。接辞が用いられている点で(11a,b)や(12a,b)のような対立とは異なるが、(13a,b)の対立に関しても基本的に同様の議論が成り立つと考えられる。

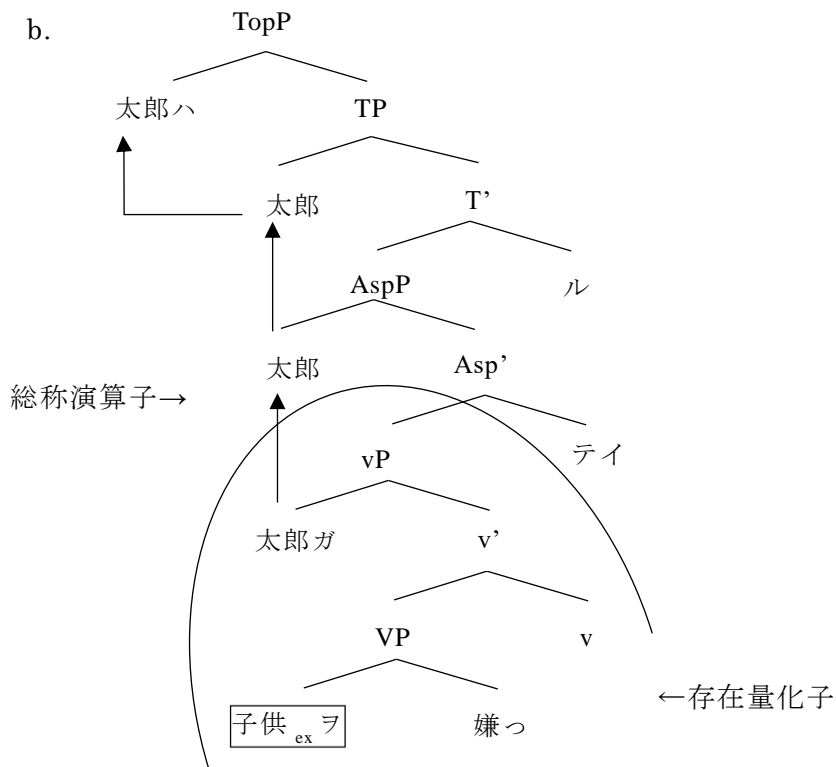
英語を対象とした先行研究においては、ES 心理動詞の目的語に総称解釈しか許されない事実が、Diesing (1992)の写像仮説にとって問題となることが指摘されてきた。しかし、日本語の現象を見ることにより、主語と並行的に目的語に関しても vP 領域と TP 領域に 2つの位置が存在すると考えることができる。すなわち、補文をとるタイプの述語に想定されているように、単純形述語に関しても、主格目的語と対格目的語の構造的な位置の対立を想定することによって、解釈の非対称性に説明が与えられるのである。

本論文では、(11)のような対立に対し、(14)のような構造の対立を提案する。

(14) a.



b.



(14b)に見るように、「嫌っている」のとり対格目的語は、「嫌う」という非状態動詞がとる項であるため、Vの補部位置に生起している。すなわち、中核スコープに写像されるvP領域で格の認可が行われることから、存在解釈が得られることが分かる。これに対し、(14a)に見るように、「嫌いだ」のとり主格目的語はvP領域外に予期的に生起し、Vの補部にはproが置かれるのみである。その上で、高い位置

に基底生成された目的語がその *pro* と同一指示を持つことによって、関係を結ぶ構造をとっている²。ここでは、Takano (2003)が論じているように、TP 領域内にある種のトピック的な要素を指定部とする機能範疇(FP)があることを仮定している。「嫌いだ」のとり主格目的語は *vP* 外に生起するため、GEN の作用域で義務的に総称解釈を得る。

(14)の対立には、述語の状態性が大きな役割を果たしている。(14b)において、目的語が *V* の補部位置で対格を付与されるのは、述語が非状態動詞であるためである³。一方、(14a)において目的語に主格が付与されるのは、述語が状態述語であるためである。つまり、「嫌いだ」と「嫌っている」は、どちらも状態的な意味を表すという点では差がないが、「嫌いだ」が持つ語彙的な状態性と「嫌っている」が持つ文法的な状態性は、明確に区別することができる。「嫌っている」のとり対格目的語は非状態動詞「嫌う」の項であり、テイルが与える文法的な状態性は対格の付与には関わっていないことになる。そして、2.1.1 節でも言及したように、非状態動詞は常に SLP であるという Fernald (2000)の一般化が存在するため、ES 心理動詞のテイル形は SLP であることが予測される。一方、状態述語であれば ILP であるとは限らないため、ES 心理を表す語彙的な状態述語は、状態述語であることでもって直ちに SLP か ILP かを判断することはできない。しかし、以下に見る 2

² 「嫌いだ」のとりガ格は二重主語と分析されることもある(Tonoike 1980; Kiss 1981 他)が、(14a)に示したように「対象」の意味役割を受けとる目的語としての位置が必要である。このことは、「好きだ」「嫌いだ」の述語が(i)に見るように環境によっては対格をとれることから示唆される。

- (i) a. 太郎が花子 が/?を 好きなことは誰でも知っている。
b. 太郎は花子 が/?を 好きになってしまった。

また、これらの述語が対格をとり得ることは、Sugioka (1984)にも指摘がある。

³ 以下の(ii)に見るように、英語では単純現在形で現在時を指す読みが存在すること、また進行形が許容されないことから ES 心理動詞は状態動詞だと見なされることが多い(Grimshaw 1990 他)。

- (ii) a. We fear the storm.
b. *We were fearing the storm. (Grimshaw 1990: 23)

しかし、三原 (2000)が指摘しているように、日本語の ES 心理動詞は単純現在形では(習慣の読みを除けば)未来時を指し、テイル形も許容される。

- (iii) a. 太郎は嵐を怖がる。
b. 太郎は嵐を怖がっている。

ES 心理動詞の表す意味は物理的なものではないため、テイル形の解釈が動作進行か結果状態かは判断が難しい部分があるが、三原 (2000)ではアスペクト的には活動動詞としてのふるまいを見せることが指摘されている。

つの環境からは、ES 心理を表す状態述語が ILP であることが示される。

まず、(15)(16)(17)に見るように、主語からの数量詞遊離に関しては、ES 心理動詞のテイル形のみが許される。

- (15) a. *学生が 3 人そうじの時間が嫌いだ。
b. 学生が 3 人そうじの時間を嫌っている。
- (16) a. *大人が 3 人子供がうらやましい。
b. 大人が 3 人子供をうらやんでいる。
- (17) a. *女の子が 3 人虫が怖い。
b. 女の子が 3 人虫を怖がっている。

3.2.3.1 節で論じたように、主語からの数量詞遊離を許すのは、vP 内で主語が解釈され得る SLP のみである。すなわち、ES 心理を表す語彙的状态述語は、主語の存在解釈が不可能であることから、ILP であることが示される。一方、ES 心理動詞のテイル形は存在解釈が許されるため、SLP であることが分かる。

また、ここで論じている SLP と ILP の対立は、時空間項の有無として捉えることができる。時空間項の有無は、Kratzer (1989/1995)が論じているように、量化の演算子が存在する環境に生起できるか否かという観点から確かめることができる。以下の(18)の対立に見るように、「背が高い」のような ILP は「常に」「いつも」といった量化副詞と共起することができないが、「元気だ」のような SLP はこれが可能である。

- (18) a. *太郎は 常に／いつも 背が高い。
b. 太郎は 常に／いつも 元気だ。

(18)のような対立には、2.1.3 節で概観した when 条件節における ILP と SLP のふるまいの対立と並行的に説明を与えることができる。すなわち、ILP は時空間項を持たないため、量化副詞と共起した場合に空量化を起し非文となるが、SLP は量化副詞が時空間項を束縛する事が可能なため、共起が許されると考えられる。

ES 心理を表す語彙的状态述語と ES 心理動詞のテイル形の対立は、量化副詞との共起からも明らかになる。(19)(20)(21)に見るように、ES 心理を表す語彙的状态述語は「常に」「いつも」などの副詞と共起できないのに対し、ES 心理動詞のテ

ル形は共起可能である。

- (19) a.??太郎は 常に／いつも 花子が嫌いだ。
b. 太郎は 常に／いつも 花子を嫌っている。
- (20) a.??太郎は 常に／いつも 花子がうらやましい。
b. 太郎は 常に／いつも 花子をうらやんでいる。
- (21) a.??太郎は 常に／いつも 花子が怖い。
b. 太郎は 常に／いつも 花子を怖がっている。

すなわち、ES 心理を表す語彙的状态述語は ILP であるが、ES 心理動詞のテイル形は SLP であるということが、時空間項の有無という観点からも示されることになる。

以上、本節では ES 心理を表す語彙的状态述語がとる主格目的語と、ES 心理動詞のテイル形がとる対格目的語の解釈の対立に関し、両者が異なる構造を持つと考えることによって説明が与えられることを論じた。SLP である非状態動詞においては、目的語が V の補部位置で対格を与えられるとともに、存在的なテンスのもとに生じることが可能であることから、主語も vP 指定部に存在する。そのため、ES 心理動詞のテイル形は対格目的語・主語ともに存在解釈を受けることができる。一方、ILP である状態述語は、目的語に主格が与えられることによって、予期的に vP 外に生起することが可能である。さらに、主語も総称的なテンスが C から談話的素性の継承を受けることによって TP 以上の指定部に引き上げられるため、ES 心理を表す語彙的状态述語は主格目的語・主語ともに総称解釈のみを受けることになる。このように、日本語の現象を考える上では、総称解釈のみを受ける目的語は構造的に高い位置に生起すると考えることが可能である。これは、Diesing (1992)が主語に関して論じている VP(vP)内／外という 2 つの統語的位置が、目的語に関しても存在することを意味しており、名詞句の意味解釈と統語的位置を写像関係で捉える Diesing (1992)のアプローチを発展的に支持する現象と捉えることができる。

しかし、このような高い位置に生起する目的語の特徴を捉える上では、主格が付与されているという形式的な特徴だけでなく、述語の意味的な性質も考慮する必要がある。次節では、同じ主格目的語をとる単純形の述語が、意味的には 2 つのグループに分けることができることを論じ、両者の比較の中で目的語が高い位置

に生起する述語群の特徴を明らかにする。

4.3 評価系の主格目的語と所有系の主格目的語の対立

4.3.1 主格目的語をとる単純系述語の二分類

4.1 節で概観したように、補文をとるタイプの主格目的語の構造的な分析においては、主格目的語が広いスコープのみをとることを前提に議論が行われてきた。しかし、近年の研究では主格目的語は狭いスコープもとり得る、すなわち下位の V の補部という、統語的に低い位置に生起できる可能性も指摘されている。Nomura (2005)は、Sano (1985)以来認められてきた(22)のようなスコープ解釈の判断に反して、(23)に見るように主格目的語の狭いスコープ解釈も存在することを指摘している。

- (22) a. ジョンは右目だけをつむれる。(ラレ>ダケ, *ダケ<ラレ)
b. ジョンは右目だけがつむれる>(*ラレ>ダケ, ダケ>ラレ) ((7)再掲)
- (23) 太郎が小指だけが曲げられるのは知っていたが、(彼が)薬指だけが曲げられるのには驚いた。(Nomura 2005: 176)

補文をとるタイプの主格目的語に関して指摘されている 2 種類の統語的位置に対し、本論文では、単純形述語に関しては述語の意味的性質がどちらに生起するかを決定していることを示す。

久野 (1973)によれば、主格目的語をとる単純形の状態述語としては以下の(24)のような語群がある⁴。

- (24) a. 能力⁵を表す形容詞・形容動詞：上手だ、下手だ、得意だ、苦手だ
b. 内部感情を表す形容詞・形容動詞：好きだ、嫌いだ、欲しい、怖い

⁴ 本論文では、考察範囲から以下の述語を除く。まず、久野の分類で「自意志によらない感覚動詞」とされている「見える、聞こえる」の持つ状態性は、本論文で扱う評価/所有の対立には関わらない、特定の時空間に依存したものと考えられることから、議論の対象から外しておく。また、「欲しい」は所有の願望を表す所有系の述語と考えられ、目的語の存在解釈を許すが、与格主語を許さないという例外的なふるまいが見られるため、本論文では扱わない。これらの述語の扱いは今後の課題である。

⁵ 久野 (1973)ではこれらを「能力」を表す語としてまとめているが、基準となるテスト等を提示しているわけではない。本論文では、後述する統語的基準によってこれらを「評価」を表すものであると分類し、「能力の所有」とは別に扱う。

- c. 可能を表す動詞：できる、分かる
- d. 所有・必要を表す動詞：ある、いる、要る、必要だ
- e. 自意志によらない感覚動詞：見える、聞こえる

これらの語群には、前節で見たように目的語に総称解釈しか許さないものが存在する一方で、存在解釈を許すものも存在する。以下の(25)に見るような述語は裸名詞目的語の総称解釈しか許さないのに対し、(26)の述語は裸名詞目的語からの数量詞遊離が可能であり、存在解釈を許す。

- (25) a. 太郎は数学の先生が(*3人)嫌いだ。
- b. 太郎は歌が(*3曲)上手だ。
- c. 太郎は医者が(*3人)苦手だ。
- (26) a. 太郎は外国語が(3つ)分かる。
- b. 太郎は子供が(3人)いる。
- c. 太郎は本が(3冊)要る。

存在解釈の可否からすれば、(25)の主格目的語は予期的な高い位置に生起しているのに対し、(26)は同じ主格目的語であっても vP 内に生起していると考えられる。

(25)と(26)の述語群では何が異なるのだろうか。これらの述語群が決定的な対立を見せるのは、「所有」の意味を表せるか否かである。この意味的な違いは、主語を与格でマークできるかという統語的なテストによって判断することができる。与格主語を許さず、所有の意味を表さないものが(27)、与格主語が可能であり、所有の意味を表すものが(28)である⁶。(28a)のような可能の意味が関わるものは、能力の所有と考えることができる。

⁶ 評価系に属する「怖い」「うらやましい」などの述語において、主語がニでマークされ得ることは一見ここでの一般化の反例のように思われる。しかし、眞野 (2004) では、与格主語をとる述語の中でニトッテとの置き換えができるものが「判断」、できないものが「所有」を表す述語と分類されており、本論文でも所有の定義はニトッテとの置き換えが不可能な与格主語をとるものとする。

- (i) a. ??太郎は犬が 3 匹怖い。
- b. 太郎 に(は)／にとって(は) 犬が怖い。
- c. 太郎 に(は)／*にとって(は) 子供がいる。

- (27) a. *太郎に(は)数学の先生が嫌いだ。
 b. *太郎に(は)歌が上手だ。
 c. *太郎に(は)医者が苦手だ⁷。
- (28) a. 太郎に(は)外国語が分かる。
 b. 太郎に(は)子供がいる。
 c. 太郎に(は)本が要る。

本論文では、与格をとることができない(27)の述語を「評価」を表す述語と名づけ、(27)(28)の対立を、主格目的語をとる述語の「所有系」と「評価系」の対立として捉える。久野 (1973)が挙げている主格目的語をとる単純系述語を与格主語の可否に従って分類し直すと、以下の(29)のように示すことができる。

(29) a. 評価系

- ①能力の評価を表す述語：上手だ、下手だ、得意だ、苦手だ等
 ②評価的感情を表す述語：好きだ、嫌いだ、怖い等

b. 所有系

- ①所有・必要を表す述語：ある、いる、要る、必要だ
 ②能力の所有を表す述語：できる、分かる

この分類は、大まかには動詞が所有系述語に対応し、形容詞が評価系に対応すると見ることもできる。しかし、(29b)にも形容動詞が含まれることから分かるように、形容(動)詞対動詞という観点で分かれているわけではなく、述語の表す意味において対立しているものと考えられる。この対立は(25)に見る目的語の存在解釈の可否と並行しており、所有と評価の意味的対立が目的語の 2 つの生起位置、およびその解釈を決めていると考えられる。すなわち、所有系の述語の目的語は V の補部位置で存在解釈を、評価系の述語の目的語は vP 外で総称解釈のみを受けていることになる。このような対立は、久野 (1973)のような個々の語彙の意味に基づく分類では明らかにされてこなかったものである。本節では、与格主語の可否という統語的な基準から述語の意味的対立を捉え、これを目的語の解釈の対立と結び

⁷ 久野 (1973: 51)では、「苦手だ」が与格をとることが可能であるという判断がなされているが、これを認めない母語話者は多い。

つけることにより、個々の語彙の意味を超えて区別すべき基準を明らかにした。次節では、予期的な目的語をとる評価系述語と所有系述語の違いがどのように捉えられるものであるのかを、さらに詳しく論じていく。

4.3.2 評価系述語と所有系述語の意味的・構造的相違

前節での議論を踏まえると、所有と評価の意味的対立が目的語の 2 つの生起位置、およびその解釈を決めていることになる。それでは、なぜ評価系述語の目的語のみ予期的に生起することが可能なのだろうか。本節では、所有系述語との比較の中で評価系述語の性質を明らかにし、予期的目的語をとる述語の条件を明らかにする。

ここまで、目的語に関しても主語の議論と並行的に 2 種類の統語的位置が存在することを論じてきた。「嫌いだ」と「嫌っている」のような状態述語と非状態動詞の目的語位置の対立に関しては、主語位置と同様に ILP と SLP という述語の意味的性質が関与していることが、4.2 節の議論により明らかになっている。それでは、目的語が vP 内に存在すると考えられる所有系の状態述語に関しても、SLP であると考えられるのだろうか。このような予測に反して、所有系述語の文法的ふるまいは ILP としての性質を示す。意味的にも、「兄弟がいる」などの親族関係の所有や、「ほくろがある」のような分離不可能な身体部位の所有といった、一度所有関係が結ばれれば変わらない恒常的な所有を表す述語は、ILP だと考えることができる。具体的な現象からこのことを示すと、(30)(31)の非文法性は所有系述語が ILP としての性質を持つことを意味している。

- (30) a. *学生が 3 人弟がいる。
b. *子供が 3 人ほくろがある。
- (31) a. *私は常に弟がいる。
b. *太郎は常にほくろがある。

所有系述語は主語からの数量詞遊離が許されず⁸、量化副詞とも共起できない点で、ILP としての性質を示している⁹。

評価系述語と所有系述語の対立が単純に ILP と SLP に相当するものと考えられないとすれば、両者はどのような点において異なるのだろうか。所有系述語において興味深いのは、ILP の述語であっても場所句が生起する(32)のような例が存在することである。

- (32) a. 太郎は故郷に弟がいる。
b. 太郎は顔にほくろがある。

(32)の場所句は、「太郎は弟がいる」「太郎はほくろがある」という叙述自体を特定

⁸ 所有系述語の主語からの数量詞遊離に関しては、与格主語であれば許容度が上がるとする話者もいるが、一方で柴谷 (1978)においては(i)のような例は許容度が低いと判断されている。

- (i) a. *これらの学生に、3人フランス語がわかります。
b. *これらの子供たちに、5名親がありません。 (柴谷 1978: 246)

このような判断の揺れの問題も含め、主語が与格でマークされた場合と主格でマークされた場合の構造の違いは先行研究においても十分に議論されていない部分であり、今後の課題としたい。

⁹ 所有系述語の中には、目的語の性質によって量化副詞との共起が許される以下の(ii)のような例があるが、(iii)に見るように数量詞遊離の可否に関してはこれらも ILP としての性質を示す。

- (ii) a. 太郎には常に恋人がいる。
b. 太郎には常に味方がいる。
(iii) a. *学生が3人恋人がいる。
b. *男が3人味方がいる。

(ii)の適格性は、Kratzer (1989/1995)で論じられている以下の(ivb)の適格性と並行的に捉えられる可能性がある。

- (iv) a. *When Mary knows French, she knows it well.
b. When a Moroccan knows French, she knows it well. (Kratzer 1995: 129)

when 条件節に存在する非頭在的な演算子は束縛すべき変項を要求するが、(iva)では述語がイベント変項を持たない ILP であり、主語も定項であるため、空量化を起こすことから非文となる。一方、(ivb)では主語を変項として量化が行われるため適格となる。このことと並行的に考えるならば、(ii)のような例でも量化副詞が目的語の与える変項を束縛していることが想定できる。ただし、量化副詞との共起が可能な「子供」「弟」のような目的語と「恋人」「味方」といった目的語は、形式面から単純に定名詞と不定名詞の対立と見ることはできない。前者の目的語は特定の指示対象を持つためある種の定項と見なされる一方、後者の目的語は特定の指示対象を持たず、入れ替わりの読みが可能な変項としてはたらくものであると考える必要がある。

の空間に位置づけるものではなく、目的語である「弟」「ほくろ」の存在場所を位置づけるものである。所有系述語であれば、このような目的語の存在場所を空間的に位置づける場所句の生起が可能となっている。一方、評価系述語はこのような場所句の生起が許されない。以下の(33)に見るように、評価系述語は主語を空間的に位置づけることが許されないだけでなく、目的語を空間的に位置づけることも不可能である。

- (33) a. *太郎は小学校に先生が好きだ。
b. *太郎は人前に演技が得意だ。

所有系述語は ILP でありながら、なぜ目的語を空間的に位置づけることができるのだろうか。

Endo, Kitagawa and Yoon (2000)は、「欲しい¹⁰、必要だ」などの述語は、以下の(34)に見るように、非頭在的な存在動詞を述語とする小節(small clause)をとる複合的な構造を持つと指摘している。

- (34) Subj_iが [sc pro_i Objが φ_{BE}] 欲しい／必要だ。

(34)のような構造を想定する根拠となる現象としては、イディオムと時間副詞の修飾の2点が挙げられている。

まずイディオムに関して見てみると、存在動詞を用いたイディオム表現(35)が、「欲しい」「必要だ」にも可能であることが以下の(36)から分かる。

- (35) a. あの役者には華がある／ない。
b. 歌舞伎の舞台裏には女っ気がない。
(36) a. もう少し華が 欲しい／必要だ。
b. 少しくらい女っ気が 欲しい／必要だ。

(Endo, Kitagawa and Yoon 2000: 86)

¹⁰ 本論文では「欲しい」は議論の対象から外しておくが、「欲しい」は目的語の存在解釈を許す点では所有系述語のふるまいを見せる。注4も参照されたい。

(36)においてイディオム解釈が可能であることを説明するためには、以下の(37)に示すように、非顕在的な存在動詞があることを仮定する必要がある。

(37) pro_i [_{sc} pro_i 華が ϕ_{BE}] 欲しい／必要だ

次に、時間副詞の修飾に関しては、以下の(38)に見るように、基本的には時間副詞が表す意味はテンスの形式が表す意味と一致していなければならない。

(38) a. *私は来週のリサイクルで新しいドレスを着た。
b. *私は来週まで車を運転した。 (Endo, Kitagawa and Yoon 2000: 88)

しかし、「欲しい」「必要だ」に関しては、以下の(39)のように、一見この制約が破られているかのように見える例が存在する。

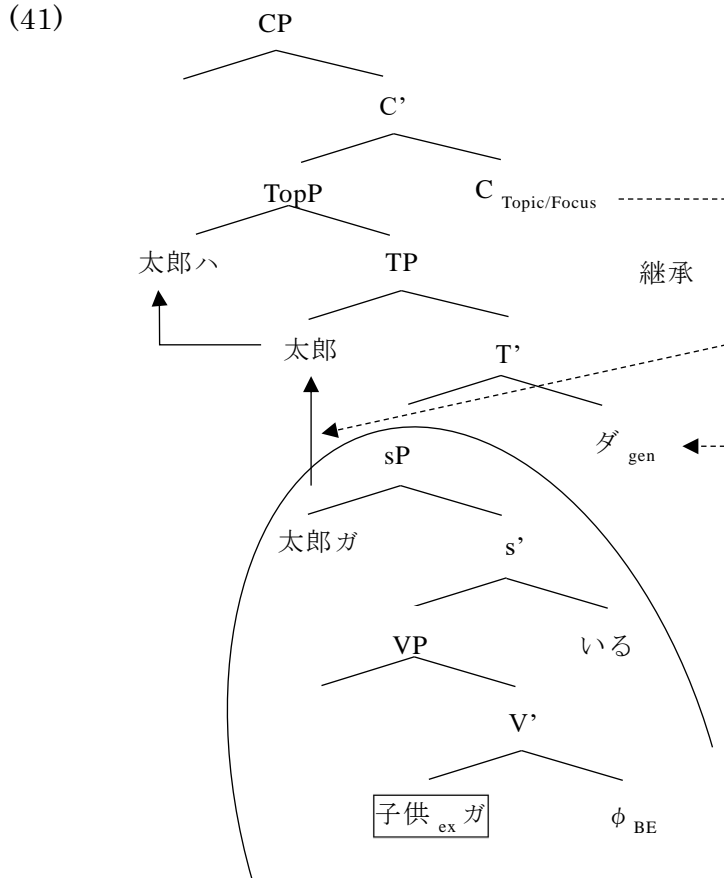
(39) a. 私は来週のリサイクルで新しいドレスが欲しかった(ので奮発してしま
った)。
b. 私は来週まで車が必要だった。 (Endo, Kitagawa and Yoon 2000: 87)

(39)のような例の存在を(38)のような例と矛盾なく捉えるためには、以下の(40)に示すように、非顕在的な存在動詞を述語とした小節を仮定し、時間副詞は小節内の述語と一致した意味を表していると考えなければならない。

(40) 私_iは [_{sc} pro_i 来週のリサイクルで新しいドレスが ϕ_{BE}] 欲しかった。

また、Endo, Kitagawa and Yoon (2000)が扱っている以外の所有系述語に関しても、複合的な構造を仮定している先行研究が存在する。竹沢 (2000)は、(32)に見た目的語を修飾する場所句の生起に着目し、「いる、ある」などの所有動詞の構造の内部には、存在動詞があることを論じている。竹沢 (2000)において、所有の動詞は、下層のVP内で場所句が目的語を叙述し、そのVP全体が所有者句を叙述するという、2つの叙述関係を含んだ構造を持つものとして分析されている。本論文でも、所有系述語は、(41)に示すように非顕在的な存在動詞を主要部とするVP

を内部に持つ、複合的な構造をしているものとする¹¹。



(41)に見るように、所有系述語の目的語は非頭在的な SLP(ϕ_{BE})のとり項であるため、VP 内に存在する。さらに、vP 内が中核スコープに写像される領域であることによって、裸目的語には存在解釈が与えられる。しかし全体としては、主語が内部の SLP を含む VP 全体を所有するという複合的な構造をとっているために、述語全体は ILP としての性質を示すものとなっている。このことは、(41)が総称的なテンスのもとに生じる構造を持つことによって示されている。3.2.2 節で論じたように、ILP は総称的なテンスと結びついており、総称的なテンスが C から談話的素性の継承を受けることにより、所有系述語の主語は TP 指定部に引き上げられる。そのため所有系述語において、主語は TP 領域で解釈される一方、目的語は

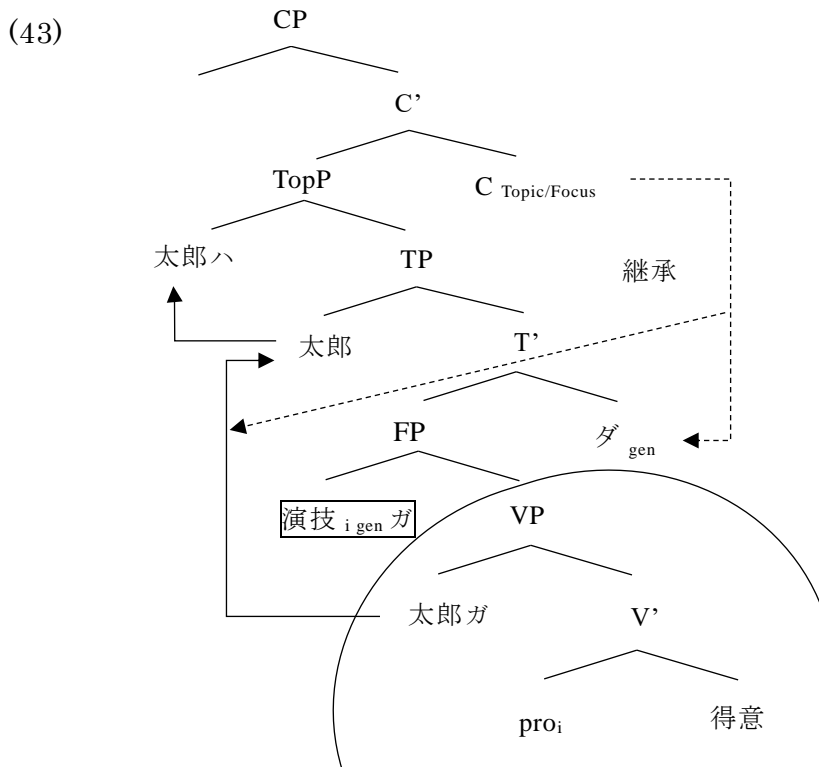
¹¹ (41)のような複合的な構造を示すにあたり、ここでは状態性軽述語(light predicate)を表す機能範疇として s を用いる。Ura (2000)、竹沢 (2000)では、外項の導入と対格の認可を行う v に対し、s は外項を導入するが対格を認可しないものとして想定されている。

VP 領域で解釈されるという非対称性が生じることになる。

ここまで見てきた所有系の述語は、基本的に(29b)において「所有・必要を表す述語」と分類したものであったが、「能力の所有」を表す述語に関しても同様に場所句の生起が可能である。ただし、以下の(42a)に見るように、目的語の存在場所ではなく行為の場所として、二句ではなくデ句が選択されるのにともない、内部の構造に含む述語は、非頭在的な存在動詞ではなく行為動詞(ϕ do)として仮定される。

- (42) a. 太郎は人前で演技ができる。
 b.*太郎は人前で演技が得意だ。

一方で、(42b)に見るように評価系述語はデ句であっても生起が許されない。つまり、評価系述語の特徴は本来的に空間に依存しない性質を持つことであり、ILP であっても、目的語であれば空間上に位置づけることのできる所有系述語とは、この点において異なる。統語構造としても、複合的な構造をとる所有系述語とは異なり、評価系述語は以下の(43)に見るように単一の VP をとる。



評価系述語は所有系述語と同様に ILP であることから、総称的なテンスのもとに

生起し、目的語のみならず主語も TP 領域(vP 外)で意味解釈を受ける。このように、評価系述語と所有系述語が ILP であるという点では共通していながら、目的語位置が異なるという事実は、所有系述語にのみ複合的な構造を仮定することで捉えられることになる。

4.4 本章のまとめと今後の課題

本章では、目的語の解釈が事象叙述／属性叙述の対立にどのように関係するものであるのかを論じた。本章で扱った現象は以下の(44)に挙げられるような対立であるが、大きく2つの論点が存在する。

- (44) a. 太郎は子供が嫌いだ。
b. 太郎は子供を嫌っている。
c. 太郎は子供がいる。

一つは、アスペクト形式および目的語をマークする格の観点から裸名詞目的語の解釈に説明が与えられる(44a,b)の対立である。(44a,b)は、状態述語のとり主格目的語と非状態動詞のとり対格目的語の対立であり、この対立は述語の状態性に伴う ILP/SLP という意味的対立として捉えられる。つまり、(44a,b)の対立において、裸名詞の存在解釈の可否は、主語と目的語で一致している。もう一つの論点は、述語の状態性というアスペクトの観点のみでは捉えられない(44a,c)の対立である。(44c)に関しては、主語の解釈と目的語の解釈が一致せず、複合的な構造を想定する必要がある。評価系の主格目的語をとる述語が単一の VP を持つのに対し、所有系の主格目的語をとる述語は、非頭在的な SLP を主要部とする小節をとりながら、全体としては ILP であるという複合的な構造を持っている。

これらの関係は以下の【表 1】にまとめることができる。

【表 1】主格／対格目的語をとる述語の意味的ふるまい

	語彙的狀態述語		非狀態動詞＋テイル
	評価系 嫌いだ、上手だ	所有系 いる、分かる	嫌っている、 怖がっている
a. 主語の解釈	総称解釈のみ	総称解釈のみ	存在解釈可能
b. 目的語の解釈	総称解釈のみ	存在解釈可能	存在解釈可能
c. 述語の意味的 性質	ILP	SLP を内側に 含む ILP	SLP

【表 1】に示すように、所有系の状態述語と非状態述語＋テイルは、目的語に存在解釈が許されるという点では同じだが、それぞれに存在解釈が許される理由は異なる。所有系の状態述語の目的語に存在解釈が許されるのは、内側に非顕在的な SLP を含んでいるためである。主語と目的語の間に結ばれる「所有関係」という、文全体の表す叙述は、時空間的に位置づけられるものではないが、目的語の存在場所(あるいは行為場所)は、空間的に位置づけることが可能である。

一方、非状態動詞＋テイルの目的語に存在解釈が許されるのは、対格目的語が非状態動詞の V の補部位置に生起するものであることによる。評価系の状態述語と「嫌っている、怖がっている」のような非状態動詞＋テイルは、一見同じような ES 心理としての意味を表すことができるが、これらは述語の語彙的な状態性が異なるのにもとない、目的語の統語的位置も異なる。評価系の状態述語は、ILP であることから目的語を特定の時間軸上に位置づけることができず、所有系との対比から明らかになったように、空間的にも位置づけることができない。このような性質を持つ目的語は、VP 内に統語的位置を持たず、常に高い予期的な位置に生起す

る¹²。

このような、日本語の主格目的語に着目した分析は、日本語の属性叙述文研究、および理論的な総称文研究の双方に貢献するものである。これまでの属性叙述文研究では、主語をマークする助詞に着目されることが多く、事象叙述／属性叙述の対立に主語が関係していることは古くから認識されていた(佐久間 1941; 三上 1953)。しかし、叙述の対立に目的語がどのように関係しているかは、これまでのところほとんど論じられてこなかったと言える。目的語をマークする格助詞、および述語の意味的性質に着目した本章の分析は、事象叙述／属性叙述の対立を構成的に捉えるアプローチによって可能になったものである。記述的な貢献としても、これまで一括されてきた主格目的語をとる単純系述語に、評価系と所有系という 2 種類が存在することを明らかにした。また、理論的にも、状態述語のとり目的語が主格でマークされる日本語の現象に着目することで、状態述語と非状態述語のとり目的語を、構造的な位置が異なるものと考えることが可能になった。そして、主語位置と並行的に、目的語位置に関しても vP 内外に 2 つの統語的位置が存在することを明らかにした点で、Diesing (1992) の写像仮説をより発展的に支持する成果を挙げることができたと言える。

最後に、本章の議論に関連する発展的な課題について 2 点述べる。まず 1 点目に挙げられるのは、補文をとるタイプの主格目的語の統語的位置に関する先行研究との接点を探ることである。本章では、単純形状態述語のとり主格目的語について主に論じたが、補文をとるタイプの主格目的語については、本章で言及した Takano (2003)、Nomura (2005) をはじめとして、多くの研究の蓄積が存在する分

¹² 英語の ES 心理動詞の目的語の総称解釈を説明する先行研究には、総称解釈を許さない know と総称解釈を許す hate に前提を持つか否かで違いがあるとする分析がある。C & E-R (2002) は、‘hate X’ という事態は ‘know X’ ということを前提としているのに対し、‘know X’ という事態はそのような前提を持たないと論じている。日本語の所有文のガ格名詞に関しては、岸本 (2005) などによって定性制約が見られることが指摘されており、英語の there 構文と並行的に分析できることが示されている。

- (i) a. *ジョンには、(その){ほとんどの／すべての}兄弟がいる。
b. ジョンには、{たくさんの／何人かの／三人の}兄弟がいる。

(岸本 2005: 177)

これが正しければ、日本語の評価系述語と所有系述語の間にも前提性の違いを想定し、TP 領域に義務的に生起する ILP の主語と評価系述語の目的語を、前提性という観点からも並行的に捉えられる可能性がある。

野である。本章で論じた目的語名詞句の解釈という観点から、それらの研究とどのように結びつくものであるのかについては、さらに検討を加えなくてはならない。また、本章では所有系述語の共通性を捉える形で議論を展開したが、「子供がいる」のようなタイプと「お金が要る」のようなタイプでは、特定の時空間上に位置づけられる意味を表しているか否かという点で違いがある。つまり、複合的な構造をとっており、内部に含まれる SLP の持つ vP 内部に目的語が位置しているという点では両者は共通しているが、ILP の中に SLP が埋め込まれている場合と、SLP の中にさらに SLP が埋め込まれている可能性が考えられる。いずれにせよ、所有系述語は少なくとも内部には SLP を含むという一般化が揺らぐものではないが、この相違点に関しては、どちらのタイプを所有系述語の典型例として考えるべきかという問題も含め、今後の課題としたい。

また、発展的な研究の可能性として、もう 1 点挙げられるのは、意味と統語構造の写像関係をより精緻化していく方向性である。本章での議論から明らかになった複層的な構造を持つ所有系述語の存在は、意味論的に論じられるイベント性と統語構造との写像関係、具体的には時空間項とされる SLP のみが持つ非顕在的な項が、統語上どの位置に生起するものであるのか、といった問題を提起するものである。意味論的に設定された時空間項という概念が統語上どのように具現するのかという問題設定は、非常に興味深いものであるが、まだ明らかになっていない部分が多く、今後の課題としたい。

第 5 章 非状態動詞におけるル／テイルの対立：

アスペクト形式に着目した習慣文の分析

前章までの議論では、日本語の属性叙述文を対象として論じる利点として、主に助詞の存在に焦点を当ててきたが、本章以降では、日本語のアスペクト形式に焦点を移して議論を行う。本章および次章では、第 3 章で提示した枠組みをもとに、日本語を対象とする 2 つ目の利点であるアスペクト形式に着目し、アスペクト形式の対立が文全体の叙述にどのような影響を与えるのかを明らかにする。

第 3 章において整理したように、SLP は存在／総称テンス双方のもとに生起可能であることから、裸名詞主語に存在／総称解釈の双方を許す。一方、ILP は義務的に総称テンスと結びつくため、裸名詞主語には総称解釈のみを許す。しかし、SLP である非状態述語がテイル形を伴った場合には、主語には存在解釈しか許されなくなる¹。(1a)は動作進行解釈、(1b)は結果状態解釈のテイル形であるが、いずれも数量詞遊離を許すことから明らかなように、裸名詞が存在解釈を受けている。

- (1) a. ねこが 3 匹眠っている。
b. 枝が 3 本折れている。

アスペクト形式であるテイルは、動作進行と結果状態のいずれであっても、特定の時間軸上に現れた出来事の展開を表すものであり、存在テンスと結びついたものだと言える。このように、裸名詞主語の解釈を決定する要因として、語彙的に SLP か ILP かという観点の他に、文法的なアスペクトの観点を考慮する必要がある。

ここで問題となるのは、日本語のテイル形が上記の 2 つに限られない広範な意味を表すことができる点である。テイル形の担う意味領域の広さを考慮した際に、テイル形であれば常に存在テンスと結びつくとも一般化できるのか、という問題設定が考えられる。テイル形であっても、以下の(2a)のような習慣の意味を表すテイル形は、1 つの特定の出来事を表すものではなく、(2b)のような習慣を表すル形と近似した意味を表す。

¹ 英語において、現在進行形の動詞をとる裸複数主語が存在解釈のみを受けることは Carlson(1977/1980)、Diesing (1992)などに指摘がある。

- (2) a. 日本人は毎日お米を食べている。
b. 日本人は毎日お米を食べる。

(2)のような量化された意味におけるル形とテイル形の対立が、叙述としての意味にどのように関与しているかを明らかにすることは、アスペクトと叙述の相関関係を論じる上で発展的な問題設定になり得る。

本章では、非状態述語のル形、あるいはテイル形を用いて量化された意味を表す文を便宜的に「ル形習慣文」、「テイル形習慣文」と呼ぶ。そして、それぞれが表している「習慣」の意味が、異なる意味解釈メカニズムから導かれるものであることを論じる。本章の目的は、習慣として表される量化された意味においても、テイル形が存在テンスと結びついていることを示すことである。本章では、一見同じような意味を表しているように思われるル形習慣文とテイル形習慣文が、テンスの観点からは区別されるべきことを主張する。すなわち、前者が総称テンスと結びつくのに対し、後者は存在テンスと結びついていることを明らかにする。

本章の構成は以下の通りである。まず 5.1 節では、先行研究の概観を行う。以降で論じる存在／総称テンスとアスペクトの関わりについて、これまでどのような指摘がなされているか、そしてどのような問題が残されているかを確認する。また、日本語のアスペクトに関する先行研究も概観し、文法的なアスペクトとテンスの総称性がどのように関わるものであるのかを見ていく。そして、本章で習慣を表すル形とテイル形のアスペクト的対立に着目する理由について改めて述べ、本章での問題提起を行う。5.2 節では、ル形習慣文とテイル形習慣文の違いを説明するための枠組みとして、「個体の量化」と「イベントの量化」が区別されるべき意味解釈プロセスであることを、先行研究の指摘をもとに確認する。5.3 節では、個体量化とイベント量化の違いを想定することで、日本語のル形習慣文とテイル形習慣文の対立が現れるいくつかの言語現象に説明が与えられることを論じる。そして、個体量化とイベント量化の違いを主語に解釈が与えられる統語的位置の違いに結びつけ、アスペクト形式の対立が存在／総称テンスの対立として捉えられることを示す。5.4 節では、5.3 節までの議論で明らかになったことから、文法的なアスペクトとテンスの総称性の間にどのような相関関係が見られるかをまとめる。そして、テイル形習慣文には用いられる動詞のアスペクトから区別されるべき 2 種類が存在することを指摘する。5.5 節では本章での議論のまとめを行う。

5.1 先行研究：叙述類型とアスペクト

叙述類型とアスペクトとの関係については、先行研究では個別の指摘や記述的な一般化が提出されているものの、まだ明らかにされていない部分が多く残されている。本節では、5.1.1 節で SLP/ILP という述語分類とアスペクトの関わりに言及している先行研究を概観し、5.1.2 節において日本語のアスペクトに関する先行研究を概観する。そして、5.1.3 節において改めて本章での問題設定を述べる。

5.1.1 SLP/ILP とアスペクト

本節では、SLP/ILP 分類とアスペクトがどのような関係にあるかという問題に関して、先行研究の指摘を概観する。

はじめに、語彙的なレベルにおいて、SLP/ILP という述語分類がアスペクト的意味とどのような関係を持っているのかを見ていく。SLP/ILP という述語分類は、述語の表す意味が特定の時空間的に位置づけられるものであるか否かに基づいている。そのため、述語が表す状況・事態の時間的展開が問題にされるアスペクト的意味とは密接な関係がある。述語のアスペクト的意味は、以下の(3)に見る4つのタイプに分類できることが知られている(Vendler 1967; Dowty 1979 他)。

- (3) a. 状態(States)：元気だ、正直者だ、いる、ある、できる…
- b. 活動(Activities)：歩く、叩く、笑う、泳ぐ、働く…
- c. 到達(Achievements)：着く、壊れる、折れる、見つかる、死ぬ…
- d. 達成(Accomplishments)：壊す、折る、作る、切る…

ILPは(3a)の状態述語に属し、また(3b,c,d)の非状態述語は基本的に SLP であるが、状態性と SLP/ILP という分類が完全に並行するわけではない。状態述語には「元気だ」と「正直者だ」のように、SLP と ILP の対立が存在する。2.1.1 節でも言及したように、このような関係は(4)のように一般化されている(Fernald 2000)。

- (4) 全ての非状態述語は SLP であり、全ての ILP は状態述語である。

すなわち状態述語の下位分類として、個体レベルの状態述語と場面レベルの状態述語が存在することになる。

そして、この状態述語における個体レベルと場面レベルの対立には、非状態述語

における分類と、一定の並行性が存在することが指摘されている。以下の(5)に見るように、限界性(telicity)において対立する活動動詞と達成動詞の区分が、内項による影響を受けることはよく知られた事実である。

- (5) a. John solved problems *in an hour.
 b. John solved these problems in an hour.

裸複数名詞の内項をとる(5a)の solve は期間限定の副詞と共起しないことから分かるように非限界的(atelic)な活動動詞であるが、内項を指示的にした(5b)は、期間限定の副詞と共起できる限界的(telic)な達成動詞となる。このように、動詞の限界性というアスペクト的性質は、語彙的に定まるのではなく、内項を含んだ VP のレベルで決まるものであることが知られている。

このことと並行的に、場面レベルの状態述語と個体レベルの状態述語が同じく限界性によって対立を見せることが指摘されている。以下の(6)の対立に見るように、ILP か SLP かという対立も、内項による影響を受けるとされる(Olsen 1994, 1997; Fernald 2000; Husband 2010)。

- (6) a. Monkeys live in trees. [総称/*存在]
 b. Monkeys live in that tree. [総称/存在]

(6)の対立は、(5)と同様に、内項の指示性による対立である。live のような状態動詞はこれまで ILP とされてきたものであり、裸複数名詞の内項をとっている(6a)のような例においては、主語が総称解釈のみを受けるが、内項を指示的にした(6b)においては、主語の存在解釈が可能になることが指摘されている。Husband (2010) では、述語が ILP であるか SLP であるかという分類も、ある種の限界性に基づくものであることが示されており、活動動詞と到達動詞の対立と同様に、限界性が内項の性質によって決まるものであることが論じられている。このように、語彙的、あるいは VP レベルでのアスペクト的性質は、SLP/ILP 分類と非常に密接な関係が存在する。

また、文法的アスペクトと叙述類型の相関関係についても、一定の記述的一般化が提出されている。Carlson (1977/1980)は、英語の現在進行形が主語の存在解釈と密接な関係があることを指摘している。

- (7) a. Basenjis yodel. [総称／存在]
 b. Basenjis are yodeling. [*総称／存在]

単純現在形をとっている(7a)において、主語は未来時を指す読みにおいては存在解釈、習慣的な読みであれば総称解釈というように、どちらに解釈することもできる。しかし、現在進行形をとる(7b)では、主語は存在解釈のみを受ける。本論文のアプローチに従えば、Carlson (1977/1980)の指摘は、現在進行形のアスペクトが存在的なテンスと結びつくという指摘として読み替えられる。3.2.1 節で論じたように、裸名詞主語が存在解釈を受ける、すなわち主語が vP 内に存在する構造は、存在的なテンスのもとに生じると考えるためである。Diesing (1992)においても同様に、進行のアスペクトが存在テンスの指標となる可能性が示唆されている²。スペイン語においては、述語が ILP であるか SLP であるかによって be 動詞の ser/estar が使い分けられることが知られており、Diesing (1992)は英語の進行形の be 動詞をスペイン語の estar に相当するものとして捉えている。

このような叙述類型と文法的アスペクトの相関関係に関する記述的な一般化は、現在進行形というアスペクトに限られたものなのだろうか。あるいは、文法的なアスペクト形式に関して、体系的に見られる現象と言えるのだろうか。次節では、英語より広範な意味領域を持つ日本語のテイル形に関する先行研究を概観する。

5.1.2 日本語のアスペクト研究

日本語のテイル形が表すアスペクト的意味は現在進行に限られず、(8)に見るように広範な意味領域をカバーすることが知られている(金田一 1950; 藤井 1976; 吉川 1976; 奥田 1977; 高橋 1985; 工藤 1982, 1995; 須田 2010 他)。

- (8) a. 太郎が走っている。 [動作の継続]
 b. 枝が折れている。 [変化結果の継続]
 c. この道は曲がっている。 [単なる状態]
 d. 太郎は富士山に3回登っている。 [経験・記録]
 e. 太郎は毎朝校庭を走っている。 [反復]

² Diesing (1992)では、stage-level Infl の指標という言い方がなされている。

工藤 (1995)では、テイル形の基本的意味は「継続性」であるとされており、(8a)に見る「動作の継続」と(8b)の「変化結果の継続」は「継続性」というアスペクトの意味に集約される。そして、その「継続性」から(8c,d,e)の派生的な意味も生じるとされている。

派生的なテイル形の用法は、(8a,b)と共通する意味を持ちつつも、もはや単一の出来事内部の時間的展開を述べる意味ではなくなったものである。「単なる状態」とは、「第四種動詞」(金田一 1950)とも呼ばれる、対応するル形の事態が存在しないテイル形である。(8c)は、「*この道が曲がった」結果として存在する結果状態ではなく、単に「この道」の恒常的な性質を述べるものである。(8d)の「経験・記録」とは、工藤 (1995)において「パーフェクト」と呼ばれている用法であり、先行して起こった出来事が設定時まで影響を及ぼしていることを表すテイル形である。益岡 (2008)が「履歴属性」とする例には、タ形の他に、「経験・記録」のテイル形も含まれている。「経験・記録」の用法は、出来事内部の時間的展開を問題にするのではなく、出来事が起きた時点と設定時との間の関連性を述べるものであり、アスペクトの意味とテンスの意味が複合化した意味であると捉えられている(工藤 1995)。出来事内部の時間的展開を問題にしていない点は「反復」も同様であり、(8e)の「反復」のテイル形は、幅広い期間において出来事が繰り返し生起することを表している。

(8)に見たテイル形の意味を叙述類型との関連から捉え直すと、「動作の継続」、「変化結果の継続」というアスペクトを表すテイル形の文は、特定の時間軸に位置づけられる出来事の展開を述べるものであり、存在的なテンスをとるものだと言える。このように、日本語を対象として文法的アスペクトとテンスの関係を論じる先行研究としては、長谷川 (2014)が存在する。長谷川 (2014)は、以下の(9)のような英語の中間構文と現在進行形の文の対立には、総称テンスと存在テンス³の対立、および文法的アスペクトを表す機能範疇 AspP の認可のされ方の違いが関与していることを指摘している。

(9) a. This book sells well.

b. Mary is reading this book.

³ 長谷川 (2014)では finite 時制という用語が用いられているが、本論文での存在テンスに対応するものとして捉えておく。

中間構文の例である(9a)は、*This book*の性質について述べるものであり、総称的なテンスをとる文であるが、(9b)は(7b)で見た裸名詞の例と同じく、存在的なテンスをとる文である。長谷川 (2014)は、テンスとアスペクトの選択関係(selection)を以下のように捉えている。すなわち、-ingを主要部とする現在進行形のAspPがV(be)によって選択されるものであるのに対し、ゼロ形を主要部とする中間構文のAspPは、総称テンスが選択するものと考えるのである⁴。

さらに、長谷川 (2014)では、以下の(10)のような日本語の対立が、(9)のような対立と並行的に捉えられる可能性が示されている。

- (10) a. このおもちゃは簡単に壊れる。
b. このおもちゃは(*簡単に)壊れている。

(10a)のような文は英語の中間構文と完全に並行的であるとは言えないが、(10)の対立は(9)と同じく、テンスの総称性の対立として捉えることができる。テイル形を用いた(10b)では、(10a)のような「このおもちゃ」の恒常的な性質について述べる意味を表すことができない。すなわち、(10b)は存在的なテンスと結びついていると言え、(10b)が(9b)のような現在進行形の例と一定の並行性を持っていることが分かる。このように長谷川 (2014)では、日本語においても、総称テンスがゼロ形のAsp主要部を選択するという選択関係が想定されている。

5.1.3 本章での問題提起

本章で問題にしたいのは、上述の文法的アスペクトとテンスの相関関係が、他のテイル形の用法にも見られるのかどうかという点である。日本語のテイル形は英語の進行形よりも広い意味領域に分布するため、日本語を対象にすることで、叙述とアスペクトの関係について、より発展的に議論することができると言える。長谷川 (2014)では「継続」の意味を表すテイル形が扱われていたが、派生的な意味を表すテイル形に関してはどのように考えられるだろうか。

⁴ 長谷川 (2014)では、Collins (2005)の受動文の「smuggling 分析」を中間構文にも援用する分析が示されており、中間構文と進行形の文のAspPは、認可のされ方や主要部が異なるだけでなく、指定部の要素のとり方も異なることが論じられている。また、他動詞の意味的な目的語が主語に立つ英語の中間構文のような構造が日本語に許されない理由は、日本語が主要部後置型の語順をとるためだとされている。詳細な議論に関しては長谷川 (2014)を参照されたい。

まず、「経験・記録」を表すテイル形に関しては、存在的なテンスと結びついて
いると考えられる。(11)に見るように、「経験・記録」を表すテイル形は、出来事
を特定の時間軸上に位置づける時間副詞との共起が可能である。

- (11) a. 太郎は 3年前にフランスに留学している。
b. 恐竜は 白亜紀に絶滅している。

このことは、「経験・記録」を表すテイル形が存在的なテンスのもとに生起してい
ることを示している。

それでは、「反復」を表すテイル形に関してはどのように考えられるだろうか。
工藤 (1982, 1995)において、「反復」を表す文は、(12)に示す時間的限定性のスケ
ールの中で、中間的に位置づけられるものとされている。

(12) 時間的限定性

<具体的>—————1回性	【アスペクト対立有、テンス対立有】
<抽象的>—————反復性	【アスペクト対立中和、テンス対立有】
<一般的(超時)>———特性	【アスペクト対立無、テンス対立無】
	(工藤 1995: 149)

具体的かつ 1 回性のイベントを表す例としては(13a)、「反復」を表す例としては
(13b)、一般的かつ特性を表す例としては(13c)が挙げられる。

- (13) a. ポチが 吠える／吠えた／吠えている／吠えていた⁵。
b. ポチは毎朝 吠える／吠えている。
c. 犬は 吠える。

⁵ 工藤 (1995)で実際に挙げられている例は(i)であるが、5.4 節で詳しく論じるように
(ib)のような到達動詞がイベントの反復を表す例は典型的ではないため、意図を損ね
ない範囲で動詞を変更したものを(13)に挙げている。

- (i) a. 花子が死ぬ／死んだ／死んでいる／死んでいた。
b. この頃よく子供が事故で死ぬ／死んでいる。
c. 人は死ぬ。 (工藤 1995: 149)

(13a)のような例には、アスペクトの対立とテンスの対立の双方が存在しているのに対し、(13c)のような例には、アスペクトの対立もテンスの対立も存在しない。そして、(13b)のような例は、ル形とテイル形が形式的には対立しているものの、意味的にはアスペクト的対立を示さないものとされている。そのため、(13a)と(13c)のような例を時間的限定性のスケールの中に位置づけた際、(13b)はその中間に位置づけられるものであるとされている。

(13b)のような例は、「ポチ」が繰り返し行う習慣的な動作でもって、「ポチ」を特徴づけている文と見ることができる。したがって、益岡 (1987)の定義によれば属性叙述文に相当するものである。本章では、このような習慣の意味を表すル形とテイル形の対立に焦点を当て、これらのアスペクト的対立と存在／総称テンスの対立がどのような関係にあるのかを論じる。工藤 (1982, 1995)では、ル形習慣文とテイル形習慣文のアスペクト的対立は中和しており、いずれもポテンシャルな動作について述べる意味を表すとされている。しかし、テンスの観点からル形習慣文とテイル形習慣文を捉え直した場合にも、両者が同じく総称的なテンスをとっていると言えるのだろうか。結論を先取りして言うと、本章では、一見同じような意味を表す(13b)においても、ル形とテイル形では異なる意味解釈メカニズム、および統語構造を持っているということを主張する。具体的には、ル形は総称的なテンスのもとに生起する一方で、テイル形は存在的なテンスのもとに生起することを明らかにする。また、「単なる状態」を表すテイル形に関しては、テイル形習慣文との比較を通して、5.4節において言及することとする。

5.2 説明の枠組み：「個体の量化」と「イベントの量化」

本節では、習慣文の意味を形式的に導こうとする先行研究において、どのような分析が提案されてきたかを概観する。その上で、日本語のル形習慣文とテイル形習慣文を分析する際に重要であると思われる、「個体の量化」と「イベントの量化」という意味論的な道具立てを導入する。

従来、意味論的観点から形式的に習慣文にアプローチする研究においては、量化された意味がどのようにして導かれるのかという点が問題にされてきた。以下の(14)のような、顕在的な量化副詞が現れていない習慣文においても、*usually*、*generally*に相当する GEN というデフォルトの演算子が非顕在的に存在していると考えられる点は、多くの研究者間で見解が一致している (Chierchia 1995; de Swart 1996; Diesing 1992; Dobrovie-Sorin 2003; Heim 1982; Krifka et al. 1995; Rooth

1995 他)。

- (14) a. Birds fly.
b. Dogs bark.

一方で、習慣文における GEN がどのような変項を束縛するかという問題には 2 つの考え方が存在する。Heim (1982)、Diesing (1992)らの考え方に従えば、GEN は個体変項を束縛するものである。2.1.3 節においても言及したように、ILP が用いられている(15a)のような例では、GEN は述語のとり個体変項を束縛しているものとして考えることができる。また、この関係は(15b)のように表せる。

- (15) a. Dogs are intelligent.
b. $GEN_x(\text{dog}(x))[\text{intelligent}(x)]$

(15)のような例と同様に、習慣文においても GEN が個体変項を束縛するものであるとすれば、(14a)は(16)のような論理式で表されることになる。

- (16) $GEN_x(\text{bird}(x))[\text{fly}(x)]$

しかし、Kratzer (1989/1995)の考えに従えば、ILP が個体変項のみをとるのに対し、SLP は個体変項だけでなく時空間項を持つという点に注意を払う必要がある。GEN に対するもうひとつの考え方は、GEN がこの時空間変項を束縛するというものである⁶。Rooth (1995)、de Swart (1996)などの考え方に従えば、習慣文では以下の(17)のような量化が行われていることになる。

⁶ より弱い言い方としては、時空間変項と個体変項の両方を束縛する(multiple binding)とする Chierchia (1995)、Krifka et al.(1995)などの分析もあるが、ここでは Rooth (1995)、de Swart (1996)に従い、イベント量化が行われる場合、GEN は直接的・選択的に時空間項のみを量化するものとする。

$$(17) \text{GEN}_e(C(e))[\exists x(\text{bird}(x) \wedge \text{fly}(x,e))]^7$$

(17)では、GEN は e で表される時空間変項のみを束縛しており、個体変項に対する直接的な量化は行っていない。(14a)の主語が受ける解釈は、「飛ぶ鳥がいる」という単なる存在解釈ではなく、ある種の総称的な解釈である。しかし、de Swart (1996)によれば、この解釈は GEN が個体変項を束縛することによるものではない。de Swart (1996)の分析において、主語の総称的な解釈は、イベントと個体の一对一の写像から語用論的推意が生まれることにより起因するものとされている。つまり、主語名詞句がイベントの中に含まれることにより、イベントが量化されるのに従って主語も量化を受けると考えるのである。この考え方に従えば、最終的に個体に総称的な量化が行われる操作は、論理式の中では示されないことになる。(17)では便宜的に、主語が中核スコープで存在量化を受けていることのみを示してある。

しかし、これらの先行研究のいずれにも問題があるとして、Dobrovie-Sorin (2003)では新たな分析が提示されている。Dobrovie-Sorin (2003)は、習慣文を分析する上で、GEN に加え HAB という 2 つ目の演算子を仮定している。HAB は非状態述語の時空間変項⁸を束縛して習慣相述語を返す単項演算子(unary operator)であるが、GEN は個体の量化を表し、個体と述部が表す命題をつなぐ関係演算子(relational operator)である。これに従えば、習慣文の意味は(18)のように表されることになる。

$$(18) \text{GEN}_x(\text{bird}(x))[\text{HAB}_e[\text{fly}(x,e)]]$$

このように 2 つの演算子を仮定する Dobrovie-Sorin (2003)の分析は、GEN の

⁷ 制限節の C(e)は、イベントを適切な状況の中に位置づけるものである(cf. Krifka et al. 1995 他)。習慣の意味解釈においては、述語の表す事態が現実世界の中で常に成り立つものでなくともよい。つまり、(14a)のような文においては、鳥が飛んでいない時間が存在していてもよい。

⁸ 厳密には、Dobrovie-Sorin (2003)において HAB が束縛するのは時間変項であり、イベント変項と時間変項は区別すべき概念であるとされている。ただし、習慣文の分析に GEN と HAB という 2 つの演算子を立てる分析と、述語の項構造にイベント項や時間項を立てるべきかという問題は、切り離して論じることが可能である。ここでは議論を簡潔にするため時間変項という概念は導入せず、HAB は時空間変項を束縛するものとしておく。

個体量化分析のみでは SLP の時空間変項が未量化のまま残ってしまう、という理論的な問題を克服するだけでなく、経験的にも利点が存在する。経験的な利点の 1 つは、以下の(19)のような文の曖昧性を説明できることである。

- (19) A student rarely reads novels.
a. ‘few students reads novels.’
b. ‘in general, a student infrequently reads novels.’

(Dobrovie-Sorin 2003: 30)

GEN の個体量化分析にせよ、イベント量化分析にせよ、演算子を 1 つのみ仮定する分析では、(19)の曖昧性を説明することができないが、演算子を 2 つ立てる分析では、これを(20)に示すようなスコープの曖昧性として捉えることができる。

- (20) a. FEW_x(student(x))[HAB_e[read novels(x,e)]]
b. GEN_x(student(x))[FEW_e[read novels(x,e)]]

つまり、(20a)の「小説を読む学生がめったにいない」という解釈は、「小説を読む」という習慣相述語を形成する HAB よりも、FEW 演算子が広いスコープをとる(20a)のような論理式によって表される。一方、(20b)の「学生というものは一般的に、めったに本を読まないものだ」という解釈は、「めったに本を読まない」という否定の習慣相述語を形成する FEW よりも GEN 演算子が広いスコープをとる(20b)のような論理式によって表される。

ここまで、先行研究の知見をもとに、習慣文の分析にとって重要であると考えられる、「個体の量化」と「イベントの量化」という意味論的な道具立てを導入した。

5.3 ル形習慣文とテイル形習慣文の対立

本節では、個体の量化とイベントの量化の違いを想定することによって、日本語のル形習慣文とテイル形習慣文の違いを明らかにする。そして、そのような意味解釈プロセスの違いをテンスの総称性の対立と捉えることが可能であることを示す。まず 5.3.1 節において、ル形／テイル形習慣文の対立が明らかになる具体的な現象について論じ、これらが個体量化／イベント量化という意味解釈プロセスの違いから説明を与えられることを示す。5.3.2 節では、本節での議論をまとめ、個体量

化／イベント量化という意味解釈プロセスの違いを本論文の枠組みから捉え直すと、主語の解釈される領域の違い、すなわちテンスの総称性に関わる違いと見なすことができることを示す。

5.3.1 ル形習慣文とテイル形習慣文の対立が現れる統語的環境

以下、ル形習慣文とテイル形習慣文の対立が現れる統語的環境について論じる。主語からの数量詞遊離、副詞との共起関係、「ものだ」補文への生起、連体従属節への生起という、4つの環境を順に見ていく、

5.3.1.1 主語からの数量詞遊離

本章冒頭で見たように、ル形習慣文とテイル形習慣文は、以下の(21)のような例においては一見同じような意味を表すように思われる。

- (21) a. 日本人は毎日お米を食べる。
b. 日本人は毎日お米を食べている。 ((2)再掲)

しかし、主語から数量詞を遊離させることによって、主語名詞句の解釈がどのように与えられるかを明らかにすることができる。以下の(22)に見るように、テイル形習慣文の主語からは数量詞遊離が許されるが、ル形習慣文の主語からの遊離は許されない。

- (22) a. *日本人が3人毎日お米を食べる⁹。
(cf. 3人の日本人が毎日お米を食べる。)
b. 日本人が3人毎日お米を食べている。

3.2.3.1 節で論じたように、数量詞が遊離したホスト名詞に許されるのは存在解釈のみである。そのため、(22)の対立は、テイル形習慣文の主語には存在解釈が許

⁹ ただし、条件節においてはル形習慣文においても数量詞遊離が可能になる。

- (i) a. 日本人が3人毎日お米を食べると、食費がかさむ。
b. 日本人が3人毎日お米を食べれば、食費がかさむ。

このことには、条件節が非実現(irrealis)の環境であることが関係している可能性がある。

されるのに対し、ル形習慣文の主語にはこれが許されないという事実を示していることになる。この点において、ル形習慣文は ILP を用いた文と並行的なふるまいを示している。ル形習慣文においては、語彙的には「走る」のような SLP が用いられており、主語が存在的に解釈されることが可能なはずである。しかし、数量詞遊離のテストからは、主語が存在解釈を受けることができないという、ILP のようなふるまいを見せることが明らかになるのである。

このような事実を捉えるためには、Dobrovie-Sorin (2003)が英語の単純現在形の習慣文において提案したように、語彙的には非状態述語であるものを習慣相述語にする演算子の存在を仮定する必要がある。その上で、習慣相述語となった SLP が、ILP と同様に総称的なテンスと結びつくものと考えることによって、ル形習慣文の主語が ILP の主語と同様のふるまいを見せることに説明を与えることができる。つまり、習慣相述語の主語は、ILP と同様に総称テンスによって義務的に vP 内部の位置から引き上げられるため、その個体変項が TP 以上の指定部で GEN による総称量化を受けるのである。

Dobrovie-Sorin (2003)に従えば、ル形習慣文の意味解釈は(23)のように表される。

- (23) a. 日本人はお米を食べる。
 b. $GEN_x(\text{Japanese}(x))[\text{HAB}_e[\text{eat rice}(x,e)]]$

(23b)に示した論理式では、個体変項(x)は制限節に存在し、GEN による束縛を受けており、中核スコープでは量化を受けていない。(23)を Diesing (1992)の写像仮説に従って構造的に捉え直すと、主語は TP 以上の指定部に義務的に写像されているということになる。その理由は、HAB 演算子のはたらきに帰せられる。SLP である ‘eat rice’ が、その時空間項を HAB 演算子に束縛されて習慣相述語となることにより、ILP と同様に主語が義務的に TP 指定部に引き上げられるのである。

一方、テイル形習慣文の主語は存在解釈を受けることが可能である。このことからすれば、ある種の量化を受け、習慣として解釈される際にも、テイル形習慣文の主語は vP 指定部に存在していると考えられる。この事実を捉えるためには、GEN が個体を直接束縛しているのではなく、意味解釈上、個体が存在量化を受けるプロセスが存在していると考えなければならない。すなわち、テイル形習慣文に関しては、Rooth (1995)や de Swart (1996)のイベント量化分析のように、演算子がイベント

を量化することによって、その中に含まれる個体も量化されるという関係を想定しなくてはならない。本論文では、テイル形習慣文の意味解釈を(24)のように提案する。

- (24) a. 日本人はお米を食べている。
b. $\text{REPEAT}_e(C(e))[\exists x(\text{Japanese}(x) \wedge \text{eat rice}(x,e))]$

(24)において、個体変項は中核スコープで存在閉包を受けており、構造的には vP 指定部に写像される。そして、そのような個体を含むイベントごと、その変項が REPEAT という演算子に束縛されることを示している。演算子が GEN でないのは、次節で見るようにテイル形習慣文が表す意味がイベントの総称的な量化ではなく、反復であることを表している。

次節では、習慣相述語を形成する HAB 演算子のはたらきとアスペクトとの関係について詳しく見ていく。

5.3.1.2 副詞との共起関係

本節では、副詞との共起関係を観察することを通して、前節で見たル形における HAB 演算子の働きが非状態述語を状態述語にするはたらきであることを見ていく。

(25)に見るように、ル形習慣文、テイル形習慣文はともに頻度を表す副詞との共起が可能であり、その限りにおいては、一見解釈に差がないように思われる。

- (25) a. 日本人は毎日お米を食べる。
b. 日本人は毎日お米を食べている。 ((2)再掲)

しかし、(26)に見るように、頻度副詞が顕在的に存在しない場合には違いが明らかになる。

- (26) a. 日本人はお米を食べる。
b. 日本人はお米を食べている。

ル形は頻度副詞が顕在的に存在しない場合にも習慣的な読みが自然に得られるのに対し、テイル形は頻度副詞がない場合には特定の進行中の出来事について述べ

る解釈が優先的に得られる。このことから、テイル形習慣文における習慣の意味はテイル形をとることそのものから導かれるものではないのに対し、ル形習慣文における習慣の意味は、非状態述語がル形で現れることそれ自体によって導かれるものであると考えられる。本論文では、非状態述語がル形で現れた場合にはアスペクト強制(coercion; de Swart 1998 他)が起こるものとする。

述語のアスペクトに関する先行研究で指摘されているように、状態述語と非状態述語の違いはいくつかのテストによって確かめることができる。単純ル形で現在の意味を指すことができるか否かというテストは、その一つである(金田一 1950; Vendler 1967 他)。(27)の例からは、単純ル形で現在時を指すためには、述語に状態性が必要であることが示される。

- (27) a. 今現在、日本人が部屋にいる。 (状態動詞の単純ル形)
b. *今現在、日本人がお米を食べる。 (非状態動詞の単純ル形)
c. 今現在、日本人がお米を食べている。 (非状態動詞のテイル形)

(27a)に見るように、状態述語のル形は現在時を指すことができるが、(27b)から分かる通り、非状態述語のル形は基本的に未来時を指し、「今現在」との共起は許されない。非状態述語が現在時を指すためには、(26c)のようにテイル形を用いなくてはならないと考えられる。

しかし、Dowty (1979)でも指摘されているように、非状態述語の単純現在形が習慣の意味を表す場合には未来時でない解釈が可能となる。すなわちある種の状態的な解釈を得ることが可能になるということであり、この関係は非状態述語が強制により状態性を得るものとする考えられる。Dobrovie-Sorin (2003)に従えば、ここでの状態化とは、HAB が非状態述語の時空間項を束縛して習慣相述語を返す操作であると捉えられる。このような強制の操作は非状態述語がル形で現れることそれ自体から導かれるのに対し、テイル形では「習慣の意味」は必須ではないため、HAB 演算子の存在は仮定されない。本論文では、テイル形が表すのは「イベントの反復」であり、それが習慣として解釈されるのは、頻度副詞によって一定の周期性を持った繰り返しであることが示されることによると考える¹⁰。

¹⁰ 習慣としての解釈を支える要素としては、頻度副詞の他に文脈による影響も考えられる。

テイル形が表す意味があくまで「反復」であり、「習慣」に限られないのは、(28)のような例との共通性からも分かる。

- (28) a. 太郎はくしゃみをしている。
b. ここ一年で、次々と人が辞めている。

(28a)は、単一相(semelfactive: Smith 1991 他)と呼ばれる、変化性のない瞬間的なイベントを表す動詞の例であるが、このような動詞がテイル形をとった場合、「くしゃみをする」という複数のイベントが繰り返されるといふ、反復相としての解釈になることが知られている。また、(28b)のように「次々と」などの副詞と共起した場合にも、「人が辞める」というイベントが複数回起きたという反復相としての解釈になる。これらは主語に対する「習慣」としては解釈されず、これらの例とテイル形習慣文は、イベントの複数回の生起を表すという点で共通している。また、工藤 (1995)が論じているように、テイル形の「反復」としての意味は、継続相からの派生として捉えることができるものである。

さらに、副詞との共起関係を見ることは、ル形に起こる状態化の性質を明らかにすることにも繋がる。野田 (2011)は、(29)に見るように、「昨日から」「一週間前から」といった期間限定の副詞はル形習慣文とは共起することができないが、テイル形習慣文とは共起可能であることを指摘している¹¹。

- (29) 私は一昨年から毎朝、公園を 走っています/*走ります。(野田 2011: 206)

この事実を上述の議論とのつながりの中で捉え直せば、ル形における強制による状態化は、一時的な状態性ではなく、時間的限界のない恒常的な性質を表すもので

¹¹ 工藤 (1982, 1995)では、ル形習慣文とテイル形習慣文の違いについても述べられており、「短い期間」を表し、よりアクチュアル性の強い例にはテイルが選ばれと指摘されている。このような見方に対し、野田 (2011)は、(i)のような長期的な期間限定の副詞が付いた例において、テイル形が許容され、むしろル形が許容されないことを指摘した。

- (i) a. 太郎は小学校の頃からジョギングを している/*する。
b. 太郎は 30 年前からタバコを 吸っている/*吸う。(野田 2011: 198)

このことから、「期間の短さ」ではなく、「期間が限定されること」そのものがアクチュアル性に関与しており、ル形とテイル形の違いはその点に求められるということが示される。

あるということになる。そのように考えることで、主語からの数量詞遊離に関してル形習慣文が ILP に近いふるまいを見せることも整合した説明が得られる。つまり、ル形習慣文は HAB のはたらきにより、ILP 化することから状態性を得るということである。一方で、強制による状態化が起こらないテイル形習慣文は、一定の周期性を持ったイベントの反復を意味しているために、期間限定が可能になっていると考えられる。また、期間限定が可能になっている以上、イベントを量化する演算子は総称的なものではなく、REPEAT のような単に反復的量化を表すものだと考える必要がある。

5.3.1.3 「恒常条件的関係」を表す連体従属節への生起

本節では、非状態述語のル形に状態化が起こるとする前節の議論を支持する現象として、先行研究において同じような状態化が起こるとされている連体従属節の環境を見る。その上で、「恒常条件的関係」を表す状態化が可能なのはル形のみであり、テイル形はこの環境に生起することができないことを指摘する。

石井・石川 (2010)では、次の(30)(31)のような連体従属節で「動作動詞の状態述語化」が起こることが論じられている。

- (30) a. このレストランに来る人は必ずハンバーグを注文した。
b. 私は毎朝妻が丁寧にいれるコーヒーを飲んだ。 (大島 2008: 102,111)
- (31) 健が勧める論文に指導教授は期待した。 (石井・石川 2010: 121)

(30)(31)のような例は、大島 (2008)が「恒常条件的関係」を表すとしているように、従属節事態が起こる度に主節事態も起こることを表している。(30)の意味解釈は、石井・石川 (2010)において「インフォーマルな定式化」として(32)のように表されている。

- (32) a. 【レストラン訪問】の人は、【ハンバーグ注文】でもあった。
b. 【妻がいれる】のコーヒーは、【話者が飲む】であった。
(石井・石川 2010: 116)

石井・石川 (2010)の主眼は、(30)(31)のような例の従属節時制の解釈が三原

(1992)の「視点の原理¹²⁾」に従っていることを示すことにある。(30)は本来、「視点の原理」の反例として大島 (2008)が挙げたものであるが、大島 (2008)は(30)は従属節事態が主節事態よりも前であると解釈されるため、「視点の原理」に反すると主張している。しかし、石井・石川 (2010)はこのような例に「状態述語化」が起きていると考えることによって、「視点の制約」の反例とはならないことを主張した。ここで述べられている「動作動詞の状態述語化」とは、前節で述べた「アスペクト強制による状態化」と同じものを指していると考えられる。(30)(31)のような従属節に状態述語化が起きているのだとすれば、従属節のル形が表す時制は「現在」であり、主節事態は従属節事態と同時である。そして、このことは「視点の原理」の予測に合致するものである。

本章の観点から興味深いのは、「恒常条件的関係」を表す連体従属節において、テイル形の生起が許されない点である。「恒常条件的関係」を表す連体従属節が習慣文と共通した性質を持つことは、(30b)(31)の連体従属節が(33)(34)のように習慣文としてパラフレーズすることができることから確認できる¹³⁾。

- (33) a. 妻はコーヒーを丁寧にいれる。
 b. 妻はコーヒーを丁寧にいれている。
- (34) a. 健は指導教授に論文を勧める。
 b. 健は指導教授に論文を勧めている。

そして(33)(34)は、パラフレーズとしては、テイル形習慣文もル形習慣文とほぼ同じ意味を表すことが可能であることを示している。しかし、(35)(36)の対立に見るように、「恒常条件的関係」を表す連体従属節にはテイル形は生起することができ

¹²⁾ (i) 視点の原理(tense perspective)(三原 1992: 22)

- a. 主節・従属節時制形式が同一時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は発話時視点によって決定される。
 b. 主節・従属節時制形式が異なる時制形式の組み合わせとなる時、従属節時制形式は主節時視点によって決定される。

¹³⁾ (30a)の例は「このレストランに来る人」という連体修飾節を用いた例であるが、主名詞が「人」である場合、連体修飾節を習慣文にパラフレーズすると主語名詞「人」が総称解釈を受けて意味が大きく変わってしまうため、ここでの議論からは除く。

- (ii) a.#人はこのレストランに来る。
 b.#人はこのレストランに来ている。

ない。

- (35) a. 私は毎朝妻が丁寧に入れるコーヒーを飲んだ。(=(30b))
b.*私は毎朝妻が丁寧に入れているコーヒーを飲んだ。
- (36) a. 健が勧める論文に指導教授は期待した。(=(31))
b.*健が勧めている論文に指導教授は期待した。

上記のような対立が意味しているのは、「恒常条件的関係」を表すための条件となる状態化が、ル形では行われるのに対してテイル形では行われえないということである。これは、「動作動詞の状態述語化」がル形の場合にのみ起こるものであるとする本論文の主張を支持する現象であると言える。「恒常条件的関係」を表すには、ル形の習慣における ILP 化が関与しているが、テイル形は恒常的な性質ではなく、時間軸の中に位置づけられるイベントの反復を表すため、このような環境に生起することができない。

5.3.1.4 「ものだ」補文

ここまで観察してきたル形習慣文とテイル形習慣文の意味解釈の違いは、「ものだ」補文への生起を考えることによってより明確になる。3.2.3.2 節で詳しく論じたように、「ものだ」補文は TP 以上の指定部で主語が GEN による束縛を受けることを要求する環境である。主語が定名詞の場合には、(37)に見るように、ル形習慣文・テイル形習慣文ともに「ものだ」補文へ生起することができない。

- (37) a.*太郎はお米を食べるものだ。
b.*太郎はお米を食べているものだ。

これは、主語の統語的位置に関わらず、主語に束縛すべき変項が存在しないために非文になっていると考えられる。

しかし、主語に裸名詞を用いた場合には、主語の統語的位置によって許容度に差が生じる。ル形習慣文とテイル形習慣文の違いが、主語が解釈される統語的位置の違いだとすれば、ル形習慣文は「ものだ」補文へ生起できるが、テイル形習慣文は生起できないことが予測される。実際、(38)に見るようにその予測は正しい。

- (38) a. 日本人はお米を食べるものだ。
 b. *日本人はお米を食べているものだ。

つまり、ル形習慣文の主語は TP 以上の指定部に引き上げられるものであるため、GEN による束縛を受けることが可能なのである。一方、テイル形習慣文の主語は vP 指定部で存在量化を受けているため、GEN による量化を受けることができない。「ものだ」補文へ生起できる主語の条件は、【表 1】のようにまとめることができ、TP 以上の指定部に生起する裸名詞ということになる。

【表 1】「ものだ」補文へ生起する主語

	定名詞	裸名詞
TP 以上の指定部	*	○
vP 指定部	*	*

(3.2.3.2 節【表 6】再掲)

そして、vP 指定部に主語が存在するテイル形習慣文が「ものだ」補文に生起できない理由は、「ものだ」補文の主語に定名詞が許されないことと一定の並行性をもって捉えることができる。つまり、テイル形習慣文の裸名詞主語も、すでに REPEAT によって量化済みの項となっているために非文となっていると考えられるのである。前節までの議論からすれば、テイル形習慣文の主語の量化はテイルによるイベントの反復的量化によるものであり、イベントの量化に伴ってその参与者である主語も量化されることになるが、直接的な個体の量化は行われぬ。一方で、ル形習慣文は「ものだ」補文への生起が可能であることから、GEN が TP 以上の指定部で主語を量化していることが分かる。

5.3.2 意味解釈と統語構造の写像関係

5.3.1 節では、4 つの統語的環境に現れるル形習慣文とテイル形習慣文の対立を見ることにより、両者が異なる意味解釈プロセスを持っていることを明らかにした。本節で示した両者の違いは、【表 2】のようにまとめることができる。

【表 2】 ル形／テイル形習慣文の意味解釈メカニズムの違い

	ル形習慣文	テイル形習慣文
文法的アスペクト	ϕ	テイ
アスペクト強制 (HAB 演算子)	あり	なし
量化	GEN による個体量化	テイル(REPEAT)による イベントの反復的量化
主語位置	TP 領域以上	vP 内

そして、Diesing (1992)の写像仮説に基づく本論文の枠組みからすれば、個体量化とイベント量化の違いとは、主語の統語的位置の違いと見なすことができる。そして、それはル形習慣文とテイル形習慣文がテンスの総称性において対立するものであることを意味している。

5.3.1.1 節では、ル形習慣文の意味解釈は(39b)、テイル形習慣文の意味解釈は(40b)のように考えられることを述べた。

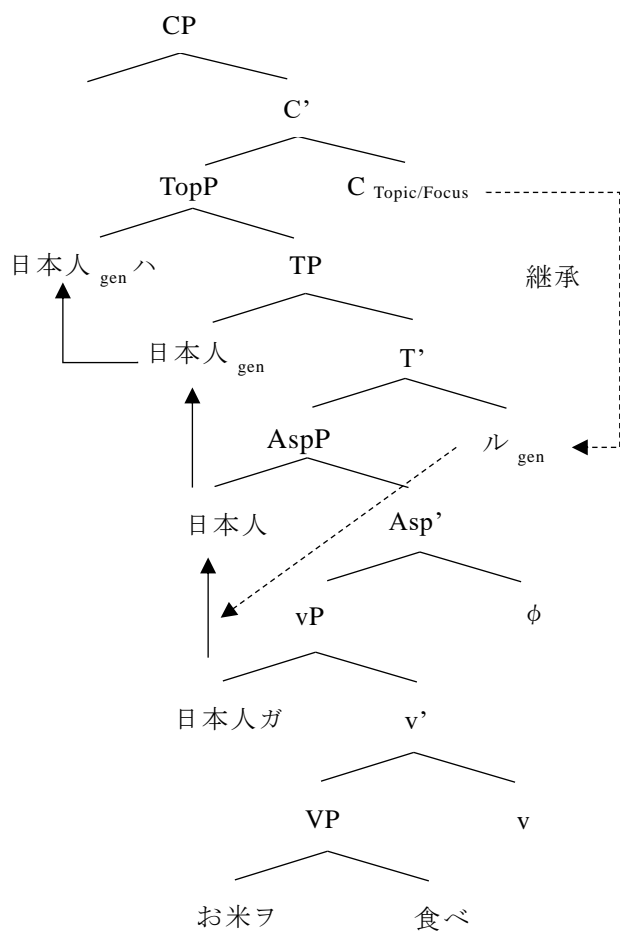
- (39) a. 日本人はお米を食べる。
b. $GEN_x(\text{Japanese}(x))[\text{HAB}_e[\text{eat rice}(x,e)]]$ ((23)再掲)
- (40) a. 日本人はお米を食べている。
b. $REPEAT_e(C(e))[\exists_x(\text{Japanese}(x) \wedge \text{eat rice}(x,e))]$ ((24)再掲)

(39b)では、制限節において GEN が主語の個体変項を量化しており、Diesing の写像仮説に従えば、このような主語の量化は TP 以上の領域で行われることになる。つまり、GEN による個体量化が行われる文の統語構造は、TP 以上の指定部で主語が GEN による束縛を受けるものと見なすことができる。一方、(40b)では、主語は GEN による直接的な量化を受けておらず、テイルがもたらす REPEAT 演算子がイベント変項を束縛している。そして、主語は中核スコープで存在量化を受けた上で、主語を含むイベントが反復的に量化されるのに伴い、間接的な量化を受けることになる。中核スコープに位置する要素は vP 内に写像されることから、イベント量化が行われる文の統語構造は、vP 内で主語が存在閉包を受けるものと見なすことができる。そして、3.2.2 節で示した本論文の枠組みからすれば、両者は主語位置の違いに伴い、テンスにおいても対立が見られることになる。すなわち、TP

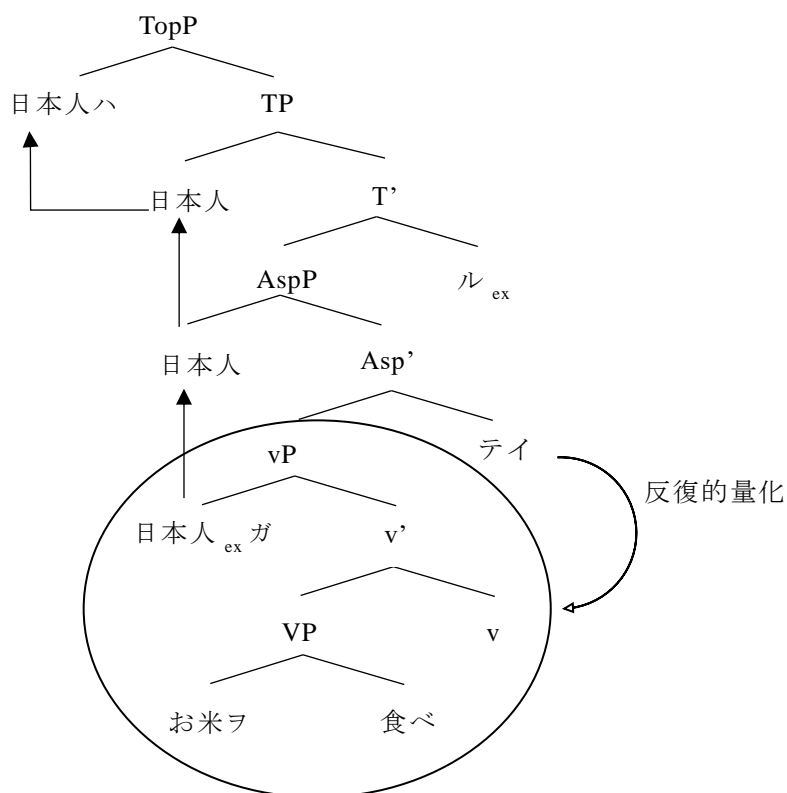
以上の指定部で GEN による個体量化が行われる文は総称的なテンスをとっているが、GEN によるイベント量化が行われる文は存在的なテンスをとっているということになる。

こうした意味解釈と統語構造の写像関係から、ル形習慣文とテイル形習慣文の持つ構造は、それぞれ(41a,b)のように表すことができる。

(41) a. ル形習慣文の構造



b. テイル形習慣文の構造



(41a)に示すように、ル形習慣文は総称テンスのもとに生起し、3.2.2 節で論じたように、総称的なテンスは C から談話的素性の継承を受けることにより、主語を TP 指定部に引き上げる。そのことにより、主語は TP 指定部で直接的に GEN による総称量化を受けることになる。一方、(41b)に示すように、テイル形習慣文の持つ存在テンスのもとでは、主語は vP 指定部で存在解釈を受ける。そして、イベント全体がテイルによって反復的な量化を受けることにより、主語は単なる存在解釈ではなく、間接的にある種の総称的な量化を受けることになる。このため、テイル形習慣文の主語は、ハでマークされることにより TopP の指定部に移動したとしても、直接的な量化を受ける位置はあくまで vP 内部である。存在的なテンスをとりながら、主語がハでマークされているという意味では、テイル形習慣文は(42)のような文と共通性がある。

(42) 太郎は、さっきリンゴを食べた。

これらの存在テンスをとる例においては、主語は談話上の要請で話題化

(Topicalization)を受けることによってトピックとなるが、ILP やル形総称文の主語が TP 以上の指定部に引き上げられるのは、総称的なテンスが C から素性を継承することによる移動である。このような考え方は、益岡 (2004, 2007)で言及されている「文内主題」と「談話・テキスト主題」の違いにも見られる。益岡 (2004, 2007)は、属性叙述文のとり主題が文構造上の要請としての「文内主題」である一方で、事象叙述文のとり主題は談話レベルでの条件によって決まる「談話・コンテキスト主題」であるとしている。

以上、5.3 節では、ル形習慣文とテイル形習慣文の違いが現れる統語的環境を挙げ、個体量化とイベント量化という意味解釈プロセスの違いから、両者のふるまいの違いに説明が与えられることを論じた。そして、意味と統語の写像関係からは、ル形習慣文とテイル形習慣文の意味解釈プロセスの違いがテンスの総称性、およびそれに伴う統語構造の違いとして捉えられることを示した。

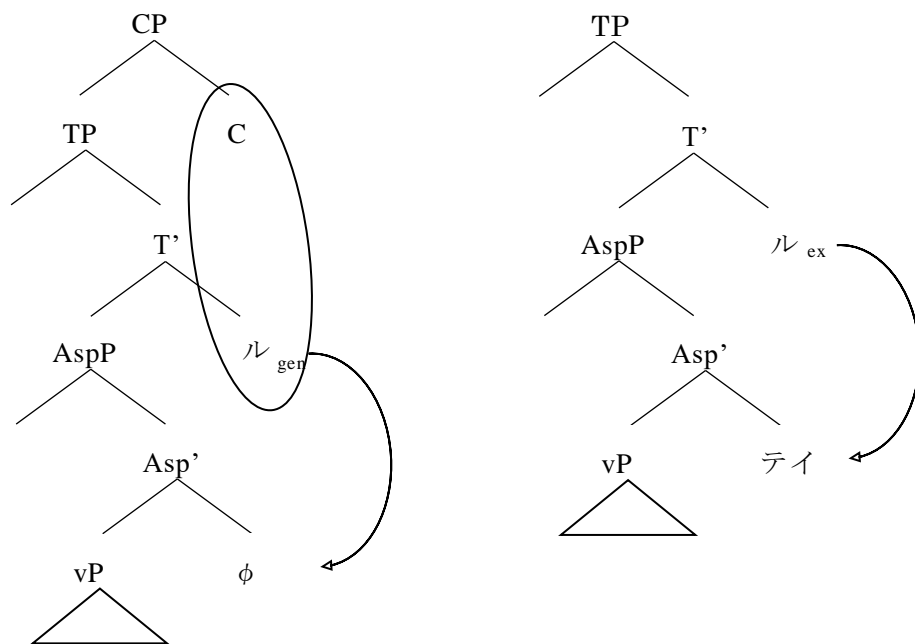
5.4 文法的アスペクトとテンスの総称性

本節では、前節までの議論から明らかになった、文法的なアスペクトとテンスの総称性の相関関係について論じる。

ここまでの習慣文の分析から明らかになったのは、SLP が存在的／総称的なテンスのいずれをとるかは、アスペクト形式としてル形／テイル形のいずれをとるかによって決まるものであるということである。ここでは、5.1.2 節で概観した長谷川 (2014)の分析をもとに、文法的なアスペクトとテンスの相関関係を構造的に表す。長谷川 (2014)で想定されているように、ル／テイルの文法的なアスペクトの対立に関わる機能範疇としては、vP と TP の間に位置する AspP を仮定しておく。

AspP が非状態動詞を選択するものであると考えた時、C から素性の継承を受けると総称的なテンスは、ゼロ形を主要部とした AspP を選択する。これは、5.3 節で非状態動詞がル形で現れることそのものがアスペクト強制を引き起こすと仮定したことを、構造的に示したものである。アスペクト強制により ILP 化した非状態動詞(SLP)は、総称的なテンスをとることとなる。一方、存在的なテンスは、テイル(ル)形を主要部とした AspP を選択する。このことは、構造的には(43)のように表すことができる。

- (43) a. 総称テンスの AspP の選択 b. 存在テンスの AspP の選択



しかし、一見このような一般化に反し、文法的なアスペクト形式としてテイル形をとっていながら、総称的なテンスと結びついているかのように思われる例が存在する。(44)のようなテイル形を用いた文は、特定の「犬の鼻」や「爪」に関する叙述ではなく、量化された意味を表すことが可能である点で、本節で習慣文として扱ってきた例と共通性を持っている。

- (44) a. 犬の鼻は湿っている。
b. 爪は指の先に付いている。

しかし、(44)のような例は、(45)に見るように「ものだ」補文に生起可能である点で、これまでに見てきたテイル形習慣文とは異なるものである。

- (45) a. 犬の鼻は湿っているものだ。
b. 爪は指の先に付いているものだ。

「ものだ」補文に生起可能であることから、(44)のようなテイル形を用いた文では、イベント量化ではなく個体量化が行われていることが示される。以下では、このような一見例外と思われるテイル形習慣文を分析し、これらが「単なる状態」と

してのテイル形であり、構造的には区別できるものであることを主張する。

ここまでの議論では、習慣文に用いられる非状態動詞として、「ジョギングをす
る」などの活動動詞や「食べる」などの達成動詞の例を挙げてきた。これらは、以
下の(46)に見るように、語彙概念構造によって動詞の意味を表した場合、ACT や
CAUSE に当たる概念事象を持つ動詞であると言える(Dowty 1979)。

- (46) a. 状態 : [x BE AT-y]
- b. 活動 : [x ACT ON-y]
- c. 到達 : [BECOME [x BE AT-y]]
- d. 達成 : [x CAUSE [BECOME [x BE AT-y]]]

活動／達成動詞に関しては、これまで見てきたように習慣の文脈においてはル形
とテイル形が一見近似した意味を表す。

しかし、非状態動詞の中でも、(46c)のように変件事象のみを持つ到達動詞に関
しては、総称的な主語をとった場合でも意味を変えないことなくル形と言い換える
ことができない。(47)は先ほど見たテイル形習慣文の例であり、「湿る」「付く」な
ど到達動詞が用いられているが、これは(48)に見るル形の例と同じような意味を表
すことはできない。

- (47) a. 犬の鼻は湿っている。
- b. 爪は指の先に付いている。 ((44)再掲)
- (48) a. *犬の鼻は湿る。
- b. *爪は指の先に付く。

(47)のようなテイル形は、変化の結果状態を表しているように見えるが、「犬の鼻」
は「湿る」という変件事象の結果として「湿っている」のではなく、「爪」は「付
く」という変件事象の結果として「付いている」のではない。(48)に見るル形の変
件事象が存在しないことから分かるように、(47)のテイル形は結果状態ではなく
「単なる状態」、金田一 (1950)の言う第四種動詞的な性質を持っていると言える。
このように到達動詞のテイル形は、総称的な主語をとった場合にはある種の第四
種動詞としてふるまうようになる。

このような到達動詞のテイル形習慣文は、(49)に見るように、「毎日」のような

頻度を表す量化副詞と共起することができない点でも、活動／達成動詞を用いた反復相のテイル形習慣文とは性質が異なる。一方で、(50)に見るように、「たいてい」といった副詞とは共起が可能である。

- (49) a. *犬の鼻は毎日湿っている。
b. *爪は毎日指の先に付いている。
- (50) a. 犬の鼻はたいてい湿っている。
b. 爪はたいてい指の先についている。

「毎日」「三日に一度」といった副詞と「たいてい」「常に」といった副詞の違いは、後者は非選択的束縛(unselective binding)を行う演算子であるということである。Heim (1982)が論じているように、後者の副詞は個体変項とイベント変項のいずれを束縛することも可能である。(51a)における「たいてい」は、述語が ILP であるため個体変項を束縛しているものと考えられるが、(51b)における「たいてい」は、主語が定項であるためイベント変項を束縛していると考えられる。

- (51) a. 学生はたいてい正直者だ。
b. 太郎はたいてい元気だ。

一方、(52)に見るように「毎日」等の副詞は個体を束縛することはできず、イベント変項を束縛してその頻度を指定するはたらきのみを行う。

- (52) a. *学生は毎日正直者だ。
b. 太郎は毎日元気だ。

到達動詞のテイル形習慣文がイベント変項のみを束縛する副詞と共起することができず、非選択的束縛を行う副詞とのみ共起する事実からは、到達動詞のテイル形習慣文では個体の量化が行われることが示唆される。このことは、これまで活動・達成動詞のテイル形習慣文ではイベントの量化が行われると論じてきたこととは対照的である。そして、到達動詞のテイル形習慣文で個体の量化が行われていることは、(45)に見たように「ものだ」文への生起が可能であることから支持され、到達動詞のテイル形習慣文の主語は TP 指定部で GEN による束縛を受けてい

ると考えられる。

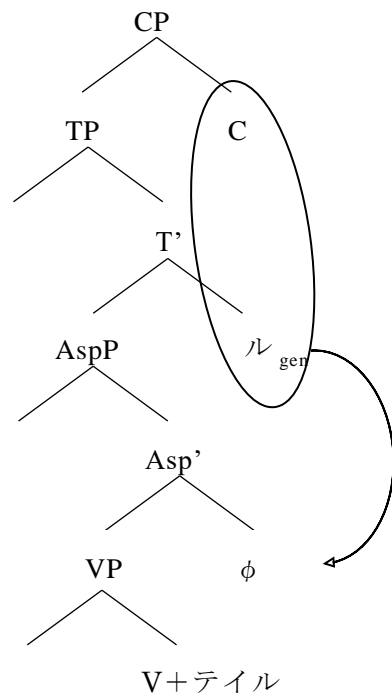
(53) a. 犬の鼻は湿っているものだ。

b. 爪は指の先に付いているものだ。

((45)再掲)

上記のような事実は、テイル形習慣文とル形習慣文の対立を問題にする際には、用いられる動詞のアスペクト的性質に注意を払う必要があることを示している。到達動詞+テイルが総称的な主語をとった場合に個体量化が可能になるのは、このテイル形が AspP の主要部としてイベントを反復的に量化するものではないためである。このような第四種動詞としてのテイル形は、ル形とアスペクト的な対立を持たない点で、文法的なアスペクトとは区別して考える必要がある。変化結果としての状態ではなく、単純状態を表すという意味では、むしろ形容詞に近いはたらきをするものである。第四種動詞のテイル形は、(54)に見るように、文法的なアスペクトとして AspP の主要部に生起するのではなく、語彙的なレベルにおいて動詞と結びつくものであると考えることができる。

(54) 第四種動詞のテイル形習慣文の構造



(54)は、到達動詞を用いた第四種動詞のテイル形習慣文は、AspP の主要部がテイ

(ル)ではなく ϕ であることを示している。そのため、総称的なテンスによって ϕ を主要部とした AspP が選択され、主語が GEN による個体の量化を受けることが可能になる。このように、到達動詞を用いたテイル形習慣文と、活動／達成動詞を用いたテイル形習慣文は、テイルの統語的位置が異なると考えることで、(43)に示したテンスの総称性と AspP の選択関係の一般化を維持することができる。

5.5 本章のまとめと今後の課題

本章では、以下の【表 3】にまとめた現象から、一見同じような意味を表すル形習慣文とテイル形習慣文に意味解釈の相違が見られることを指摘し、その違いが量化のメカニズムの違いから導かれるものであることを論じた。

【表 3】ル形／テイル形習慣文の対立が現れる現象

	ル形習慣文	テイル形習慣文
a. 数量詞遊離	*	○
b. 期間限定の副詞	*	○
c. 「ものだ」補文	○	*
d. 連体従属節	○	*
e. 頻度副詞	習慣の意味に貢献しない	習慣の意味に貢献する

【表 3】(a,c)に見られるル形習慣文とテイル形習慣文の対立は、両者の主語が意味解釈を受ける統語的位置の違いを示すものであり、前者は TP 以上の指定部、後者は vP 指定部で主語が解釈されることを示している。また、【表 3】(b,d,e)の現象は、ル形習慣文にのみアスペクト強制による非状態動詞の状態化(ILP)化が起きていることを示しており、状態化の起こらないテイル形習慣文は、イベントの反復を表すテイルと頻度副詞が組み合わせられることによって習慣の意味を表す。

また、ル形とテイル形になぜそのような違いが生まれるかという問題に関しては、アスペクト強制は AspP の主要部が ϕ である時にのみ起こると考えることで説明を与えた。AspP の主要部がテイルである場合には反復的な量化は与えられるが、 ϕ の場合に可能な状態化は起こらない。そして、存在的なテンスはテイルを主要部とする AspP を、総称的なテンスは ϕ を主要部とする AspP を選択することを論じた。ただし、テイル形習慣文に関しては、用いられる動詞が到達動詞である

場合には、第四種動詞としてより語彙的なレベルにとどまり、AspPの主要部には存在しないため、区別して考える必要がある。上記の議論は、以下の【表4】のようにまとめることができる。

【表4】ル形／テイル形習慣文とテンスの総称性

	テンス	AspP 主要部	主語位置
ル形習慣文	総称	φ	TP 以上の 指定部
テイル形習慣文(到達動詞)			
テイル形習慣文(活動／達成動詞)	存在	テイル	vP 指定部

つまり、5.1.3 節での問題提起に答える形で結論を述べ直すと、本章の議論からは、先行研究で指摘されているような「継続」を表すテイル形のみならず、「反復」を表すテイル形も存在的なテンスと結びついていることが明らかになった。5.1 節で概観したように、アスペクト的な意味は事象叙述／属性叙述という対立と密接な関係を持っていると考えられるが、それらの関係は未だ十分に体系化されているとは言い難い。しかし、本章で論じたル形／テイル形習慣文の対立からは、その一端が明らかになったと言える。動作の継続、変化結果の継続といった単一の出来事内部の時間的展開を問題にするアスペクトだけでなく、複数の出来事の量化に関わるアスペクトがテンスの総称性に関与しているという事実は、従来想定されていたよりも広い範囲のアスペクトの意味が叙述に関与していることを示している。これは、英語の進行形よりも広い意味領域を担うアスペクト形式として、テイル形が存在する日本語の現象を分析することで明らかになったことである。このように、述語のアスペクトとテンスの総称性の関係について、日本語の習慣文の現象からの記述的一般化を提出したことは、両者の体系化を目指す理論的な研究への貢献になり得る。

また、本章での議論は日本語の属性叙述文研究、またアスペクト研究にも貢献するものである。本章で扱ったル形習慣文とテイル形習慣文は、どちらも主語に対する何らかの属性を述べるものである点では共通しており、益岡 (1987) の定義からすれば、いずれも属性叙述文と見なされるものである。しかし、事象叙述／属性叙述の対立に関わる要因を個々の要素に分解し、構成的なアプローチを試みる本論文の枠組みからは、両者がテンスの総称性という観点から区別されることが明ら

かになった。全体論的なアプローチのもとでは一括されていた現象の違いを明らかにし、述語のAspectがその違いにどう貢献しているかを明示的に論じた本章の分析は、叙述類型に対する構成的なアプローチの有効性を示すものである。また、本章の結論は、工藤 (1995) のような日本語のテンス・Aspect体系を網羅的に論じる研究へも貢献し得るものである。工藤 (1995) の時間的限定性に基づくAspect体系の中でも、テイル形が 1 回性のアクチュアルな現象について述べるものであり、ル形が超時的・ポテンシャルな現象について述べるものであることは指摘されている。ル形とテイル形の対立をこのようにテンスとの関係から捉える試みは、本章でのアプローチとも整合するものである。工藤 (1995) の枠組みの中では、習慣文のような例はル/テイルのAspect対立が中和するものとされており、両者の違いは十分に論じられていなかったが、本章の結論からは、Aspect形式とテンスの相関関係の一般化が、習慣という量化された意味においても維持されていることが明らかになった。

本章の議論は上述のような意義を持つ一方で、今後の課題としては以下に述べる点が残されている。本章では、Aspectとテンスの総称性の相関関係について、習慣文の観点からの一般化を提出したが、この一般化が全てのテイル形に当てはまるものであるかを検証することは、今後の発展的な課題として残されている。また、Aspectの問題を考える際には、それと結びつく時間副詞との関係を明らかにすることが非常に重要である。本章では、テイル形が存在的なテンスと結びつくものであることを論じてきたが、共起する時間副詞の性質に着目した時、例外的にふるまう例が存在することが明らかになる。

(55a) は、これまで見てきたテイル形習慣文と同様、頻度を表す量化副詞と共起する例であり、「猫がねずみを追いかける」というイベントが反復的に量化されている文である。

- (55) a. 猫は毎日ねずみを追いかけている。
b. 猫は朝から晩まで寝ている。

一方、(55b) は、「朝から晩まで」という単一出来事内の期間限定の副詞と共起する例であり、テイルは反復ではなく継続としての意味が強いられている。つまり、「朝から晩まで寝た状態にいる」ことが、総称的な猫について当てはまることを述べる文である。(55) の違いは、「ものだ」補文への生起可能性からも明らかになる。

(56)に見るように、テイル形習慣文は「ものだ」補文へ生起することができないが、継続を表すテイル形を用いた文はこれが可能である。

- (56) a. *猫は毎日ねずみを追いかけているものだ。
b. 猫は朝から晩まで寝ているものだ。

また、(57)はいずれも「経験・記録」を表す例であるが、時間副詞との共起関係に着目すると、(57a)は「～に」という時間副詞と共起しているのに対し、(57b)は「～までに」という時間副詞と共起していることが分かる。

- (57) a. 恐竜は白亜紀に絶滅している。 ((11b)再掲)
b. 日本人は中学卒業時までに英語を習っている。

そして、(57a)のような例は時間副詞の表す時間が特定の時間軸上に位置づけられるものであり、種としての「恐竜」に「白亜紀に絶滅した」という属性が帰せられる文であるが、(57b)の時間副詞は個々の「日本人」の内部の時間を問題にするものであり、「中学卒業時までに英語を習った状態にいる」ことが個々の「日本人」に対して当てはまることを述べる文である。

同様に、このような対立も「ものだ」補文への生起可能性から明らかになる。(58)に見るように、(57a)は「ものだ」補文へ生起することが不可能であるが、(57b)はこれが可能である。

- (58) a. *恐竜は白亜紀に絶滅しているものだ。
b. 日本人は中学卒業時までに英語を習っているものだ。

これらの例からは、個体量化を行うテイル形の文、すなわち、総称的なテンスをとったテイル形の文が存在することが示唆されるが、これらはいずれも第四種動詞としてのテイル形とは解釈できないような例である。このような例と、本章で論じた存在的なテンスと結びつくテイル形がどのように異なるものであるかについては、共起する時間副詞の観点から整理を行うことが有効であると考えられる。本章での議論から得られた一般化が、テイル形の表すアスペクト的意味全般に適用可能なものであるかという問題に関しては、今後の発展的な課題としたい。

第 6 章 状態動詞におけるル／テイルの対立：

アスペクト形式に着目した知覚動詞の分析

本章では、第 5 章に引き続きル形とテイル形というアスペクトの対立が文全体の叙述とどのように関わるのかという問題を扱う。第 5 章で習慣文におけるル／テイルの対立においては、非状態動詞のル形は強制(coercion)により ILP 化することを論じた。ここで仮定されている強制の操作は、ル形の形式をとったまま状態性を獲得するためのものである。ル形で現在時を指すことができる状態動詞であれば強制は起こらないはずである。基底の動詞が状態性を持っていた場合には、叙述の意味はどのように構成されるのだろうか。

本章では、述語のアスペクトが文全体の叙述に与える影響を体系化するために、語彙的アスペクトと文法的アスペクトがどのように組み合わせられることで叙述に影響を与えるのかを明らかにする。ここまでの議論においては基本的に非状態動詞につくル／テイルを論じてきたが、上述の問題提起に答えるためには、ル形とテイル形がどちらも状態的な意味を表す動詞を対象とする必要がある。本章での考察対象は、一見同じ意味を表すように思われる以下の(1)のような対立である。

- (1) a.(?)ウナギの皮膚はぬるぬるする。
- b. ウナギの皮膚はぬるぬるしている。

(1)のような例は、(2)に見るようにいずれも「ものだ」補文に生起可能である。このことから、主語が TP 指定部で総称解釈を受け、総称的なテンスをとっていると考えられるが、こうした例におけるル形とテイル形の対立は、叙述としての意味の形成にどのように関わっているのだろうか。

- (2) a.(?)ウナギの皮膚はぬるぬるするものだ。
- b. ウナギの皮膚はぬるぬるしているものだ。

本章では、(1)のような動詞のル形とテイル形に関して、叙述の意味の構成がそれぞれどのように異なるかを論じる。これにより、文法的アスペクトだけでなく基

底の動詞の語彙的アスペクトにも着目して、アスペクトと叙述の関係を体系化することを目的とする。ここでの主張は以下の(3)にまとめることができる。

- (3) a. 知覚を表すオノマトペ動詞のル形は状態動詞であり SLP である一方、
 テイル形は第四種動詞であり ILP である。
- b. 状態動詞のル形が総称テンスをとるメカニズムと非状態動詞のル形が
 総称テンスをとるメカニズムは異なる。具体的には、前者は SLP の ILP
 化が関与しているのに対し、後者には条件節の量化の意味が関与してい
 る。

構成は以下の通りである。6.1 節ではどのような動詞が(1)のような対立を持つのかを明らかにし、関連する先行研究を概観する。その上で、6.2 節において(1)のようなル形とテイル形の対立がどのように異なるものであるのかを論じる。6.3 節では、アスペクトと叙述の関係性を体系化することで、前章から本章にかけて論じてきたアスペクトに関する議論のまとめを行う。

6.1 知覚動詞のアスペクト形式

6.1.1 オノマトペの意味と述語形式

(1)で見た対立は、オノマトペが動詞化した形におけるル形とテイル形の対立となっているが、どのような意味領域においてこの対立が可能であるのかを明らかにしておく必要がある。

オノマトペに関しては従来音韻論の立場から研究されることが多く、文法面の研究は「のろのろ(と)歩く」といった副詞用法の意味記述などが主流である。日本語のオノマトペには副詞的用法のみならず、スル／シテイル／ダを伴って文の述語となる用法も存在するが、述語用法に関する言及は少ないのが現状である。述語用法に言及している研究としては影山 (2006)や Akita (2009)などが挙げられるが、アスペクト形式には焦点が当てられていない。影山 (2006)は、語彙概念構造の観点からオノマトペ動詞を分析しているが、オノマトペにスルが接続した形とシテイルが接続した形が同列に扱われており、それらの間の形式選択に関しては述べられていない。また、Akita (2009)はオノマトペの文法的ふるまいについて、一般化を与えている研究であるが、「動詞・形容詞・名詞といった主節の核」というように、3形式を一括して扱っている。このように、オノマトペがとる述語形式とその

意味について詳細に論じている先行研究は、管見の限り見当たらない。

しかし、オノマトペの述語用法には(4)に見るような対立が見られ、オノマトペの表す意味によってどの述語形式と結びつくことができるかが異なる。

- (4) a. あの事件を思い出すとぞっと する/*している/*だ。
b. 花子の足はほっそり *する/している/*だ。
c. シーツがぐしゃぐしゃ *する/*している/だ。
d. 太郎は駅前をぶらぶら する/している/*だ。
e. この葉っぱはふちがぎざぎざ *する/している/だ。
f. この生地はごわごわ (?)する/している/だ。

本章で焦点を当てるル形とテイル形の対立に関わるのは、(4f)に見るようなル/テイル/ダの 3 形式全てが可能なオノマトペである。(4d)のようなル/テイルのみを選択するタイプのオノマトペには、ル形とテイル形の間に完成相と継続相というアスペクト対立が見られ、非状態動詞としてのふるまいが見られる。しかし、(4f)は、形式的にはスル/シテイル/ダの対立が存在するものの、これらは一見、ほとんど同じ意味を表している。それでは、(4f)のようなタイプのオノマトペはどのように特徴づけられるものなのだろうか。本節では、(4f)のようなル/テイル/ダの 3 形式全てがとれるタイプのオノマトペと、(4e)のようなスル形の可能性を欠いたテイル/ダのみをとるタイプのオノマトペを比較し、(4f)のタイプの特徴を明らかにする。

ル/テイル/ダ形をとるタイプのオノマトペとテイル/ダ形をとるタイプのオノマトペは以下の【表 1】のような例が挙げられる。

【表 1】 テイル／ダ形をとるオノマトペとル／テイル／ダ形をとるオノマトペ

テイル／ダ形	ル／テイル／ダ形
ぎざぎざしている／だ、ぎとぎとして いる／だ、つやつやしている／だ、で こぼこしている／だ、どろどろしてい る／だ、どんよりしている／だ、ぴか ぴかしている／だ、ぴちぴちしている ／だ、ふさふさしている／だ、ほかほ かしている／だ、ぼさぼさしている／ だ、よぼよぼしている／だ	すべすべする／している／だ、べたべ たする／している／だ、さらさらする ／している／だ、つるつるする／して いる／だ、かさかさする／している／ だ、もちもちする／している／だ、ぬ るぬるする／している／だ、しゃきし やきする／している／だ、ぱさぱさす る／している／だ

これらのオノマトペの特徴を比較してみると、シテイル／ダ形をとるオノマトペは視覚で捉える属性を表すのに対し、スル／シテイル／ダ形をとるオノマトペは触覚でとらえる属性を表すものであると一般化できる。属性が視覚と触覚のどちらで捉えるものなのかは分かりづらい面もあるが、光沢に関する属性が視覚で捉えるものである点は疑いがない。「ぎとぎと」「つやつや」「ぴかぴか」といった光沢に関するオノマトペがシテイル／ダ形に含まれ、スル／シテイル／ダ形にはそのようなオノマトペがないことは、シテイル／ダ形の表す属性が視覚で捉えるものであることを端的に表している。

文法に関わる意味記述上、視覚と視覚以外の五感を区別して捉えるべきだとする指摘は先行研究にも見ることができる¹。ここで視覚と触覚を区別しているのは、国広 (1989) や楠見 (1995) において「遠隔感覚」に対する「接触感覚」、「遠感覚」に対する「近感覚」として整理されてきた分類に相当する。本章では、スル／シテイル／ダ形をとるオノマトペを「知覚」を表すオノマトペと呼び、ここでの「知覚」という用語の指す意味範囲は、五感から視覚を除いたものとする。知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形は、一見するとほとんど同じような意味を表すように思われる。しかしながら、本論文の観点からすれば、アスペクト形式の違いによって叙述の意味が構成されるプロセスが異なるはずである。以下ではその違いが

¹ 南 (2006) では、英語の *tough* 構文において、知覚(触覚や味覚等)を表す形容詞は生起可能であるのに対し、色・形・大きさ等の視覚で捉える形容詞は *to* 不定詞をとることができないことが指摘されている。

- (i) a. The baby's skin is soft to touch.
- b. This flower is red (*to look at).

どのようなものであるかを論じる前提として、関連する先行研究を概観する。

6.1.2 味覚・嗅覚・聴覚を表す動詞のアスペクト形式：澤田 (2012)

知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形の対立に関する直接の先行研究は存在しないが、(視覚を除いた)知覚を表す動詞のル形とテイル形の対立を扱っている先行研究として、ここでは澤田 (2012)を概観する。澤田 (2012)において考察対象とされているのは、「味覚・嗅覚・聴覚を表す名詞」+「ガスル／ヲシテイル」の対立であり、例としては(5)のようなものが挙げられる。

- (5) a. この紅茶はさわやかな味 {がする／をしている}。
- b. このワインは金木犀の香り {がする／をしている}。
- c. この楽器はおもしろい音 {がする／をしている}。 (澤田 2012: 207)

澤田 (2012)では触覚は考察対象から外されており²、これらのガスル／ヲシテイルの対立は、本章で対象とする知覚を表すオノマトペ動詞のル／テイルの対立と完全な並行性を見せるわけではない。しかし、知覚を表す動詞と叙述類型の関係を論じる上で重要な示唆を行っているため、本章の議論に関わる部分を概観する。

澤田 (2012)では、ガスル／ヲシテイルの対立が明らかになる言語現象が挙げられている。(6)は、「知覚」のための環境に対する探索が想起される文脈では、ガスルが適格であるのに対し、ヲシテイルが不自然になることを表している。

- (6) a. 日高産の昆布は噛めば噛むほど甘い味 {がする／??をしている}。
- b. この時期に収穫される紅茶は口に含んだ瞬間さわやかな香り {がする／??をしている}。
- c. カリンバという楽器は指ではじくとオルゴールのような音 {がする／??をしている}。 (澤田 2012: 209)

² 澤田 (2012)では触覚に関しても、「この服は柔らかい手触りがする／をしている」のような対立が見られることが指摘されている。しかし、(i)(ii)に見るように連体修飾を必須の成分として伴う必要があるのかという点で、触覚は味覚・嗅覚・聴覚と異なるふるまいを見せることから、澤田 (2012)の考察対象からは外されている。

- (i) a. あ、匂いがする。
- b. *あ、手触りがする。
- (ii) a. この服は匂いがする。
- b. *この服は手触りがする。

このような現象から、澤田 (2012)では、「ガスル」構文は「知覚」の認知過程を言語化することができる構文であると特徴づけられている。一方、「ヲシテイル」構文は「知覚」の認知過程を言語化することはできず、「ガスル」より「属性付与」の過程における認知主体の主体性が強く働く構文であるとされている。

澤田 (2012)の指摘を本論文の観点から捉え直すならば、知覚を表す動詞の「ガスル」構文は場面レベルの「知覚」を表すものであり、SLP であると言える。また、「ヲシテイル」構文は「知覚」の認知過程を言語化することができず、むしろ「属性」を表すものであるという点で、ILP としての性質を持っていると考えられる。以下では、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形の対立に関しても、SLP と ILP という観点から分析を行う。

6.2 知覚を表すオノマトペ動詞と SLP/ILP

本節では、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形はどのような特徴や構造を持ち、どのような観点で対立しているのかを明らかにする。(1)のような対立の類例としては、(7)(8)のようなものが挙げられる。いずれも、知覚を表すオノマトペの動詞形が用いられた属性文であり、ル形とテイル形が一見同じような意味を表している。

- (7) a.(?)梨地織の布はざらざらする。
b. 梨地織の布はざらざらしている。
- (8) a.(?)樹液はべたべたする。
b. 樹液はべたべたしている。

これらの対立の特徴を論じるために、まず 6.2.1 節では知覚を表すオノマトペ動詞のアスペクト的特徴、続く 6.2.2 節では項構造を明らかにし、これらの動詞と SLP/ILP という意味的特徴がどのような関係にあるかを考察する。その上で、6.2.3 節においてル形、テイル形それぞれの属性叙述の意味が形成されるプロセスについて論じる。

6.2.1 知覚を表すオノマトペ動詞のアスペクト

ここでは、知覚を表すオノマトペ動詞におけるル形とテイル形の対立を状態動詞と第四種動詞の対立として捉えられることを論じる。形式的には対応が見られ

る(1)(7)(8)のような例においても、両者が同じような意味を表せるのは、どちらも状態的な意味を表しているため、つまりアスペク的な対立を持たないためである。ル形が状態動詞であると考えた時、状態動詞にテイル形は後続しないため、状態動詞のル形に対応するテイル形は存在しないはずである。対応するル形の存在しないテイル形は第四種動詞(金田一 1950)と呼ばれ、これらはル形が表す非状態的な意味との対応を持たず、語彙的に状態性を持つ述語だとされている。つまり、知覚を表すオノマトペ動詞に見られるル形とテイル形のアスペク的な対立は疑似的なものであり、【表 2】のような関係として捉えられるものだというのである。

【表 2】 知覚を表すオノマトペ動詞のアスペクト

	ル形	テイル形
状態動詞	○	*
非状態動詞	*	○

知覚を表すオノマトペ動詞のル形の状態性は、以下のような現象から確かめることができる。知覚を表すオノマトペ動詞は(9)に見るように、身体感覚を表す一般の動詞と同じく、ル形で現在を表すことができる。これは状態動詞としての特徴である(金田一 1950; Vendler 1967 他)。

- (9) a. ああ、頭が痛む。
 b. ああ、目がかすむ。
 c. 何だかいい匂いがする。
 d. (布を触りながら)あ、ざらざらする。

このような状態動詞としてのル形は発話時の知覚を表すものであり、意味的特徴としては SLP であると言えるが、第四種動詞のテイル形は ILP と見なすことができる。このことは、(10)に見るように「触ると」のような知覚の条件を付け加えた場合に、ル形とテイル形で対立が見られることにより明らかになる。

- (10) a. この床は触るとべたべたする。
 b. ??この床は触るとべたべたしている。

知覚の条件を付け加えた場合にル形が許容されるのに対し、テイル形は許容度が下がる。このことには、Kratzer (1995)で論じられているように、条件節は量化の演算子が SLP の持つイベント変項を束縛することによって成り立つものであることが関係している。

Kratzer (1995)では、(11)に見られるような対立に、SLP/ILP という述語の意味的特徴から説明が与えられている。

- (11) a. *When Mary knows French, she knows it well.
b. When Mary speaks French, she speaks it well. (Kratzer 1995: 129)

(11a,b)は、when 条件節に生起する述語が ILP か SLP かという点で対立するミニマルペアである。(11b)の speak のように SLP であれば when 条件節への生起が可能であるのに対し、(11a)の know のように ILP は when 条件節への生起は不可能である。(11a)が非文となるのは、when 条件節が前件と後件の 2 つの事態間の関係を量化するものであるためである。つまり、when 条件節では前件と後件の述語の持つ時空間項が量化されなくてはならない。このことを形式的に表したのが(12)である。

- (12) a. *Always [knows (Mary, French)][knows-well (Mary, French)]
b. Always_i [speaks (Mary, French, I)][speaks-well (Mary, French, I)]
(Kratzer 1995: 130)

(12b)は、前件および後件の述語が持つ時空間項(=I)を when 条件節の持つ非頭在的な演算子(=Always)が束縛していることを表している。一方、(12a)では、(11a)の述語は ILP であるために時空間項がなく、量化の演算子が束縛すべき変項を供給されずに空量化(vacuous quantification)を起こすことによって非文となることが示されている。

英語の when 条件節が日本語のト条件節と一定の並行性を持つと捉えるならば、(10)に見た知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形の対立も、同様の観点から説明を与えることができる。すなわち、条件節の後件の述語がル形であれば SLP であるため、時空間項を束縛して意味解釈を得ることが可能である一方で、テイル形であれば ILP であるため、空量化により非文になると考えることができる。

ここまで、感覚対象を主題とした例において、ル形の許容度を「やや低い」として、「(?)」により表記してきた。これは、感覚対象が項関係ではなくアバウトネス関係により主題に立っているためであり、文脈に依存して意味解釈がなされることを示している。(13)・(15)のように、「触る」と項関係を持つことで文脈なしにも解釈できるようになり、相対的に許容度が上がる。

- (13) a. (?)ウナギの皮膚はぬるぬるする。
b. ウナギの皮膚は触るとぬるぬるする。
- (14) a. (?)梨地織の布はざらざらする。
b. 梨地織の布は触るとざらざらする。
- (15) a. (?)樹液はべたべたする。
b. 樹液は触るとべたべたする。

また、次の(16)のような時を主題にした場合の許容度の差からも、ル形が SLP、テイル形が ILP であることが明らかになる。

- (16) a. 梅雨時期は髪がべたべたする。
b. *梅雨時期は髪がべたべたしている。

(16)の対立は、SLP であるル形は抽象的な時空間項を持つため、時を主題にすることが可能であるが、ILP であるテイル形にはそれが許されないことを示している。

6.2.2 知覚を表すオノマトペ動詞の項構造

次に、知覚を表すオノマトペ動詞の項構造を明らかにする。前節では、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形がアスペクト的な対立を持っていないことを述べたが、これらが項構造としても異なるものであることを以下で見ていく。

知覚を表すオノマトペのテイル形が ILP であることを前節で述べたが、テイル形は知覚対象を属性主として、その知覚内容を属性として述べる一項述語である。テイル形の表す知覚の意味は特定の時空間に位置づけられるものではないため、知覚主体は意味上必要とされない。つまり経験者を項としてとることはない。

これに対し、SLP であるル形は特定の時空間の中での知覚を表す意味を持った

め、知覚主体が意味上必要であり、経験者を項としてとると考えられる。経験者は(17)に見るように、直接顕在的な項として具現することは許されないが、意味役割上は必要である。

(17) *私はウナギがぬるぬるする。

これは、(18)に見るような例が経験者を顕在的に表しにくいことと並行的な現象である。

(18) a. *私は頭が痛む。

b. *私は目がかすむ。

c. #私はいい匂いがする。

知覚や身体感覚をル形で表出する際には経験者は話者に限られるが、そのために明示することがむしろ有標な表現となり、(17)(18)のような文が非文となると考えられる。

これらのル形に意味役割上は経験者を立てておく必要があることは、(18a,b)に見るように身体部位が現れる例の意味解釈を考える上で明らかになる。身体部位は西山(2003)の言う非飽和名詞であり、常にその所有者を定めなければ意味が充足しない。顕在的に現れていないとしても、身体部位の所有者(=ここでの経験者)は意味上必要とされていると言える。(19)に見るように、知覚を表すオノマトペ動詞のル形も身体部位をとる例が適格であり、属性文を形成することが可能である。

(19) a.(?)樹液は手がべたべたする。

b. *樹液は手がべたべたしている。

一方で、(19b)に見るようにテイル形が身体部位をとる例は許容されない。このことから、テイル形は属性主のみをとる一項述語であることが示される。

上記の観察から、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形がそれぞれ属性文を形成した際にも、項構造としては以下の(20)のような構造を持っていると考える必要がある。

- (20) a. ウナギの皮膚_iは ([ϕ 動作主 t_i 触る]と)[ϕ 経験者 ぬるぬるする]。
 b. ウナギの皮膚_{属性主}は ぬるぬるしている_{属性}。

ル形が用いられた(20a)では、「ウナギの皮膚」を触った動作主が、「ぬるぬる」という知覚を経験するという関係性を表している。それに対し、テイル形が用いられた(20b)では、「ウナギの皮膚」を属性主とし、その属性の内容が「ぬるぬる」というものであることが表されている。

6.2.3 知覚を表すオノマトペ動詞とテンス

本節では、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形の違いが文全体のテンスとどのように関係しているのかを論じる。ここまで、テイル形が ILP であることを論じてきたが、3.2.2 節で論じたように、ILP は総称的なテンスのもとに生起し、談話に関わる素性を C からテンスが継承することによって、主語は TP 指定部の位置に引き上げられる。知覚を表すオノマトペ動詞のテイル形も、(21)に見るように「ものだ」補文に生起可能であり、主語が TP 指定部で総称解釈を受けていると考えられる。

- (21) a. ウナギの皮膚はぬるぬるしているものだ。
 b. 梨地織の布はざらざらしているものだ。
 c. 樹液はべたべたしているものだ。

一方、SLP であるル形はどのように総称テンスをとると考えることができるだろうか。ル形が状態動詞だとすれば、アスペクト強制による SLP の ILP 化は起こらないはずである。ここでは、SLP が属性文を形成する際のプロセスとして、ILP 化して総称テンスをとる以外に、もう一つのプロセスがあることを見ていく。

前節の(20a)において示したように、ル形は 2 つの事態間の関係性を表していると言え、主題に立っている知覚対象は、条件節において知覚の条件を表す際の目的語として現れるものである。つまり、(22a)のような構造が主題化したものが(22b)である。

- (22) a. ウナギの皮膚を触るとぬるぬるする。
 b. ウナギの皮膚は触るとぬるぬるする。

(22a)は「ウナギの皮膚を触る」ことと「ぬるぬる」という知覚を感じる」ことの2つの事態間の関係が恒常的に成り立つことを表しており、総称的なテンスをとっていると見なすことのできるものである。しかし、(22a)は何かを主題に立てて述べることは行っていない。つまり、ここでの総称テンスとは、ILPが義務的に結びつく総称テンスとは異なるものである。3.2.2節で論じたように、ILPが総称的なテンスをとる際には、主語が必ずTP以上の指定部に引き上げられる、すなわち、義務的に属性主を要求することになる。しかし、(22a)に見られる総称テンスは、属性主を義務的に要求していないため、ILPとは異なるメカニズムにより総称テンスが与えられていると考える必要がある。ここでの総称テンスは、2つの事態間の関係を結びつけることによって生起するものであり、このような主題を必要としない総称テンスは、(23)のような例にも見られる。

- (23) a. 風が吹くと桶屋がもうかる。
- b. ボタンを押すと電気がつく。

(22b)では、「ウナギの皮膚」が主題化を受けているが、基底の構造として(22a)を考慮することができるため、主語が義務的にTP以上の指定部に引き上げられているわけではない点で、ILPであるテイル形が総称テンスと結びつき、属性主を要求することとは区別される。

5.3.2節では、ル形習慣文の意味解釈プロセスとして、語彙的にSLPであったものがILP化するプロセス(非状態動詞の状態動詞化)が生じ、主語が義務的にTP指定部に引き上げられることを論じた。これに対し、知覚を表すオノマトペ動詞のル形を用いた文の意味解釈プロセスは、語彙的にSLPである述語がILP化することはない。これは、知覚を表すオノマトペ動詞のル形が存在テンスを伴う場合、現在時を指すことができる状態性を持つためである。このことにより、習慣文のように非状態動詞が状態性を得るための強制というプロセスが存在しないことになる。Kratzer (1995)のwhen条件節の議論に基づけば、(22a)のような例では条件節の持つ量化の演算子が2つの述語の時空間項を束縛しているものと分析され、時空間項の総称的な量化によりテンスが総称的になっていると考えられる。これは述語の制約によるものではなく、条件節の意味による量化である。これらの違いは以下の【表3】のようにまとめることができる。

【表 3】 述語の状態性と属性文の形成の相関関係

	アスペクト	総称テンスの付与
ル形習慣文	非状態動詞(SLP)	強制により ILP 化することによって総称テンスをとる
知覚を表すオノマトペ動詞のル形	状態動詞(SLP)	条件節の意味により量化されることで総称テンスをとる

6.3 本章のまとめ：述語のアスペクトと SLP/ILP

本節では、本章の議論のまとめとして、述語のアスペクトが SLP/ILP という意味的分類とどのような関係にあるのかを体系化して示す。本章の議論により明らかになったのは、述語のアスペクトが叙述に与える影響を論じるためには、文法的アスペクトだけでなく、基底の動詞の語彙的アスペクトを問題にする必要があるということである。

習慣文の議論では、非状態動詞につくるル形が ILP 化する一方、テイル形は SLP のままであることを論じた。一方、知覚を表すオノマトペ動詞を用いた文では、ル形であっても基底の動詞が状態動詞の場合には強制は起こらず SLP のままであり、第四種動詞としてのテイル形は ILP であることが明らかになった。これらのアスペクト形式における 2 つの対立の関係性は、文法的アスペクトのみを見ていると矛盾したことが起きているように感じられるが、語彙的アスペクトまで考慮に入れることによって、体系化することができる。文法的アスペクトと語彙的アスペクトの組み合わせと SLP/ILP という分類間の関係性は、以下の【表 4】のように示すことができる。

【表 4】 文法的／語彙的アスペクトと SLP/ILP 分類の相関関係

	非状態動詞	状態動詞
ル	ILP	SLP
テイル	SLP	ILP(第四種動詞)

これまで、語彙的アスペクトと文法的アスペクトの相関は、テイル形の動作継続／結果継続解釈と動作動詞／変化動詞との関係性など、事象叙述の領域でのみ論じられてきた。しかし、本論文の議論により明らかになったのは、属性叙述の領域においても同様に、語彙的アスペクトと文法的アスペクトの相関関係を論じる必要

があるということである。本章では、この相関関係に対し、【表 4】のような記述的な一般化を提出した。このような試みは、本論文の叙述の意味に対する構成的なアプローチにより可能になったものだと言える。

今後の課題は、本章で見られた現象がオノマトペ動詞だけでなく、一般の語彙に関しても見られるかを検証し、考察範囲を広げていくことである。特に、6.1.2 節で言及した澤田 (2012)による「味覚・嗅覚・聴覚を表す名詞」＋「ガスル／ヲシテイル」の分析に関しては、本章での議論とも整合性が見られる。しかし、澤田 (2012)が論じている現象と知覚を表すオノマトペ動詞は、格が関与しているか否かという点でも違いがあり、本章と同様の議論が成り立つものであるかどうかは、今後の課題としたい。

第7章 結論

本論文を締めくくるにあたり、終章となる本章では、まず7.1節において本論文全体の意義について述べた後、7.2節において各章の議論のまとめを行う。そして、最後の7.3節において、記述・理論の両面から今後さらに取り組む必要のある課題を列挙する。

7.1 本論文全体の意義

言語には普遍的に、「特定の時空間に存在する出来事を叙述するタイプ」の文と「特定の時空間によらない恒常的な属性を叙述するタイプ」の文が存在する。日本語の記述的な文法研究においては、益岡(1987)に代表されるように、前者は事象叙述文、後者は属性叙述文と呼ばれ、この区別が様々な文法現象の分析にとって重要であることが指摘されてきた。また、英語等の言語を中心とした理論的な総称文研究においては、この問題は主に不定名詞句の意味解釈の観点から扱われることが多く、その意味解釈がどのように導かれるものであるのかが論じられる中で、主語名詞句の解釈と述語の意味的性質の相関関係に関心が向けられてきた(Milsark 1974/1979; Carlson 1977/1980; Kratzer 1989/1995; Diesing 1992 他)。これら2つの研究は共通した問題を扱っており、また類似した概念が提示されていながらも、議論の発端となる現象や重視している観点が異なるためか、研究成果を相互に参照し体系的・有機的に結びつける試みは、これまでのところ十分になされてこなかった。しかし、それぞれの研究に足りない観点は、両者を結びつけることによって補われるものであり、これら2つの研究の知見を有機的に統合することは、互いの研究に大きな貢献を果たし得る。

本論文では、これまでの日本語の記述的な文法研究において、個々の要素が総体となって叙述が決定されるとする、全体論的(holistic)な分析が重視されてきたことを指摘し、属性叙述文を構造的に分析するためには、個々の要素から構成的(compositional)に意味の派生を導く観点が必要であることを主張した。そして、そうした構成的な観点は、理論的な研究の知見を取り入れることで補われるものであることを指摘した。総称文研究においては、叙述の問題が述語と主語名詞句の解釈の相関関係という要素に分解して論じられており、叙述類型が関わる現象に構成的にアプローチすることで、意味と統語構造の写像関係を論じることが可能

になる。一方、そうした理論的・構成的なアプローチにも足りない観点が存在しており、情報構造や述語の аспек트가叙述にどのように関わっているか、また不定名詞句のみならず定名詞句も扱える包括的な視点はどこにあるのかといった問題は、十分に議論されていない。本論文では、日本語の記述的な研究の蓄積を援用し、形式的に存在する日本語の助詞(ガ/ハ)と、広範な意味領域を担うアスペクト形式(テイル)に着目することで、これらの問題が解決できることを示した。つまり、本論文では、2つの研究を結びつけることで、互いに足りない観点を補い、より発展的に日本語の事象叙述／属性叙述の対立を論じることが可能になることを主張した。

本論文は、記述的・理論的な研究の双方に貢献することを目指すものであるため、(1)のような2つの観点から、各章の意義をまとめることができる。

- (1) a. 日本語の属性叙述文を有意義な要因に分解して論じることで、事象叙述文との対比の中で構造的に分析できることを示した。
- b. 助詞、およびアスペクト形式に着目して日本語の現象を論じることが、理論的な研究にとっても貢献となることを示した。

次節では、この2つの観点から各章の結論をまとめ、それぞれの議論が記述と理論の両面においてどのような貢献を成すものであるのかを述べる。

7.2 各章のまとめ

7.2.1 第1章および第2章

第1章では、前節で述べたような本論文の目的やアプローチ方法について述べた。続く第2章では、先行研究の概観として、事象叙述／属性叙述の対立に関わる要因として(2)のような5つの要素が挙げられることを見た。

- (2) a. 述語の意味的性質(SLP/ILP)
- b. 裸名詞句の解釈(存在／総称解釈)
- c. 統語構造(主語の統語的位置)
- d. 情報構造(トピック／フォーカス)
- e. テンス(存在／総称テンス)

(2a-c)は、Kratzer(1989/1995)、Diesing (1992)らのアプローチによって体系化されている。ここでは、述語の意味的性質に従って主語の統語的位置が異なり、それに伴って解釈の可能性が異なるという、意味と統語の写像関係が想定されている。しかし、Kratzer、Diesing のアプローチでは、(2d,e)の要因との関係は十分に検討されていないことを指摘した。

7.2.2 第3章

第3章では、先行研究の概観から提起された問題に答えるため、主語名詞句をマークする助詞の対立(ガ/ハ)が存在する日本語を対象として分析を行った。そして、そのことにより、Kratzer、Diesing の枠組みの中に、情報構造とテンスの観点を統合し、より包括的な枠組みを提示することが可能になることを示した。具体的には、文が存在的なテンスをとるか、総称的なテンスをとるかという観点を中核とし、日本語の助詞に着目することで、情報構造と他の要因との関係を統語構造に基づいて体系できることを論じた。第3章で提示した5つの要因の相関関係は、【表1-1】【表1-2】のようにまとめられる。

【表1-1】5つの要因の相関関係(SLP)

	テンス	裸名詞主語の解釈	主語の統語的位置	助詞
SLP	存在テンス	存在解釈	VP 指定部	中立叙述のガ
	総称テンス	総称解釈	FocP 指定部	総記のガ
			TopP 指定部	ハ

【表1-2】5つの要因の相関関係(ILP)

	テンス	裸名詞主語の解釈	主語の統語的位置	助詞
ILP	総称テンス	総称解釈	FocP 指定部	総記のガ
			TopP 指定部	ハ

そして、【表1-1】【表1-2】に示した裸名詞主語の存在/総称解釈と存在/総称テンスの相関関係に着目することで、日本語にはテンスの総称性を判断することのできる統語的環境が存在することを指摘した。存在テンスを判断する環境としては、主語からの数量詞遊離、総称テンスを判断する環境としては、「ものだ」補文の主語の環境が挙げられる。

第 3 章での結論を記述的・理論的研究への貢献という観点からまとめ直すと、まず日本語の属性叙述研究への貢献としては、日本語の助詞に関する先行研究の知見を、叙述類型の議論の中に有機的に位置づけることが可能になったことだと言える。益岡 (2000)では総記のガを用いた文は「指定叙述」という別の叙述類型が与えられているため、総記／中立叙述のガの対立は必ずしも事象叙述／属性叙述の対立の中で論じられてきたものではなかった。しかし、本論文の枠組みでは、主語の統語的位置と解釈の写像関係という観点から、裸名詞主語の解釈の問題と統一的に捉えられることになる。また、数量詞遊離と「ものだ」補文という具体的な現象を挙げ、叙述類型の対立を構成的に扱う利点を示したことも、記述的な貢献と見なすことができる。益岡 (1987)の定義する属性叙述文には、存在テンスをとるものと総称テンスをとるものが存在しているということが、「ものだ」補文の環境から明らかになった。また、理論的な総称文研究への貢献としては、第 3 章の結論により、Kratzer、Diesing のアプローチをさらに発展させることが可能になったことが挙げられる。日本語の助詞に着目することで、情報構造の観点を取り入れた包括的な枠組みを提示することが可能になり、またテンスを中核とした枠組みを定式化することで、裸名詞のみならず定名詞を主語とした例を統一的に扱う事が可能になった。

7.2.3 第 4 章

第 4 章では、主語名詞句をマークする助詞に着目した第 3 章での分析に対し、目的語名詞句をマークする助詞に着目することで、事象叙述／属性叙述の対立に構成的にアプローチする本論文の分析の利点を示した。事象叙述／属性叙述という全体論的な捉え方からは、主語と述語の関係のみがその対立に関わっているように思われるが、この問題を名詞句の解釈と述語の意味的性質という観点から分解して考えることにより、目的語も議論の対象とすることができることが明らかになった。第 4 章では、(3 a,b)に見る主格目的語と対格目的語の対立、(3a,c)に見る評価系／所有系の述語の主格目的語の対立という、2 つの対立に焦点を当てた。

- (3) a. 太郎は子供が嫌いだ。
- b. 太郎は子供を嫌っている。
- c. 太郎は子供がいる。

この2つの対立に対し、第4章では主語の2つの統語的位置と並行的に、目的語に関してもvP内/外という2つの統語的位置が存在すると考えることで説明を与えた。そして、目的語の統語的位置の違いにも、主語と同様に、述語のSLP/ILPという述語の意味的性質が関与していることを明らかにした。

第4章での議論からの属性叙述文研究に対する記述的な貢献としては、前述の通り、構成的なアプローチをとることで、主語だけでなく目的語に関しても、事象叙述/属性叙述の対立の中で論じることを可能にしたことである。また、主格目的語をとる単純系述語に2種類が存在することを指摘したことも、記述的な貢献と見なすことができる。理論的な研究への貢献としては、状態述語のとり目的語が主格でマークされる日本語の現象に着目することで、状態述語と非状態述語のとり目的語を、構造的な位置の対立から捉えることが可能になったことが挙げられる。そして、主語位置と並行的に、目的語位置に関しても2つの統語的位置が存在することを明らかにした点で、Diesing (1992)の写像仮説をより発展的に支持することが可能になったと言える。

7.2.4 第5章

第5章では、述語のAspectと叙述としての意味がどのように関わるものであるのかという問題設定に従い、日本語の習慣文におけるル形とテイル形の対立を扱った。Aspectと叙述類型は、先行研究でも密接な関係を持つことが指摘されているが、体系化としてはまだ十分でないのが現状である。第5章で具体的に論じたのは、(4)のような対立の意味解釈メカニズム、および統語構造の違いである。

- (4) a. 日本人は毎日お米を食べる。
- b. 日本人は毎日お米を食べている。

(4)は、一見どちらも同じような意味を表しているように思われるが、第5章では、主語からの数量詞遊離、副詞との共起関係、「ものだ」補文への生起、連体従属節への生起という、4つの統語的環境を観察することによって、(4)の対立を明らかにした。ル形習慣文は総称的なテンスをとる文であり、意味解釈としてはGENによる個体の量化を受ける文である。これに対し、テイル形習慣文は、存在的なテンスをとる文であり、テイルの持つ「反復」を表す意味により、イベント全体が量化

を受ける文である。第 5 章では、この関係を非状態動詞(SLP)がアスペクト強制(coercion)により ILP になるか否かという観点で捉え、アスペクト強制は構造的には AspP の主要部が ϕ (つまりル形)の場合にのみ起こることを論じた。そして、文法的なアスペクトとテンスの総称性には、選択関係が存在することを明らかにした。

第 5 章での結論を記述的・理論的研究への貢献という観点から述べ直すならば、記述的な貢献は、これまで「属性叙述文」と一括されてきたものの中に、総称的なテンスを持つものと存在的なテンスをとるものが存在することを明らかにしたことである。ル形習慣文とテイル形習慣文は、益岡 (1987)の定義からすれば、いずれも属性叙述文と見なされるものであるが、事象叙述／属性叙述の対立に対して構成的なアプローチを試みることによって、両者をテンスの総称性という観点から区別することが可能になった。また、理論的な貢献は、Kratzer、Diesing の枠組みでは十分に明らかにされていなかった SLP/ILP とアスペクトとの関係に対し、文法的なアスペクトとテンスの総称性の選択関係として、記述的な一般化を提出したことである。単一の出来事内部の時間的展開を問題にするアスペクトだけでなく、複数の出来事の量化に関わるアスペクトがテンスの総称性に参与しているという事実を明らかにすることができたのは、英語の進行形よりも広い意味領域を担うアスペクト形式として、テイル形が存在する日本語を分析対象とした利点と言える。

7.2.5 第 6 章

第 6 章では、非状態動詞におけるル形とテイル形の対立として扱った第 5 章の習慣文の議論と対照的に、知覚動詞というある種の状態性を持つ動詞において、ル／テイルのアスペクト形式の対立が文全体の意味派生とどのように関わっているかを論じた。具体的な現象としては、(5)のような例を取り上げた。

- (5) a.(?)ウナギの皮膚はぬるぬるする。
b. ウナギの皮膚はぬるぬるしている。

第 6 章では、知覚を表すオノマトペ動詞のル形とテイル形は、いずれも状態的な意味を表し、一見同じ意味を表すように思われるが、知覚の条件節の付加、時主題、身体部位の付加といった現象を観察することにより、ル形は SLP、テイル形は ILP

であり、異なるプロセスで属性文を形成していることを論じた。また、非状態動詞のル形が強制により SLP の ILP 化を起こすのに対し、状態動詞であるオノマトペ動詞のル形は強制を起こさず、SLP のまま条件節の量化により属性文となることを論じた。上述の議論により、述語のアスペクトが叙述の意味に与える影響を体系化する際には、述語の語彙的アスペクトと文法的アスペクトの相関関係を考える必要があることを明らかにした。

第 6 章の議論の記述的な貢献は、これまで「属性叙述文」と一括されてきたものの中に、SLP をもとに形成されるものと ILP をもとに形成されるものが存在することを明らかにしたことである。知覚を表すオノマトペのル形を用いた文とテイル形を用いた文は共にある種の属性解釈を受ける文であるが、叙述の形成に構成的にアプローチすることにより、両者を SLP/ILP の対立という観点から区別することが可能になった。また、理論的な貢献としては、SLP/ILP とアスペクトの関係に関して、状態述語の観点からの記述的一般化を提出することができたことである。第 6 章で論じたアスペクトと叙述類型との関わりからは、第 5 章で論じたものとは異なる一般化を提出したが、これには語彙的な状態／非状態性が関与していることを指摘した。また、第 6 章で論じた知覚を表すオノマトペのル形／テイル形の対立は、SLP としての意味を持つものがどのように ILP として成立するかを捉える際に、理論的にも非常に興味深い現象であると言える。

ここまで述べてきたように、本論文では日本語の事象叙述／属性叙述という対立に関わる現象に対し、構成的なアプローチを試みることで、記述的・理論的双方に貢献するものであることを主張した。本論文の試みは、「叙述」という文全体の意味に関わる現象を扱うものであるため、非常に広範な現象が分析の対象となる。そのため、本論文では扱いきれなかった現象も存在するが、それについては次節において発展的な課題として挙げることにする。

7.3 今後の課題

ここでも、記述面・理論面の双方から課題を挙げておきたい。

まず、記述的な研究課題としては、本論文では扱いきれなかった①時間副詞、②アスペクトの観点がそれぞれ存在する。まず副詞に関して言うと、本論文は事象叙述／属性叙述の対立に関わる要因として 5 つの要素を挙げたが、その中で扱うことのできなかつたものである。そのことには、副詞が付加的な要素であることも関

係しているが、事象叙述／属性叙述の対立に副詞が影響を与えていることは、(6)に見るように、益岡 (1987)の指摘する内在的／非内在的属性叙述の対立に時間副詞が関与していることから明らかである。

- (6) a. 花子はわがままで。 (内在的属性叙述)
b. 花子はパーティーの間中、ずっとわがままだった。
(非内在的属性叙述)
(益岡 1987: 21)

本論文でも、時空間項の修飾の可否として時間副詞の修飾のテストを用いているほか、習慣文の分析にも副詞は大きな役割を果たしている。しかし、本論文の限りでは副詞に体系的にアプローチすることができず、部分的な扱いにとどまっている。今後の発展的な可能性としては、時間副詞を体系的に整理した上で、本論文で示した枠組みの中にどのように統合できるものであるかを探る方向性が考えられる。習慣文の議論の中では、「毎日」のようなイベントを選択的に量化する頻度副詞と、「たいてい」のような個体とイベントを非選択的に量化する量化副詞の違いについても言及したが、こうした事象叙述／属性叙述の対立に関わる観点から副詞を整理することは、日本語の文法研究に記述的な貢献を果たすものであると考えられる。

次に、アスペクトの観点からの課題を述べる。アスペクト形式のテイル形に関しては、第5章および第6章で習慣文、および第四種動詞としてのテイル形を扱ったが、日本語のテイル形には「経験・記録」、または「パーフェクト」(工藤 1995)などと呼ばれる(7)のような例も存在する。

- (7) 太郎は富士山に3回登っている。

このような例に関しては、3.2.3.2節の「ものだ」文の議論や、5.1.3節の叙述類型とアスペクトの関係を論じる箇所でも部分的に触れたが、「経験・記録」のテイル形に関して、テンスの総称性とどのような関係を持っているかは、さらに考察を加える必要がある。本論文の限りでは、アスペクトと叙述類型の関係を論じる際に、主にル形とテイル形の対立に焦点を当て、単純現在形における存在／総称テンスの対立を議論の対象としてきた。しかし、(7)のようなテイル形は、タ形と言い換え

られるものであり、アスペクトと存在／総称テンスという問題をより包括的に論じるのであれば、単純過去形も含めた体系を提示する必要がある。そのような意味合いも含めて、タ形、および「経験・記録」のテイル形に議論を発展させていくことは、本論文の発展的な課題と言える。

最後に、理論的な課題について述べる。本論文で論じた日本語の現象は、理論的な課題につながるものである。第4章で明らかになった ILP と SLP の複合的な構造を持つ所有系述語の存在からは、意味論的に論じられるイベント性と統語構造との写像関係を精緻化していく課題の方向性が考えられる。具体的には、時空間項とされる SLP のみが持つ非頭在的な項が、統語上どの位置に生起するものであるのか、といった、Diesing (1992) の写像仮説の範囲では論じられていない問題が存在する。また、習慣文の議論で明らかになった AspP が関わるアスペクト強制の操作と HAB 演算子の対応など、統語論の分析と意味論の分析を統合させて分析する観点がこれまでも増して認識されたと言える。こうした意味解釈と統語構造を写像関係で捉えるアプローチに対し、本論文では Diesing (1992) の枠組みを現行の理論に沿う形で捉え直す可能性の一つを 3.2.2 節で提示したが、TP 領域と CP 領域の関わりについては、先行研究とのつながりも含め、詳細に論じることができなかった部分である。統語論的・意味論的双方の研究の知見をさらに取り入れ、理論の形式化を図ることは、今後の重要な課題としたい。

参考文献

- 阿部泰明 (1992)「日本語における非 θ 主語と属性の解釈について」研究報告書『言語理論と日本語教育の相互活性化』 pp.171-183.
- 石井創・石川潔 (2010)「状態述語化と従属節時制の解釈」『日本語文法』 10(2), pp.109-125, くろしお出版.
- 岩男考哲 (2008)「「って」提題文の表す属性と使用の広がり」益岡隆志(編)『叙述類型論』 pp.45-66, くろしお出版.
- 大木充 (1987)「日本語の遊離数量詞の談話機能について」『視聴覚外国語教育研究』 10, pp.37-67.
- 大島資生 (2008)「連体修飾節と主節の時間的關係について」『日本語文法』 8(1), pp.101-117.
- 奥田靖雄 (1977)「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『国語国文』 8, 宮城教育大学. [奥田靖雄 (1985)『ことばの研究・序説』 pp.85-104, むぎ書房.に再録]
- 奥津敬一郎 (1996)「連体即連用? (10)(12)」『日本語学』 15(1-2), pp.112-119, 95-105.
- 影山太郎 (2004)「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』 4(1), pp.22-37.
- 影山太郎 (2006)「擬態語動詞の統語構造」『人文論究』 56(1), pp.83-101, 関西学院大学.
- 影山太郎 (2009)「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』 136, pp.1-34.
- 影山太郎 (2012)「属性叙述文の文法的意義」影山太郎(編)『属性叙述の世界』 pp.3-35, くろしお出版.
- 加藤重広 (2012)「日本語における属性の事象化と一時性—標準語と方言の差異に着目して—」影山太郎(編)『属性叙述の世界』 pp.113-141, くろしお出版.
- 金井勇人 (2010)「不定語(句)「誰」「誰か」「誰も」について」『国際交流センター紀要』 40, pp.21-29, 埼玉大学国際交流センター.
- 神尾昭雄 (1977)「数量詞のシンタックス」『言語』 6(9), pp.83-91.
- 岸本秀樹 (2005)『統語構造と文法関係』くろしお出版.
- 金田一春彦 (1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』 15, pp.48-56.[金田一春彦(編)(1976)『日本語動詞のアスペクト』 pp.5-26, むぎ書房.に再録]

- 楠見孝 (1995) 『比喩の処理過程と意味構造』 風間書房.
- 工藤真由美 (1982) 「シテイル形式の意味記述」『武蔵大学人文学会雑誌』 13(9), pp.51-88.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト：現代日本語の時間の表現』 ひつじ書房.
- 国広哲弥 (1989) 「五感をあらかわす語彙」『言語』 18(11), pp28-31.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店.
- 小林亜希子 (2010) 「非項位置としての SPEC-T」『英語と教育』 1, pp.56-75, 高知英語学英语教育研究会.
- 佐川誠義 (1978) 「日本語の数量詞移動について」『法政大学文学部紀要』 24, pp.31-46, 法政大学.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 育英書院. [1995 復刊 くろしお出版.]
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文—主語・主格・主題・叙述(部)などに関して—」『大阪外国語大学学報』 29, pp.111-121, 大阪外国語大学.
- 澤田浩子 (2002) 「認知カテゴリーと属性叙述に関する日中対照研究—「属性の階層構造」に基づく構文類型—」神戸大学博士学位論文.
- 澤田浩子(2012) 「味覚・嗅覚・聴覚に関する事象と属性」影山太郎(編)『属性叙述の世界』 pp.203-219, くろしお出版.
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』 大修館書店.
- 須田義治 (2010) 『現代日本語のアスペクト論』 ひつじ書房.
- 高橋太郎 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス(国立国語研究所研究報告 82)』 秀英出版.
- 竹沢幸一 (2000) 「空間表現の統語論—項と述部の対立に基づくアプローチ—」青木三郎・竹沢幸一(編)『空間表現と文法』 pp.163-214, くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』 ひつじ書房.
- 野田高弘 (2011) 「現代日本語の習慣相と一時性」『東京大学言語学論叢』 31, pp.197-212, 東京大学.
- 長谷川信子 (2014) 「文のアスペクト：動作主の欠落と状態性」『日本英語学会第 32 回予稿集』 pp.216-221.
- 藤井正 (1976) 「「動詞＋ている」の意味」金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』 pp.97-116, むぎ書房.

- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2004) 「日本語の主題—叙述の類型の観点から—」 益岡隆志(編) 『主題の対照』 pp.3-17, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探究』 くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』 pp.3-18, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2012) 「属性叙述と主題標識—日本語からのアプローチ—」 影山太郎(編) 『属性叙述の世界』 pp.91-109, くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』 くろしお出版.
- 眞野美穂 (2004) 「与格主語構文の構造について—「ニトツテ」との交替現象からの一考察—」 『KLS (Proceedings of the 28th meeting of Kansai Linguistic Society)』 24, pp.78-88.
- 眞野美穂 (2008a) 「叙述類型研究史 (海外編)」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』 pp.193-220, くろしお出版.
- 眞野美穂 (2008b) 「状態述語文の時間性叙述の類型」 益岡隆志(編) 『叙述類型論』 pp.67-91, くろしお出版.
- 三尾真理 (1979) 「疑問詞とその用法」 『日本語教育』 36, pp.73-90.
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』 刀江書店. [1972 復刊 くろしお出版.]
- 南佑亮 (2006) 「形容詞属性叙述文にみられる属性判断の階層性について」 『認知言語学会論文集』 6, pp.106-116.
- 三原健一 (1992) 『時制解釈と統語現象』 くろしお出版.
- 三原健一 (1998) 「数量連結構文と「結果」の含意(上)(中)(下)」 『言語』 27(16-18), pp.86-95, 94-102, 104-113.
- 三原健一 (2000) 「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」 『日本語科学』 8, pp.54-75.
- 三原健一 (2006) 「主格目的語構文」 三原健一・平岩健(共著) 『新日本語の統語構造—ミニマリストプログラムとその応用—』 pp.179-191, 松柏社.
- 三宅知宏 (1995) 「日本語の屈折要素と句構造」 『大阪大学日本学報』 14, pp.65-77, 大阪大学文学部日本学研究室.
- 森山卓郎 (1997) 「日本語における事態選択形式—「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造—」 『国語学』 188, pp.12-25.

- 吉川武時 (1976) 「現代日本のアスペクトの研究」 金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』 pp.155-327, むぎ書房.
- Abe, Yasuaki (1991) Tense, conditionals and arbitrary PRO interpretations in Japanese. *Proceedings of Sophia Linguistic Society 6*, pp.33-58.
- Abe, Yasuaki (1993) Dethematized subjects and property ascription in Japanese. *Formal Grammar Theory Series 3: Language, Information and Computation: Proceedings of Asian Conference, Seoul, 1992*, pp.32-144, Seoul: Thaeaksa.
- Akita, Kimi (2009) Grammar of Sound-Symbolic Words in Japanese: Theoretical Approaches to Iconic and Lexical Properties of Mimetics. Ph.D.dissertation, Kobe University.
- Carlson, Gregory N. (1977) Reference to Kinds in English. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Carlson, Gregory N. (1979) Generics and atemporal “when”. *Linguistics and Philosophy 3*, pp.49-98.
- Carlson, Gregory N. (1980) *Reference to Kinds in English*. NY: Garland.
- Chierchia, Gennaro (1995) Individual-level predicates as inherent generic. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.176-223, Chicago: University of Chicago Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, pp.89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, pp.1–52, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2008) On phases. In Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, pp.133-166, Cambridge, MA: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-linguistic Perspective*. NY: Oxford University Press.
- Cohen, Ariel and Nomi Erteschik-Shir (2002) Topic, focus, and the interpretation of bare plurals. *Natural Language Semantics 10(2)*, pp.125-

165.

- Collins, Chris (2005) Smuggling approach to the passive in English. *Syntax* 8(2), pp.81-120.
- Davidson, Donald (1967) The logical form of action sentences. In Nicholas Rescher (ed.) *The Logic of Decision and Action*, pp.81-95, Pennsylvania: University of Pittsburgh Press.
- de Swart, Henriette (1996) (In)definites and genericity. In Makoto Kanazawa, Christopher J. Piñón and Henriette de Swart (eds.) *Quantifiers, Deduction and Context*, pp.171-194, Stanford: CSLI.
- de Swart, Henriette (1998) Aspect shift and coercion. *Natural Language and Linguistic Theory* 16, pp.347-385.
- Diesing, Molly (1992) *Indefinites*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Dobrovie-Sorin, Carmen (2003) Adverbs of quantification and genericity. In Claire Beyssade, Olivier Bonami, Patricia Cabredo Hofherr and Francis Corblin (eds.) *Empirical Issues in Syntax and Semantics 4*, pp.27-44.
- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar: the Semantics of Verbs and Times in Generative Semantics and in Montague's PTQ*. Dordrecht: Teidel.
- Endo, Yoshio (1994) Stage/Individual nouns. *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1: MIT Working Papers in Linguistics* 24, pp.83-99.
- Endo, Yoshio, Yoshihisa Kitagawa and Jiyoung Yoon (2000) Smaller clauses. *The Nanzan GLOW Proceedings*, pp.73-95.
- Fernald, Theodore B. (2000) *Predicates and Temporal Arguments*. Oxford: Oxford University Press.
- Glasbey, Sheila (2006) Bare plurals in object position: Which verbs fail to give existential readings, and why? In Svetlana Vogeleer and Liliane Tasmowski (eds.) *Non-Definiteness and Plurality*, pp.133-160, Amsterdam: Benjamins.
- Glasbey, Sheila (2008) Existential readings for bare plurals in object position. In Johannes Dölling Tatjana, Heyde-Zybatow and Martin Schäfer (eds.) *Event Structures in Linguistic Form and Interpretation*, pp.355-385, Berlin: Walter de Gruyter.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.

- Grice, Paul (1975) Logic and conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (eds.) *Speech Acts*, pp.41-58, NY: Academic Press.
- Harada, Shin-ichi (1976) Quantifier float as a relational role. *Metropolitan Linguistics 1*, pp.44-49.
- Hasegawa, Nobuko (1993) Floating quantifiers and bare NP expressions. In Nobuko Hasegawa (ed.) *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, pp.115-145, Tokyo: Kurosio.
- Heim, Irene (1982) The Semantics of Definite and Indefinite Noun Phrases. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Heycock, Caroline (1993) Focus projection in Japanese. In Mercè González (ed.) *Proceedings of NELS 24*, pp.159-187, Amherst, MA: GLSA Publications.
- Heycock, Caroline (2008) Japanese -wa, -ga, and information structure. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, pp.54-83, NY: Oxford University Press.
- Higginbotham, James and Gillan Ramchand (1997) The stage-level/ individual-level distinction and the mapping hypothesis. *Oxford University Working Papers in Linguistics, Philosophy, and Phonetics 2*, pp.53-83.
- Hoji, Hajime (1985) Logical Form Constraints and Configurational Structures in Japanese. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Homma, Shinsuke, Nobuhiro Kaga, Keiko Miyagawa, Kazue Takeda, and Koichi Takezawa (1992) Semantic properties of the floated quantifier construction in Japanese. *Proceedings of the 5th Summer Conference 1991*, pp.15-28.
- Homma, Shinsuke (2015) Syntactic Determinants of Quantifier Scope. Ph.D. dissertation, University of Tsukuba.
- Horn, Stephen Wright (2012) 「日本語のいわゆる<主語から目的語への繰り上げ構文>」 影山太郎(編)『属性叙述の世界』 pp.221-243, くろしお出版.
- Husband, Matthew E. (2010) On the Compositional Nature of Stativity. Ph.D. dissertation, Michigan State University.
- Iatridou, Sabine (2000) The grammatical ingredients of counterfactuality. *Linguistic Inquiry 31*, pp.231-270.
- Ishii, Yasuo (1991) Operators and Empty Categories in Japanese. Ph.D.

- dissertation, University of Connecticut.
- Jäger, Gerhard (2001) Topic-comment structure and the contrast between stage level and individual level predicates. *Journal of Semantics* 18, pp.83-126.
- Kamp, Hans (1981) A theory of truth and semantic representation. In Janssen Groenendijk and Martin Stokhof (eds.) *Formal Methods in the Study of Language*, pp.277-321, Amsterdam: Mathematical Centre.
- Kato, Sachiko (2003) Derivational theta-marking: A minimalist approach to the complex predicate constructions in Japanese. *Gengo kenkyu* 124, pp.37-96.
- Kratzer, Angelika (1989) Stage and individual level predicates. Ms. University of Massachusetts.
- Kratzer, Angelika (1995) Stage and individual level predicates. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.125-175, Chicago: University of Chicago Press.
- Krifka, Manfred, Francis Jeffrey Pelletier, Gregory N. Carlson, Alice ter Meulen, Gennaro Chierchia, and Godehard Link (1995) Genericity: An introduction. In Gregory N. Carlson and Francis Jeffrey Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.1-124, Chicago: University of Chicago Press.
- Kiss, Katalin E. (1981) On the Japanese 'double subject' construction. *The Linguistic Review* 1, pp.155-170.
- Kitagawa, Yoshihisa (1986) Subjects in Japanese and English. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts.
- Koizumi, Masatoshi (1994) Nominative objects: The role of TP in Japanese. In Hiroyuki Ura and Masatoshi Koizumi (eds.) *Formal Approaches to Japanese Linguistics 1: MIT Working Papers in Linguistics* 24, pp.211-230.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) Whether we agree or not: A comparative syntax of English and Japanese. *Lingvisticae Investigationes* 12, pp.1-47.
- Lewis, David (1975) Adverbs of quantification. In Edward L. Keenan (ed.) *Formal Semantics and Natural Languages*, pp.3-15, Cambridge, MA: Cambridge University Press.
- Magri, Giorgio (2010) A Theory of Individual-level Predicates Based on Blind

- Mandatory Scalar Implicatures. Ph.D. dissertation, MIT.
- May, Robert C. (1977) *The Grammar of Quantification*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Milsark, Gary L. (1974) *Existential Sentences in English*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Milsark, Gary L. (1979) *Existential Sentences in English*. NY: Garland.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?: Unifying Agreement-Based and Discourse-Configurational Languages*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Musan, Renate (1995) *On the Temporal Interpretation of Noun Phrase*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Nakajima, Heizo (1990) Secondary predication. *The Linguistic Review* 7, pp.275-309.
- Nakanishi, Kimiko (2008) The syntax and semantics of floating numeral quantifiers. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, pp.287-319, NY: Oxford University Press.
- Nomura, Masashi (2005) *Nominative Case and AGREE(ment)*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In Liliane Haegeman (ed.) *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, pp.281-331, Dordrecht: Kluwer.
- Rooth, Mats (1995) Indefinites, adverbs of quantification, and focus semantics. In Carlson N. Gregory and Francis J. Pelletier (eds.) *The Generic Book*, pp.265-299, Chicago: University of Chicago Press.
- Rothstein, Susan (1983) *The Syntactic Forms of Predication*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru and Hiroto Hoshi (1998) Control in complex predicates. In *Report of the Special Research Project for the Typological Investigation of Language and Cultures of the East and West*, pp.15-46, University of Tsukuba.
- Sano, Masaki (1985) LF movement in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 18, pp.245-259, International Christian University.
- Smith, Carlota (1991) *The Parameter of Aspect*. Kluwer.

- Stump, Gregory T. (1985) *The Semantic Variability of Absolute Construction*. Dordrecht: Reidel.
- Sugioka, Yoko (1984) Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English. Ph.D. dissertation, University of Chicago.
- Tada, Hideaki (1992) Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14, pp.91-108.
- Takano, Yuji (2003) Nominative objects in Japanese complex predicate constructions: A prolepsis analysis. *Natural Language & Linguistic Theory* 21(15), pp.779-834.
- Takezawa, Koichi (1987) A Configurational Approach to Case-marking in Japanese. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Tomioka, Satoshi (2007) Pragmatics of LF-intervention effects: Japanese and Korean *wh*-interrogatives. *Journal of Pragmatics* 39(9), pp.1465-1654.
- Tonoike, Shigeo (1980) Intra-subjectivization. In Yukio Otsu and Ann Farmer (eds.) *MITWPL 2: Theoretical Issues in Japanese Linguistics*, pp.137-148.
- Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Function in Universal Grammar*. NY: Oxford University Press,
- Olsen, Mari B. (1994) The Semantics and pragmatics of lexical aspect features. *Studies in the Linguistic Sciences* 24, pp.361-375.
- Olsen, Mari B. (1997) *A Semantic and Pragmatic Model of Lexical and Grammatical Aspect*. NY: Garland.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. NY: Cornell University Press.
- Watanabe, Akira (2008) The structure of DP. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, pp.511-540, NY: Oxford University Press.

各章と既発表論文および口頭発表との関係

第 1 章

新規執筆

第 2 章

新規執筆

第 3 章

鈴木彩香 (2014)「ガ格の総記／中立叙述用法と 裸名詞句の総称／存在解釈の統一的説明」『言語学論叢』オンライン版 7号(通巻 33号), pp.36-50, 筑波大学一般・応用言語学研究室.

第 4 章

鈴木彩香 (2015)「習慣文のアスペクト形式と意味解釈—単純ル形とテイル形の対立を中心に—」言語学会第 150 回大会口頭発表.

鈴木彩香 (2016)「習慣文のアスペクト形式と意味解釈—単純ル形とテイル形の対立を中心に—」『日本語と日本文学』60, pp.1-14, 筑波大学日本語・日本文学会.

第 5 章

鈴木彩香 (2016)「単純形状態述語のとり主格目的語の解釈とイベント性」関西言語学会第 41 回大会口頭発表.

第 6 章

鈴木彩香 (2012)「日本語オノマトペ述語の形式について—スル・シテイル・ダの選択基準を中心に—」『日本語文法』12(2), pp.162-178.

鈴木彩香 (2016)「日本語オノマトペ動詞に見られるル形とテイル形の対立—直接感覚を表す意味領域を中心に—」NINJAL 国際シンポジウム「日本語と世界諸言語のオノマトペ」ポスター発表.

第 7 章

新規執筆